ENIX ORIGINAL NOVELS

小説 タイムボカン

ヤッターマン　山本　優
オタスケマン　曽田博久
逆転イッパツマン　高山鬼一

エニックス文庫

勇気と正義の味方、われらのヒーローと、やることなすことドジばかりの悪玉トリオが世紀を越えた追いかけっこを展開。
世の中の涙と笑いをペーソスとし、一世を風靡したＴＶアニメ「タイムボカンシリーズ」がついに小説化。あの爽快ギャグアクションが、現代に甦る……。
解き明かされることのなかつた謎、隠されていた魅惑の世界が、あなたを異次元へといざなう!?

イラスト・上北双子
©タツノコプロ

エニックス文庫

小説

タイムボカン

——ヤッターマン・オタスケマン・逆転イッパツマン——

山本　優
曽田博久
高山鬼一

ENIX

イラスト／上北双子

小説　タイムボカン

ヤッターマン・オタスケマン・逆転イッパツマン

目次

ヤッターマン純情外伝
オダテブタは愛に目覚める……5
オタスケマン異聞
一九九〇年セコビッチの冒険……88
逆転イッパツマン・番外篇
実録!? 恐怖の魔界王を倒せ!……177

ヤッターマン純情外伝

オダテブタは愛に目覚める

山本　優

プロローグ

　空はあくまでも青く澄みわたり、樹々の梢では鳥たちがさえずる。街ゆく人たちの顔はニコニコと、まるで平和そのものだった。
　ほんとうは信じられない犯罪が毎日ダース単位で新聞やテレビをにぎわしていたのだけれど、われらのヤッターマン、アイちゃんガンちゃんにとっては、かつてドロンボーと繰りひろげた正義の死闘に比べれば、警察にまかせておけば事たりることに過ぎなかった。

「んもう！　ガンちゃんてば、ばっちい」
　思わず、そのオデコを指でつついてしまったアイちゃん。
「てててててっ！」
　全身包帯だらけの透明人間みたいなガンちゃんは、病院のベッドの上で跳びあがった。吊りあげた片脚のギブスがブランコのように揺れている。
　アイちゃんは、ガンちゃんの大好きなハーゲンダッツのアイスクリームを毎日差し入れにやってきていた。両手の自由がままならぬガンちゃんの、そこだけ自由な口に舐めさせてやっていたのだが、枕にベチョッとそそうをしてしまうのはまるで子供と一緒。
「これが、ついこの間まで、JACのスタントマンもびっくりのヤッターマン一号の姿かと

思うと情けなくなるわ」
「んなこといったって……」
アイちゃんは包帯のおデコをつついたことなど気にするふうもなく、かいがいしくガンちゃんの枕カバーを替えてやる。
ちかごろメッキリ女のコらしくなってきたアイちゃんの可愛い胸の先が、鼻に触れて、その甘酸っぱいいい匂いにクラクラしながらポー……となってしまうガンちゃん。
正義の味方も、いまやハイティーン。何やら胸騒ぎのお年頃なのだ。
――説明せねばなるまい。
ガンちゃんが、ここ新宿は歌舞伎町の繁華街の外れの救急病院に担ぎこまれたのは一週間前。
もとはといえば、このところナリをひそめたドロンボーの悪事に、暇をもてあましたガンちゃんは、どっぷりファミコンに夢中。明けても暮れてもゲームの山に埋もれて目はウツロ。モニター画面を離れるのはトイレに這うときだけという中毒ぶりだった。
この事態を嘆きかなしんだアイちゃんは、これではいざドロンボーが再始動したときにはヤッターマン活動もままならない……と、思いあまったあげくバイクのツーリングに誘いだしたのだ。
案の定、カーブを曲がりそこなって、横断歩道をゆく幼稚園児たちの列を避け、宙にバウ

ンドしたまではよかったが、いつもなら三回転半宙返りで、見事に着地するはずのヤッターマン一号のテクも、ナマリにナマリ、メットの頭からしたたかに着地。

「オラ、どうしたんだべー」

うちどころが悪かったのか、ナマリついでに、へたな東北ナマリのダジャレをとばして、失神してしまった——というわけなのだ。

「ったく。情けないったらありゃしない」

アイちゃんの嘆きをよそに、鼻先を離れていく、甘い乙女のかおりに、ガンちゃんはちょっとがっかりした。

コノコノ、いけず、えっち。モッコリ少年！　ま、それはともかく——。

その病室の開け放たれたドアから、清掃道具の運搬車を押して、チラリと室内をうかがうオジサンがいたことを、ふたりは知るよしもなかった。

そのオジサンこそ、本来は下に向いているはずのふたつの鼻孔（びこう）が、まっすぐ正面を向き、オラがの里さぁ〜のカールおじさんの兄弟と見まがうまっ黒丸ヒゲの、あのトンズラーの世を忍ぶ仮のパートタイマーの姿だったのだ。

くしき因縁というべきか、はたまた単なる偶然というべきか。

そして、その偶然が偶然を呼んで、まがうことなき必然が、ヤッターマンとドロンボーを結びつけるのに、そう時間はかからなかった。

偶然のひとつは、ガンちゃんの入院している病院にほどちかい、新宿区立ヨドバシ中央小学校の校庭で起こった。

「うわーっ？　おかーちゃーん！」

五年生ながら、当校でならぶものとてない悪ガキのツトムくんは、鉄棒の下でまっ青になって自分のオチンチンを見下ろしていた。

悲鳴をあげて逃げちった女の子たちを、さっきまで得意げに鼻で笑っていたのが嘘のようだった。

みるみる膨れるオチンチン！　ツトムくんの勢いのいい水飛沫の下には、丸まるとふとったミミズが、まるで嘲笑するように踊っていた。

ツトム君は、超ハイテクマンションの我が家にとんで帰った。

さしも悪ガキの権化と恐れられたヤマシタさんちのツトムくんは、それっきり学校に出てこなくなった。

「キャーッ、やめてやめて、やめてててっ！」

ときならぬ悲鳴があがったので、楽屋にいたマネージャー、メイク、スタイリスト、お付きさんたちが、いっせいに化粧前と呼ばれる鏡の前で胸をかきむしっているナンノ鹿子のほ

うを振り向いた。

ナンノといえば、いまや飛ぶ鳥を落とす勢いの超売れっ子アイドル。歌に映画にお芝居にひっぱりダコの清純派。

その超アイドルが、椅子から滑り落ち、手にした口紅で、自分の顔中、グルグル渦を書いて悶えているではないか。

「やめて、ゆるして、ごめんなさいいいいっ！」

一瞬何が起こったのかわからないスタッフたちは、口をあんぐり、どうしていいかわからない。

超過密スケジュールの合間をぬって、やっとスタンバイしたテレビ局の控え室で、ナンノ鹿子は口から泡をふいて、白目を剝いたまま、その場に失神してしまった。

新曲『どうしても愛せないの』のキャンペーンの矢先のことだっただけに、スタッフのあわてぶりときたら、コマ落としのドタバタギャグを見てるみたいだった。

これが、偶然のふたつ目だった。

三つ目は、超満員の武道館のステージだった。総立ちキャンキャンと呼ばれて、いまやアクションポップシンガーで人気絶頂を誇る大泉キョーコがヒット曲『南の島のコブタちゃん』を歌い踊っているときに、それは突然やってきた。

大ぶりのアクションで、舞台せましと踊りはね、右腕をグルグル回しているときだ。突然声が出なくなった。歌詞を忘れたわけではない。ほんとに声が出ないのだ。最初はだれも気がつかなかった。客席は歓呼の声をあげて、手拍子をとってノリにノッている。だが、いつまでたっても、キャンキャンは激しく右腕を回すだけだった。

やがて、ひきつったその顔は、恥ずかしさでまっ赤になった。

瞬間、セットの裏に走りこむキャンキャン！　恥ずかしさでほてった体がたまらなく苦しいのか、舞台衣装を脱ぎだして、セットの裏に攀じ登っていく！

ときならぬスターのストリーキングまがいの行動に会場は騒然となってしまった。

ひりつく乾いた喉の奥から、やっとひと言だけ声が絞りでた。

「ごめんなさーい！」

だが、だれも、そのほんとうの意味を知るものはいなかった。

可愛い女の子のストリーキングならまだ許せる。あろうことか、見たくもない六十ジイさんのストリーキングが国会で起こった。

木登り大好きな総理大臣が、たまたま他人のプライバシーを侵害したことで、国会で追及され、返答に詰まった。そのソーリは、何を思ったか、その場を遁走。発見されたときには、縞のトランクス一枚の姿で、浜松町の貿易センタービルを攀じ登っていたのだ。キングコン

グじゃねーつうの。――それはともかく。

おそらく、それはすべての始まりの、ほんの一部でしかなかったのだろう。

この時点では、ヤッターマンもドロンボーもまさか、こうした事件にかかわりあうとは夢にも思ってはいなかった。

かくいう説明お兄さんこと、このわたくしにも、まったくあずかり知らぬことなのだから……。

ACT1　オダテブタはどこに

「はあーっ……」

出るのは溜(た)め息(いき)ばかりの中年のオジサンがひとり、歌舞伎町裏の新宿公園のベンチで肩を落としている。

枯葉散る公園は、すでに冬支度。かつての栄光を回想するオジサンの心のなかも冬支度。

この人こそ、だれあろう、かつて地球の裏表、はたまた時空を駆けめぐり、現在未来過去宇宙、悪の限りをつくした、あの栄光のドロンボーのお調子おじさん、ボヤッキーのおちぶれた姿なのだ。

トンガリ鼻にハリガネちょび髭(ひげ)をねじあげて、燃えあがるエネルギーそのものの眼で、話

しだしたら止まらない、あのボヤッキー節はどこへいってしまったのだろーか？

「ドクちゃん……」

ボヤッキーは、主人から放りだされた飼い猫のように、視点の定まらない目で、雪もようの空を見あげて、今日もまた途方に暮れるのだった。

が、落ち目の悪役とはいえ、そうそう悪いことばかりは続かない。

雌伏ン百日、開店休業状態になっていたドロンボーにも、復活の兆しがそこまで迫っていた。

——説明しよう。

行動力旺盛なドロンボートリオも、あのドクロベエの指令なくしては、全身を駆け抜ける興奮ものの悪事を企画発想できなかった。

そのドクロベエから、待つこと久しい感激のメッセージが届いたのは、雪の降るある深夜。野良猫がやけに鳴くその夜のこと……。

セコい悪事もことごとく外れ、軍資金もつき、生活費にも事欠く三人は、ドロンジョの安アパートに身をよせあいながら、一杯のヤキソバＵＦＯを分けあっていた。

明日はガスも止められる。水道も。電気も。おまけに家賃の滞納で、大家から追い立てを

くらう前日の、いや、もう深夜。当日だった。
「これじゃ、ガス自殺もやれないまんねん」
溜め息をつくトンズラーの口からヨダレが、ホカホカのヤキソバの上に……垂れた。
「きっちゃなーい！　このスカポンタン！」
ドロンジョに頭の後ろをどつかれて、トンズラーの顔はヤキソバのなかにめりこんだ。
「あー！　あー！　あー！」
絶句したボヤッキーが、血の網マナコを飛びださせて、トンズラーの胸元をつかんだ。
「な、なんてことをしてくれくれくれくれちゃったんだよもー！　このウスラトンカチ」
「責任とってワテ、全部たべまんねん」
「あーっ、最初からその気だったのねー！　このスカポンタン！」
「アカポンタン！」
かくも食べものの恨みは恐ろしい。
ついに、一杯のヤキソバをめぐって、さしも鉄壁のチームワークを誇ったドロンボートリオはつかみあいになり、ここに決裂した。
「あたしは自立するっっ！　あんたたちと一緒じゃその日の生活どころか、お嫁にもいけないわっ！」
リーダーの宣告は、トンズラーとボヤッキーの空腹にズシンと重かった。

え〜、どうやら経過が長すぎるようだ。先を急ごう。
その夜。不夜城と呼ばれる歌舞伎町の路地裏で、ボヤッキーは倒れた。
空腹のボヤッキーに雪の路での雪倒れはこたえた。しかし、何が幸運をもたらすかわからないものだ。ボヤッキーの鼻先に、キラリと光る五〇〇円硬貨があった。
五〇〇円硬貨を握りしめて、立ちあがったボヤッキーの目に、ケバケバしいネオンが飛びこんできたのだ。
ボヤッキーは感激で胸が熱くなった。嬉(うれ)し涙で、ネオンがぼやけてしまうほどだった。
なんとそのネオンは、あの懐かしいドクロマーク！「日本一安い！　一時間五〇〇円！」と大きく書かれ、その名もテレクラ『ドクちゃん』と輝いていたではないか！
「も〜、これはあのドクちゃんしかいない！」
空腹もわすれて、ボヤッキーは、その小さな店の階段を駆けあがった。
そして、受付カウンターに、まがうことなきドクロマークのカセットテープを発見したのだ。
引っ越し荷物をまとめて、いまや安アパートを出ていこうとしたドロンジョやトンズラーが、ボヤッキーの報を聞いて、その『ドクちゃん』に集合したのはいうまでもない。
「どーれ、控えるダベェ〜」

その懐かしい声に、三人は滂沱（ボーダ）の涙を流して膝（ひざ）をよせあった。これでまた、あの栄光の悪事に返り咲くことができる。悪役主役のあの興奮ものの復活の時がくる……。
「もう、ドクちゃんたら、いけず〜。いままで散々ほったらかしにしておいて〜ン」
「さすがはドクロベエさまでんがな。わてらにお店ばかりか、金庫のなかにドッサリお金まで用意しておいてくれて〜」
「も〜、ドクちゃんも人がわるいんだわァ。危うく行き倒れになるまで、しらせてくれないんだもーん。運命と偶然を支配するドクちゃんが、いいかげんボクたちの運命までオモチャにしてくれちゃってェ」
非難がましい言葉とは裏腹に、瞳（ひとみ）はウルウルのボヤッキーであった。
が、恩きせがましく当座のアジトと軍資金を用意したのをクドクドいうばかりで、肝心の悪事のメッセージが、なかなか出てこない。
テープは終わりかけているというのに……。
トリオは次第にイライラしてきた。
そして、最後のメッセージがこれだった。
「心して聞け。ドロンボーどもよ。この暗号連絡は、一〇〇回のリピートをもって、自動的に消滅する。これは、その一〇〇回目のリピートなのダベェ。願わくば、この最終回を待つことなく、お前たちの耳に達することを」

危ないところだったのだ。トリオの顔に脂汗が噴きだしていた。

「わが究極の悪のプロジェクトは、予想をはるかに上回って、ちゃくちゃくと進行しつつある。が、やはり恐るべき過ちも、現実となりつつある。わしは、間もなく神に匹敵するこの恐るべきプロジェクトから追放され、封じこめられるであろう」

そこから、激しいノイズが、三人の耳を揺さぶりつづけた。

しかし、ひと言も逃すまいと、三人は必死で耐えた。と、ドクロベエの絶叫ともとれる最終の指令が高く細く尾をひいて聞こえてきたのだ。

「ひぇぇぇぇぇぇ〜。オダテブタ……オダテブタを捜せェェェ……。O…A…E…U…A T…B…T…D……。繰り返す……（ノイズ）……（ノイズ）……（ノイズ）……かくて、オダテブタを制するものは、世界のすべてを牛耳ることになるのだべェ……んむむむぅ……わし亡きあとは、ドロンボー、おまえたちに、その力をゆだねるべェ……しからばわれもよみがえらん……ンべべべべェ」

そして電話は、溶けてしまった……。

ドロンボーたちはしばらく、声もなく放心して、座りこんだままだった。

「ドクちゃん、消されちゃったのかしらン」

「オダテブタって、あの、わいらのメカで、ひょっこり出てきたあの木登りしよる、チビ豚でっかいな?」

「よーく、ボクちゃんをオダテてノセてくれたっけ。なーつかしいな〜、あのメカ豚ちゃん」
「スカポンタン！　懐かしがってる場合か！　これはドクちゃんのいまわのキワのダイイングメッセージというやつなんだよっ」
「なんでんねん、そのダイニングの御用聞きみたいなんは？」
「スカポンタン！　アカポンタン！　それでも仮にも東大めざしてた男かいっ⁉」
シュンとなるトンズラー。床に指で『の』の字を書いてオチこんだ。
「ドロンジョさまン。いま、内輪揉めしている場合ではありましぇーん。そのオダテブタを一刻も早く捜しださないと！　再びボクちゃんたちの悪は栄えなーい！」
ドロンジョもハタとわれに戻った。
「だけど、どこをどうやって、あのチビメカ豚を捜しだしたらいいんだい？」
「それは――」
ボヤッキーの頭のなかは、快速回転して結論をはじきだした。
「その手がかりは、あの呪文みたいな、アルファベットにあるのではないでショーカ？」
「しょーか！　しょれだね！」
ドッと、ボヤッキーたちがコケたのはゆーまでもない。
「だけど、ボヤッキー？　おまえ、あのヘンテコリンな暗号を、憶えているのかい？」

「しょれは――ドロンジョさまが……」

顔を見交わして、ふたりは絶句した。

ふたりとも『トンズラーは？』とは聞いてくれない。ハナからあてにはしていないのがアリアリとわかる。

トンズラーは、またも深くイジけて、電話台を天井に放りあげた。

「んてー！　なにするでコローン！」

天井の電灯の笠の陰で、盗聴していたサイコロコロ助……ではない、サイコロメカのオモッチャヤマが、電話をモロにぶつけられて、転がり落ちてきた。

「あーっ!?　おまえはーっ!?」

オモッチャヤマは階段を転がるように逃げた。

「逃がすなーっ！」

「アラホイサッサー！」

「あのサイコロメカの盗聴器を奪いとれば謎の暗号がーっ！」

深夜とはいえまだケバケバしい歌舞伎町の空を、オモッチャヤマはタケコプターを……いや、もとい、チャマコプターをフル回転させながら、アイちゃんの待つ白金台の家をめざしていた。

昼間、バーガーショップで、くしくもボヤッキーの姿を発見したアイちゃんは、それとなくあとをつけ、テレクラ『ドクちゃん』を発見。

その、あまりにも、人の目をはばからない店の名前とマークに驚き、こんなところにこんなお店のあることをいままで知らなかった自分の迂闊さにも驚いていた。

だって、こんなところを歩き回るなんて、校則違反だし、正義の美少女の徘徊する場所ではなかったし……と、いいわけがましく自分で自分にいいきかせ、オモッチャマに、何はともあれ、この店の張りこみを託したのだった。

展開は、風雲急を告げてきた。

オダテブタにまつわる謎とは？

そして、オダテブタはどこにいる？——

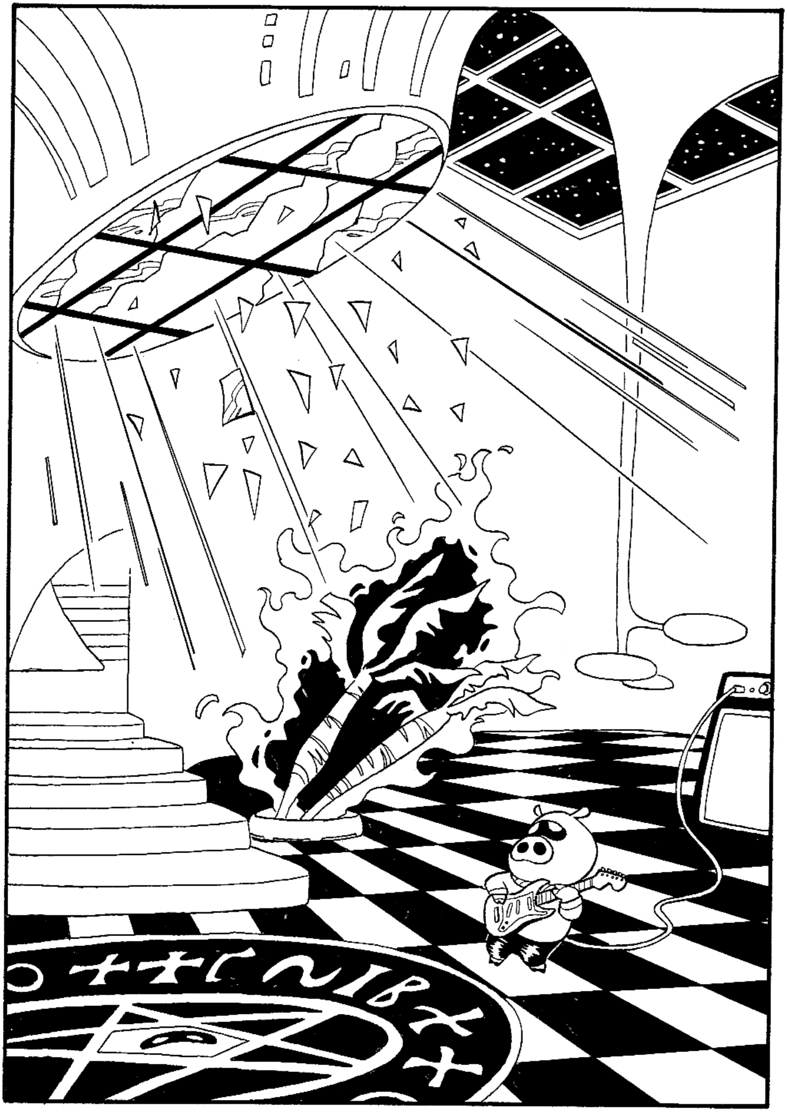
ACT2　オダテブタのザンゲ

空には満天の星が輝いていた。

『そいつ』は、見仰ぐことはしなかったけれども、すべての輝きが、手にとるようにわかった。なぜなら、『そいつ』のココロのなかには、そっくりおなじ、キラめく星座がギッシリ詰まっていたのだった。

『そいつ』はちいさな溜め息をひとつつくと、閉じていたツブラな瞳をあけた。

ウオーター・ソファから、ゆっくりと身を起こして、アンプに立てかけてあるエレキギターを手にとると、ゆっくり立ちあがる。
ひととおりチューニングをおえると、ちいさな唇を唾でしめらせた。
『そいつ』は、哀しみをかみしめるように、夜空を一瞬仰いだ。
満天の星は、総ガラス張りの天井から手にとるように見えている。
4LDKのひろさはあろうかと思われるそのペントハウスのリビングに『そいつ』はひとりきりだった。
三六〇度の眺望をめぐらす総ガラス窓の下には、星の輝きをもあざむく赤青緑黄の大都会の灯が宝石のようにキラめく海となってひろがっていた。が、その喧噪さえ、ここには届いてこない。
『そいつ』は、まったくの静寂のなかで、ピカピカの大理石の床に足をひろげて踏んばった。
見仰ぐ星が、涙でかすみかけた。
と、それを吹きとばすかのように、『そいつ』の爪先から、弦の叫びがあたりの静寂を引き裂き、激しく哀しく哭くかのように放たれた。
狂ったようなライトニングが縦横にほとばしり、駆けめぐった。弦の叫びはさながら稲妻となって、あたりの窓ガラスを砕きとばした。



割れたガラスの向こうから灼熱（しゃくねつ）の陽光が飛びこんでくる。あたりは常夏の海と島と、青い空を衝（つ）くように伸びた椰子（やし）の木々。

窓の外観はさながら次元の壁が砕けるように様相を一変させていた。凄（すご）い！　なんてＳＦだ！　ギターの弦をかき鳴らす、そいつの足元に、汗がポタポタとしたたり落ちてくる。

それは熱さのせいばかりではない。狂奔（きょうほん）するライトニングに身をよじる熱演のせいでもない……それは『そいつ』の体のなかから絞りだされる、たとえようのないザンゲの脂汗なのだった。

孤独な演奏に、観客はいない。

ギュッと目を閉じて、狂ったように演奏する『そいつ』の長い睫（まつげ）には、真珠のような雫（しずく）が光っている。

ミキハウスのショートジャンパーの下で、メタリックのようなスベスベの素肌がピンク色に染まり始める。

首に巻いたバンダナは汗みずく。一〇〇センチにみたないタッパをのけぞらせて、『そいつ』の爪は魔術師のように弦を哭かせる。

その全体重を支える二〇センチにもみたない彼の脚は、ピッチリした黒いスパッツで震え、その下には、手入れのいい透明なペディキュアに蹄（ひづめ）を光らせて、しっかり踏んばっている可愛い足がある。

演奏が最高潮に達したとき、あたりに異変が起こった。椰子の木が、炎をあげて燃えあがり次々に倒れていく。島という島は沈んでいき、そして弦は砕けちってしまった。

『ふんふんふんっ』

年のころなら十二、三。まだあどけない少年みたいなスリムな肩から、ギターを外して放り投げると、『そいつ』は片隅のホームバーのカウンターのスタンド椅子に、ちょこんと肉づきのいいお尻を乗せた。

今日のザンゲの演奏は、まァまァといったところだ。

『そいつ』は、自動ボタンを押して、マニピュレーターがつくったミルクシェイクがカウンターを滑ってくるのを受けとめた。

かたちのいい鼻が、すこしはにかんだように小さくめくれる。和毛(にこげ)がうっすらと汗ばんでいた。

カウンターの壁に飾ってあるアド・ミラーにグラスを掲げると、

ブヒ……、と『そいつ』は小さく鼻を鳴らして、ココロのなかで呟いた。

『君の瞳に乾杯』

説明せねばなるまい。

これが、かの有名なオダテブタ。『ブタもおだてりゃ木に登る』の名言を残し、一世を風(ふう)

靡(び)して、全国の女子学生に惜しまれつつ、行方知れずとなっていた、あのオダテブタに違いない。

だが、あのメカ豚が、いかなる変身をとげたのか？　いかなる運命のいたずらか？　突然変異か染色体の組みかえか？　はたまた遺伝子の注入か？　神の手をあざむくこの変貌(へんぼう)ぶりを、どう説明すればよいのだろーか。

それも、魔術師まがいのロックンローラーになっていたなんて！

だが、いまはただ、ヤッターマンの到着によって、その解明を待つしかないようなのだ。

うーむ……わたしの説明の糸口を阻(はば)むのは、あのドクロベエの見えざる呪力(じゅりょく)というべきか？　はたまた意図的な単なる怠慢というべきか……。

そ、それはともかく――――。

この孤独なオダテブタのザンゲの演奏が、巷(ちまた)の世相を故(ゆえ)なき混乱に陥(おとし)れていたとは、だれが知ろう。

話は、ファンタジックでメランコリーな世界から、突如、生臭い現実の世界へと戻ることを許していただきたい。

ときは深夜。ところは新宿歌舞伎町のはずれの救急病院。いわずと知れたガンちゃんが全身包帯だらけで入院していたあの病室だ。

「どこ？　どこよ？　いないじゃないのスカポンタン！」
闇に乗じて、病室に忍びこんでいたのは、ドロンボートリオ。
あのドクロベエの断末魔の指令をオモッチャマに盗聴され、手がかりを失い、まかれてしまった三人だったが、そこは運命のクサレ縁、パートで清掃員として、この病院に働いていたトンズラーが、しっかりガンちゃんの居場所をマークしていたのだったが……。
「おかしいでんな？　絶対この病室にまちがいないまんねん」
セパレーターで区切られた四人部屋のベッドは、ことごとくモヌケの殻だった。
「三人は、たしかに今日退院ということは聞いてましたけど、あの全身グルグル巻きの一号が退院なんかでけしまへん」
「じゃぁこれは一体どういうことなんだよー」
「あのサイコロ小僧は絶対ここにくるから、安心してても大丈夫って、いってたのはどこのだれなんだい？　も～、ほんとうに役たたず。スカポンタンのアカポンタン！」
どつき回されて、したたかに窓辺（まどべ）にふっ飛んだトンズラーは、しかし、頭上ちかくに微（かす）かなローターの回転音を聞いて、そっとカーテンをあけた。
いましも屋上に降りたとうとしているミナシゴ・ハッチ型のヘリ。ヤッター・ハッチだ。
シリーズは違うとはいえ、タツノコ製のメカを愛用しているとは、なんとも義理がたい。
コクピットには、ヤッターマン二号ことアイちゃんとオモッチャマの姿が見える。

「一体どういうことでまんねん？」
「しめたっ。きゃつらも、一号が、ここを抜けだしたか、誘拐されたかを知らずにきたんだよ。ここはしっかり拉致する手だよっ」
「アラホイサッサー！」
　トリオはしっかりと窓から屋上に攀じ登る。

「きゃーっ！　なにすんのようぅぅぅぅ……」
　ハッチのハッチから降りたつ間際のアイちゃんはいきなり襲いかかってきた黒い影に、クロロホルムを嗅がされて、もがくうちに意識が遠のいていく……。オモッチャマもガムテープでグルグル巻きにされ、その場で動きを封じられてしまった。
「やーったやった。やったやったー！」
「ボクちゃんたちの早業も、ン年間のブランクを越えて、見事に甦りましたねぇ〜感激！」
　三人が小躍りしていたのも束の間、屋上の給水タンクから、白い人影が躍りでてきた。
「ケンダマジーック！」
　闇を裂いて、それが、瞬くうちに三人を薙ぎ倒した。
　失神しかかる三人の前に、降りたつ白い包帯人間の高笑い、
「はーははは、ヤッターマンのいる限り、この世に悪は栄えなーい！」

次の瞬間、全身から包帯が飛びちって、颯爽たるヤッターマン一号の雄姿があった。
「う〜〜、まぎらわしい登場のしかたして恰好つけてくれちゃって〜……」
「まーだ懲りないマンネリ啖呵きるなよナー」
「卑怯やお経やモモヤの花ラッキョーや〜……」
ひと言ずつ、悔やしまぎれのセリフを吐いて、トリオはなかよく折りかさなって伸びた。
「アイちゃんしっかり！」
両の腕に抱きかかえられて、ぼんやりしたアイちゃんの視界のなかで、一号は、ニッコリと笑っていた。月明かりに映える皓歯をキラリと光らせて……。

「なぁんだ、そうだったの。ガンちゃんも人がわるいな〜」
まだ微かにクロロホルムの酔いを頭に感じながら、アイちゃんこと二号は、周囲の壁面にギッシリと明滅するコンピュータ機器に顔をめぐらせた。
中央のコンソールにはパソコン通信のモニター画面が、一号の弾きだす呼びだし情報を次々に映しだしていた。
「オモッチャマの盗聴したドクロベエのダイイングメッセージみたいな暗号が、突破口になるかもしれない。……それにしても……オダテブタが一枚嚙んでいたとはなぁ……」

——説明せねばならない。

アイちゃんが、気つけ薬を嗅がされて、我にかえったここは、どこあろう救急病院の給水タンクのなか。

給水タンクとはまっかな偽り、実はガンちゃんの情報解析センターなのだった。ちなみにここの院長はインターポール（国際刑事警察機構）の極東方面の陰のボス。ガンちゃんが、かの有名なヤッターマンであることを知って、こころよくこのカムフラージュ施設を提供してくれたのだ。

が、この界隈の横断歩道に出没する緑のオジサンことトンズラーの姿をみとめたときから、ガンちゃんは慎重のうえにも慎重を期したのだ。

（ドロンボーなどはこわくない。が、その陰に暗躍する、運命と偶然を支配するドクロベエに察知されては、超世間的な悪の犯罪から、正義を守るのはむずかしい）

と、判断したからだった。

実際、超世間的な犯罪の予兆を、ガンちゃんはこの秘密のアジトで受信し、解析していたのだった。

「ま、敵をあざむくためには味方からっていうじゃない」

いいながら頭をかくガンちゃんは、あの交通事故も、ほんのかすり傷だったことを白状した。

入院していれば、毎日アジトに寄宿しているようなものだ。緑のオジサンのトンズラーの目にも触れずにいることができる。アイちゃんの心配をよそに、毎夜、病院が寝静まってから、屋上で、鍛練（たんれん）を怠らなかったガンちゃんではあったのだ。

しかし、このいいわけはあまり正確ではない。ガンちゃんとて生身の健全な体と心を持つ男のコだ。女のコに関心がないといえば嘘になる。

それでなくとも、魔の街、歌舞伎町。いかがわしい誘惑に事欠かない。

けれどもそこは正義の味方。健全な青少年から顰蹙（ひんしゅく）をかうことは断じてできないサダメだった。

隣接する乙女の園、聖薔薇（せいばら）学園の校門前に、わけもなく散歩に行き、交差点で、振り返って思わせぶりな溜め息をついてくれるお嬢さんたちの視線に、せめてドキドキとするのが精いっぱいなガンちゃん。

そのガンちゃんにとって、毎日、かいがいしくアイスクリームを差し入れにきて、枕カバーをとり替えるときに、至近距離で乙女のかおりをふりまいてくれるアイちゃんは素敵だったし、ときおり鼻先に触れる、女のコらしい胸先の感触が、ガンちゃんにとっては唯一の青春のアバンチュールだったのだ。

えーい、なんという可哀そうな正義の少年。仮面に隠した正義の心、哀しきモッコリくん。

――それはともかく。

いまや、オモッチャマがもたらした、ドクロベエのダイイングメッセージに、ガンちゃんが解きあかせなかった謎の超世間的事件の核心が明らかになろうとしていた。
「オモッチャマ、いくらドロンボーとはいえこの寒風でのびたままにしておいたら風邪をひいてしまうかもしれないわ。毛布をかけてきてあげて」
ヒロインはこーでなくてはいけない。いかに宿敵とはいえど、その健康をおもんぱかる優しい心づかい。
「わかったでコロン」
毛布を抱えて、給水タンクの外に出るオモッチャマは、投げやりに毛布を放り投げただけだった。
このメカの冷たい心が、ヤッターマン主従を窮地に陥れることになろうとは、思いもよらぬことだった……。しかし、メカとはいえど、子供の正直な反発心をだれが責めることができようか……。
倒れていたドロンボートリオは息をしていなかった。死んだわけではない。分身変わり身の術を使ったのだ。
簡単にいってしまえば、倒れていたのはカカシもどきの人形。本物は、しっかり、アジトの物陰で、ヤッターマンの動静を、息を殺して見守っていたのである。

「ううむ、なるほどね」
ヤッターマン一号は、キーボードを叩く手を休めて、二号を振りかえった。
「単純なアナグラムさ」
「アナグラムって？」
「単純に訳すと、字謎。つまり字の配列の置きかえだね」
「あの、変なアルファベットのこと？」
「そうさ。頭からお尻、そして前後繰りかえす。つまりO…A…E…U…A　T…B…T…Dってのは、ODATEBUTAってことになる」
「オダテブタ？」
「ドロンボーたちの単純な頭に合わせて、単純な暗号を選んだんだろうね」
これには、さすがのドロンボーたちも、潜んでいるのをわすれて、手に手にスパナ、釘抜き、トンカチを持ち、ぶんなぐってやろうかと、あわや飛びだしそうになった。
「でも、暗号がオダテブタだとわかったって、なんの解決にもならないんじゃない？」
そのアイちゃんのひと言で、トリオの殺意は鈍った。考えてみればそのとおりだ。
「でもね。これは二重三重のキーワードなんだ。パソコンの情報提供ネットワークにO・A・通信というのがあってね」
そういいながら、ガンちゃんは連結した電話のダイヤルをプッシュしていた。

画面にオレンジ色の文字が打ちだされてくる。
『オダテブタ。その出自、卑しからず。バークシャーの領主にして、ヨークシャーの王妃の血を継ぐ、ブタのなかのブタ』
「なんのことかしら？」二号が覗きこんだ。
「バークシャー、ヨークシャーともに繁殖力の強い豚の品種であり、土地の名前だろうね」
二号がこたえる間もなく、画面に情報が打ちだされてきた。
「オダテブタ——その正式な血筋をたどれば、すなわち、オラオラ・ド・アイン・テーベ・エト・バッカ・ウルスラ・テェ・アルツハイマーと名乗るべし」
アイちゃんは溜め息をもらした。
「なんだか、すごい、毛並みのいい、貴族の名前みたいね。由緒正しいコブタちゃんだったんだわ」
これにはドロンボートリオも、思わず顔を見交わしたものだ。
あの、コクピットのなかから、不意に蓋をあけて、椰子の木に攀じ登りながら『ブタもおだてりゃ木に登る、ブウッ』といっては、爆発と同時に、ともに何度かふっ飛んだ、あの可愛いメカ豚にそんな由緒があろうとは？……ユイショじゃなくてヨイショの間違いじゃ？と三人が三人とも思ったのだった。
そのときだ。モニター画面が激しく点滅したかと思うと、いきなりエマージェンシー通信

が割りこんできた。
『こちらはFBIだ。ブッシュマンと名のつく子供たちが、全米で謎の大量失踪をとげている。ニカウさんたちとは関係ない。偶然の一致』
『こちらはCIAだ。大統領が、いきなりホワイトハウスから飛びだして、灌木の林に消えた。いたるところに野グソを残しているからもっかそれを追っているが。動機は不明だ。やはり君の忠告を聞いておくべきだったかもしれない。最初の野グソのとき、メイドが一瞬ではあるが、大統領のお尻に、ブタの鼻のマークとおぼしき、焼きゴテの跡のようなマークを見たといっているのだ』
異変の知らせは世界中からもたらされた。
それも、KGB、MI6、GRU、といった各国の秘密情報局から、テロリストの本部、政治経済のトップの常軌を逸した行動に始まり、なにより顕著なのは、エンターテインメントのスターたちの脱線ぶりが伝えられてくる。
アイちゃんの大好きな、あの、スーパーエンターテイナー、マイケル・ジャケンソンも、中国古代の猪八戒のミイラを抱いて、公演先の動物園から、黒い豚の群に混じって遁走してしまっていた。
「ど、どういうことなの、ガンちゃん！」
そんなアイちゃんの悲鳴をよそに、冷静に、キーボードで応答するガンちゃんの横顔は、

男らしかった。
それは、少女の心を動揺させた。パパやママの顔が一瞬アイちゃんの脳裏を横切らなければその首に抱きついて、頬とはいわず、その唇に生まれてはじめてのキスをしたくなりそうなほど、男らしくセクシーなのだった。
そんな気分をたちきったのは、内閣調査局、いわずと知れた、日本の、世界に冠たる秘密情報局のメッセージだった。
『ヤッターマン！　ゆゆしき事態だ。貿易センタービルで保護したソーリのお尻に、コブタとおぼしき鼻の焼きゴテのような跡がある。それは、あのナンノちゃんの背中から、そしてキャンキャンの右オッパイにも刻印されていた。君はこれをどう思うだろーか？』
そして、最後は、NASAからの秘密通信だ。
『オゾン層をぬって、怪しげな宇宙線が地球にふりそそいでいる。どうやら異次元からの、邪悪な意志だと思う。ちなみに、波長をコンピュータグラフィックにかけたところ、コブタとおぼしき豚の鼻の七色のマークに結晶した』
もう、間違いない。これは時空を超えた、超世間的犯罪だ。しかもカギを握るのはオダテブタ！
「いこう！　アイちゃん！　オダテブタを捜しださないと、世界は、地球は、大混乱になる！」

ガンちゃんことヤッターマン一号はキッパリといって椅子を蹴りたった。
「でも……オダテブタは一体、どこにいるのよ」
その素朴な質問に、ガンちゃんは、ハタと仁王立ちになった。
「ホントだ。どうやってオダテブタのところに……」
が！　星のめぐりは正義を見捨てない。
その夜、突然、はこびこまれた急患が、血路をひらいてくれたのだ。

リノリウムの床を、ストレッチャーが急患をのせてはこんでいく。
その救急病院の廊下を、小学校五年生のツトム君は泣き叫びながら、ザンゲの言葉をだれにいうともなく叫んでいた。
「ごめんよーおぉぉぉ！　**オー**ちゃんボクが悪かったんだー。**だって**、だって、だってー、もう、どんなに**ブタ**れてもいいから〜、ぼくのオチンチンをもとにもどしておくれよーお願い！」
その叫びを聞きながら、アイちゃんの全身にテレパシーが疾った。
女のコだけあって、このへんは、理屈を超えた言語構成ができる。
「聞いた？　ガンちゃん？　いまの言葉。テンションの高い波長だけ聞くと、それは『オーダッテブタ』って訴えているのよ！」

「な？——」

こんなことは、ヤッターマン一号、ガンちゃんには思いもよらない。だって、そんな安直なことって——それはともかく。

集中治療室にはこぼれたツトム君は、もうこの世とあの世の境をさまよって喘いでいた。

「しっかりして！」

その手を握り、励ますアイちゃんも、ツトム君の下半身からは目をそむけていた。

肥大するオチンチンは、さながら宇宙からの物体Xみたいに膨らんで、放っておけば、そのまま熱気球みたいになってフワリと浮かんでいくかのように思われた。

アイちゃんにしてみれば、男のひとのオチンチンを見たのはパパと一緒にお風呂に入っていた小学校一年生のときまで。それを最後に今日までついぞ見たこともなかったグロテスクなものを、しかも、その数十倍もあろうかと思われるモノを見て、思わずクラクラと失神しそうになる。

だったら見なければいいのにと思うのに、恐いもの見たさ。少女の好奇心はとっても強くて目の端でしっかり見ているから、不思議だ。

「あっ！——」

とガンちゃんは叫んだ。

集中治療室の設備をあざ笑うかのように、ライトは割れ、計器はグルグルと回り、ツトム君のベッドはその部屋を暴走した。
棚が倒れ、壁は内側からボコッと砕ける。
天井といわず床といわず深度8ぐらいに激しく震動している。
なんだこれは、まるでエクソシストみたいじゃないか！　とガンちゃんがよろける体を必死に堪えているときに、膨れあがったツトム君の少年とは思えない陰ノウが、口をきいた。
「ブヒヒヒヒッ！　このインノウが目にはいらぬかぁ！」
「水戸黄モンじゃあるまいし！　ええい！　怨霊退散！　きみょうちょうらい。カイチンレツザイゼン！　早クジ、ミクジ、午前クジ！　クジも啼かずば討たれまいにっ！」
ガンちゃんは、そのとき思いつくままのボキャブラリーを並べたが、ツトムくんの陰ノウには勝てなかった。だって、これは時空を超えた怨念の波動がもたらすものなのだ。異世界の蒸れた匂いにクラ〜となった。
「ガンちゃん！」
思わず駆けよったアイちゃん。陰ノウからほとばしる邪悪なエネルギーを受けとめて、ガンちゃんを庇った。
その額には……私は説明したくない――。
あのおぞましくも可愛らしいふたつの孔のブヒ・マークが、アイちゃんの可憐な額にブス

ブスと煙をあげて烙印を焼きつけていくではないか……。
「おねえちゃん、おねえちゃん……」
目の前の手術台では、ツトムくんがうわごとのように感謝の言葉を述べていた。
膨れたオチンチンは、見るまに年相応の可愛らしさに戻り、すすり泣くツトム君は、涙を流して、アイちゃんに告げたのだ。
「オーちゃんを、オダテブタちゃんを、ボク……裏切りたくはなかったのに……グスン」
「あいつが！……オダテブタが、世界をひっくり返そうとしている……！」
ガンちゃんが、よろける腰をさすりつつ、立ちあがった。
「すべてあの暗号が、あいつのいる時空の座標軸を示してくれる！　人知を超えた世界の混乱を巻き起こすオダテブタ！　いまやあいつの力はドクロベエを超えた！　許せない！」
ヤッターマン一号ことガンちゃんが、ようやく頭を振って正気に戻ったとき、アイちゃんは、キッパリといった。
「その必要はないわ、ガンちゃん。あたしの額のブヒ・マークが、あたしを呼んでいるのよ。目をとじれば、彼があたしを呼んでる。その切ない魂の呼び声が」
そういい残すと、アイちゃんは窓から虚空に妖精のように飛びたった。
「アイちゃん――」
ガンちゃんは、胸騒ぎを覚えて、後を追った。

「何が起こったんだ！――――」

終始、情報と判断をネコババしていたドロンボートリオが、後を追ったのは、いうまでもなかった。

この日から、巷では、希望と欲望を失った老若男女が、ウツロな眼をして、袖すりあっても知らん顔をしていた。

一見、世界は平穏で、オバタリアンの目の色だけが、輝きを失わなかった――――。

ときに平成〇年十二月二十四日。説明お兄さんの雪の降らない誕生日の夜のことだった。

――それはともかく。

オダテブタのザンゲは、今日も虚空のしじまに、唸りをあげて、哭いていた――――。

ACT3　オダテブタは愛に目覚める

〽ウ〜〜〜〜ワワンワン！

〽ウ〜〜〜〜チチンチン！

高らかなテーマソングにのって、ヤッターキングが夜空を駆ける、歌舞伎町のただれたネオンの海は、すでに眼下に遠くなっていた。

夜風にマフラーをなびかせるヤッターマン一号はしかし、いつもならともに颯爽と出動する二号の姿がないのがさびしかった。

肝心のアイボーがいないのに、ドロンボーにひそかに相乗りされているとは気づくよしもない。

説明しよう。

あの恐怖の陰（イン）ノウパニックから、ブヒ・マークの烙印を押されたアイちゃんは、

『目をとじれば彼が呼んでいる。その切ない魂の呼び声が』

と、謎の言葉を残して、病院の庭の闇の空に翔（と）んだ。

追ってでたガンちゃんが、瞬間、まのあたりにした光景は——それは突如、夜空に浮かびでた七色のブヒ・マークの閃光（せんこう）！　真昼の陽光を思わせるそのまっ只中に、吸いこまれるようにアイちゃんの姿は消えて、その直後には、ケバケバしいネオンの海を反照させる虚（むな）しい夜空だけが残っていた。

ガンちゃんが、屋上の給水タンクの下の格納庫から、ヤッターキングで出動したのはいうまでもない。

「アイちゃんは、いったいどこへいってしまったでコロン」

「わからない。でも、謎のオダテブタに向かっているのは確かさ。アイちゃんのバックルの発信器を見失わない限り大丈夫だ」

が、ガンちゃんのその声も、不安にくもりがちだ。

「うわーっ！」
激しい震動がヤッターキングを見舞う。
それは、異次元の壁を突破していく衝撃だ。
これは、ヤッターキング下部の格納庫の小窓で、外をうかがっていたドロンボーたちも同じだ。
いきなり、真夏の陽光があたりに飛びこんできて、ヤッターマン一号は、しばし、目がなれるまで、その眩しさにクラクラッとなった。
眼下には、どこまでもひろがる大海原。まるで全世界が沈没したように陸影とて見当たらない。しかし、ギラギラと輝く太陽は七色の光をあたりに放ち、よくよく見れば、海原に椰子の木の焼け焦げた残骸が、おびただしくたゆたっている……。
「これって、ヒロイック・ファンタジーの世界みたいですね？　ドロンジョさま」
最初に口を開いたのはボヤッキー。
「うーん。どことなく見覚えがある。ホラッホラホラホラ、あそこに小さく見えてきたのはノコサレ島じゃないかしら……コナーーン！」
ドロンジョは懐かしそうに叫んでいた。
「無人島でしょーか？」

「どこでもドアみたいに、いきなり出てきたんやから、ノビ太くんでもいるのとちがいまんか？」

しきりに嬉しがるドロンジョ。勝手に三人でウケていたのにはワケがある。

（筆者注――コナン少年もノビ太くんもドロンジョも、み〜な小原ノリコさんの七色の声だったわけですね〜）

へたなアニメギョー界の楽屋オチはともかく、しだいに見えてくる小さな島は、卵を立てたような姿であることがわかった。

頂上にはえるもうしわけ程度のくさむらには、ニョッキリと椰子の木が一本伸びている。その幹や葉は、メタリックな光沢を放っていた。

「う〜ん。わすれもしない。あの椰子の木こそオダテブタが登った椰子の木に爪ふたつ！」

ハタとドロンジョが膝を打った瞬間、ヤッターキングは着地をあやまって、三回転半して止まった。

「も〜、なにやらかしてくれるんだー」

「安全運転が第一でまんねーん。横断歩道の園児たちが心配になってきたまんねーん」

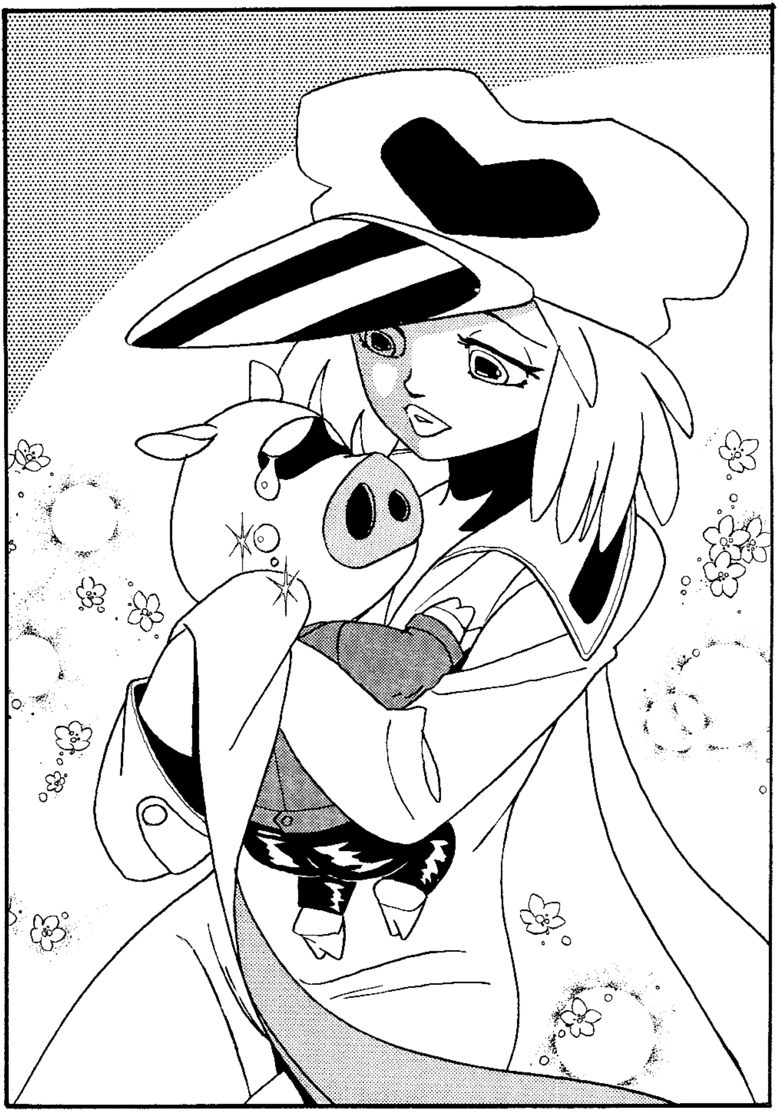
「スカポンタン！　ふたりしていつまであたしの胸とお尻に抱きついているんだいっっっっ！」

「ダハハハハハ……」

「おーい！　アイちゃーん！　どこにいるんだーい！」
椰子の根元で、ヤッターマン一号は、四方の海原に叫んだが、むなしくその声は風に流れていく……。
アイちゃんの発信ビーコンは、この島の座標軸で消えていたのだ。
まさか、その足元で、アイちゃんがオダテブタと会っていたなんて、思いもよらない――。

「ねぇ、なんとかいってちょうだい。おねがいよ」
アイちゃんの懇願（こんがん）するような優しい声が、静かなホールに谺（こだま）した。
――ここは、異次元の、そのまた異次元の卵の島のなか。空には満天の星をいただき、総ガラス張りの周囲には、大都会の灯を眺望する、あのオダテブタのペントハウスである。
いつのまに修復したんだろう？　うーむ異次元の異次元たる力のなせるワザだ。それはともかく。
そのオダテブタは、ホームバーのカウンターに座って、背を向けたまま、ひと言も口をきかなかった。
床の大理石には、大きなブヒ鼻マークの魔法の結界のようなものが張られていて、チロチロと怪しい火を燃えあがらせている。

あきらかにアイちゃんを拒否する、その少年のかたくなな意志をあらわしていた。
「ねぇ、なんとかいって。ねぇオーちゃん？　こっちむいて？」
一瞬、頬づえから顎をはずしかけたオダテブタは、体をこわばらせた。
『ボクはムーミンじゃないつーの……』
こころのなかで舌うちしつつも、アド・ミラーに映る、アイちゃんの可憐な顔と、身をよじって懇願する愛らしいその姿態に、心なしか胸はときめいていた。
「あたしを呼んだのはあなたでしょ？」
「──」
「あなたが、呼ばなくても、あたしは、あなたに遭いにきたわ」
「──」
「だってだって、ここへくる途中、それはそれは優しいあなたの心の波動を感じたんだもの……あったかくて、それでいて力強い……そしてどことなくものがなしい波動……女のコなら、一度は抱かれたい……そんな、とても、すばらしい……あたし……なんていっていいのかわからない……胸が苦しくなってしまうの」
「それって……」
背を向けたまま、少年は口を開いた。
「それって、愛？」



「……」

今度はアイちゃんが沈黙した。いや絶句した。

振り向いたオダテブタの哀しい睫には、真珠のような涙が光っている。いまにも泣きだしそうな子供のように、その顔はクシャクシャになり、かたちのいい楕円の鼻のやわらかなウブ毛が伝い落ちた涙に濡れて、また光った。

「かわいそうな……オダテブタちゃん！」

いいおわらないうちに、アイちゃんは走っていた。チロチロと燃える結界の魔の炎を跳び越えて、全身を貫く痛みも燃えあがるジャンプスーツものともせず、ヒシとオダテブタを胸に抱きしめていたアイちゃん。

瞬間、纏っていた魔の炎も痛みも消えていた。

「淋しかったのね……ほんとうに淋しかったのね……いとしいオダテブタちゃん」

アイちゃんの優しい手が、美しい和毛におおわれたその頭を撫でてやる。

「うっうっうっ……」

嗚咽する少年は、それでも、必死に泣きたい気持ちをこらえて、肩を小刻みに震わせていた。

「ボクのココロを……こんなにも真正面から受けとめてくれたのは……君がはじめてだよ。うっうっ」

「だれだって、あの波動を受けたらそうなるわ」
「ちがう……汚れのない、ほんとうのココロにしか、ボクの波動は伝わらないんだい……」
「——おねがいよ。そんな哀しそうな顔をしないで。ホラ、涙をふいて」
アイちゃんのマフラーが、真珠の涙をふいてやる。
「これって、愛？」
つぶらな瞳で見つめられて、アイちゃんは、ちょっと言葉に詰まった。
「わからない……わ——」
もうしわけなさそうに、アイちゃんはうつむく。
「ね？　ミルクシェイク飲まない？」
「え？」
「君の瞳に乾杯したいんだ。そしてボク、君のために、思いっきり素敵なバラードをひくよ。いいだろ？」
天使のようなあどけない笑顔を向けられて、アイちゃんもニッコリ微笑(ほほえ)み返さないわけにはいかない。
「ええ、いただくわ。あなたのミルクシェイク」
そのころ、天井の星空のうえ、異次元の島では、不意を襲われたヤッターマン一号が、

「んぷぷぷぷっ……」
強力なクロロホルムを背後から嗅がされて、必死の抵抗も虚しく、くずれおちていく……。
「ひ、卑怯な――」
さしものヤッターマン一号も、無防備な口と鼻に、クロロホルムをたっぷり嗅がされては、抜き打ちテスト同様、逃れるすべはなかった。
オモッチャマはといえば、これまたワンパターンのガムテープでグルグル巻き。ヤッターキングの足にくくりつけられて虚しく歯車を回すのみ。
「思いしったか、軟弱少年！　このドロンジョさまの大人のお色気をたっぷりブレンドしたクラックク
ラホルムに勝てるものではなーい。私たちを出し抜こうなどと、十年はやいっ！　いいや万年はやーい！」
「まんねんまんねん」
「ざまぁミロミロ、ミロのビーナス。ドロンジョさまはぼくらのビーナス。やれミロそらミロ、モロのビーナス♡」
片膝ついてプロポーズよろしく、いかがわしいハートまなこをときめかせて花束を出すボヤッキーが、いましがたの一号との揉みあいではだけた胸からモロにでたドロンジョのチブサに熱い鼻息を吹きかけているではないか。
「んっ？　や～ん」

恥じらう顔をそむけて、服をかきあわせるドロンジョに、
「や〜ん」と唱和して、ともにのけぞる不良中年たち。
「スカポンタン！　や－らしいパフォーマンスしてるバヤイか！　草𦬇り草𦬇り！　あのチビ豚の椰子の木がここにあるということは、あのコが登ってくるハッチが根元にあるってことだよっ！」
「アラホイサッサー！」
ううむなんたる慧眼！　さすがにリーダーというだけのことはある。その推察は見事的中して、𦬇りとったくさむらの下には、コブタマークのハッチが出現したから安直だ。いいや、見事だ。
しかし、押せども引けどもビクともしない。
「かくなるうえは！」
自前のメカを今回はもたないドロンボートリオは、ヤッターキングに乗りこんだ。
その足でハッチを踏み破ろうというのだ！
アイちゃんは、うっとりと目をとじて、オダテブタの演奏に聞きほれていた。
聞き覚えのある旋律に乗せて、愛くるしいばかりの少年の声が、切々と歌う。
〽夜の闇があたりをつつみ……月あかりしか見えなくても、ボクはこわくない……。

いつかガンちゃんとともに観たあの映画のラストシーンに流れていた『スタンド・バイ・ミー』。

〽君がそばにいてくれるなら、友よ友よ

そして不意に、歌声はとぎれた。虚しく弦をはなれてさ迷う少年の爪、そしてうなだれる白い頭……。

「どうかしたの？」

「ボク、うたえない……」

スゴスゴと、アイちゃんのウオーター・ソファに戻ってきたオダテブタは、座りこんで、爪を嚙んだ。

「裏切りものたちのことを思いだすと、ボク……ボク……またプッチンきそうになるんだ」

アイちゃんは優しくその肩に手をおいて、少年の横顔を覗きこんだ。

「裏切りものたちって、ツトム君や、ナンノちゃんや、キャンキャンたちのこと？」

ピクッと少年の耳が緊張してとんがった。

「どうして、知ってるの？」

「地球ではいま、大変なことが起こってるの。総理も、大統領も、大統領と同じ名前の子供たちも、あのスーパースター、マイケル・ジャケンソンも、そして、数えきれない人々が、希望を失い、無気力の輪が世界を混乱におとしいれてるの……それはみんな、あなたの意

志？」
ビクンと立ちあがって、オダテブタは後ずさった。見開かれたツブラなふたつの目が、驚いたようにアイちゃんを見返している。
「君は、あいつらに頼まれて、仕返しにきたんだな！」
「ちがうわ！　それはちがう！」
「それ、どういうことかしら？」
「ちがうもんかっ。あいつらはみんなみんな嘘つきだいっ」
ヒクヒクと鼻をめくれあがらせる少年を、いたずらに興奮させないように、アイちゃんはつとめて優しく静かにたずねた。
「ボクは……あいつらの願いを聞きとどけてやった。とてもとても素直で優しい、それでいて必死な願いだった。努力をしても届かない切ない願い……みんなボクの名を呼んでいた」
「そして、あなたが力を授けてあげたのね」
「そうさ……。ボクはここからとんでいって、みんなを連れてきたんだ。ボクと一緒に遊んでくれるかい？　そしてボクの演奏を聞いてくれるかい？　といってね」
「あなたの演奏はすばらしいわ。歌も。そしてみんなやってきたのね？」
コクリと少年はうなずいた。
「ボクたちはみんな楽しい友だちだった。この部屋の外の海で、ヨット遊びをしたり、たく

さんあった島で椰子の実をとったりして遊んだ」
「素敵じゃない！」
「うん。夢のような毎日だった。だからボクは夢のようなみんなの願いを、叶えてあげるために、椰子の木に登ってパワーを与えてあげたんだ『ブタもおだてりゃ木に登る、ブウッ』てね」
少年の脳裏には、その日の情景が、つい昨日のように甦ってくる。
一斉に椰子の木に登って、彼と唱和する友の顔、顔、顔、みんな一斉に叫んでいた。
『ブタもおだてりゃ木に登る、ブウッ』。歓喜に全身を震わせて、みんな恍惚と叫んでいた。
「でも、みんな、自分の願いを叶えるためにそれぞれの世界に戻らなければならなかったのね。――お別れのつらさ……わかるわ」
「でも、約束したんだ。願いがかなったら、必ずここに戻ってくるって。毎日じゃないよ、年に一回でいいんだ。ひとりずつ来たって、ボクは、毎日おおぜいの友だちと、ここで退屈なんかするはずはないんだ」
「だれもこなかったの？――ひとりも？」
「ひとりも！　弱虫だったのを、強い子にしてあげたツトムくん！　スーパーアイドルを夢見てたナンノ！　キャンキャン！　マイケル！　大統領や総理になりたかったオジサンたち！　ひとりも！」

「でも、それは忙しくなったせいじゃないかしら？」
「でも、約束は約束さ！」
「――――」
「ボクは、みんなに力を与えてやった自分が悲しかった。そして神さまにザンゲしたんだ。もう二度と、人をオダテて成功なんかさせはしません。こんな淋しい思いは二度としたくありませんって……」
「でも、そんな不思議なパワーを、あなたはだれに授かったのかしら？」
「パパさ……」
「もしかして、それ、ドク……」
最後までいいおわらないうちに、少年の声が遮った。
「君だれー？」
「えっ？」
「ボクのココロに踏みこんできて、何を探りだそうとしているんだ！」
「誤解しないで！」
アイちゃんは立ちあがって歩みよったが、バックステップで跳んだ少年の目にはあきらかに敵意の光が灯っていた。
ズズン、ズズン、ズズズン！

そのとき、天井の星空が震動して、あたりに鈍い鳴動が唸(うな)った。

アイちゃんも少年も、歪(ゆが)んでヒビ割れ始めた星空を見あげた。

異次元との境に張りめぐらされた次元の壁がスパークして軋(きし)みをあげていた。

「やめてーっ！　ガンちゃん！」

思わず絶叫するアイちゃん。

「やっぱりだましたんだなっ！　ボク、信じてたのに……プッチンこいたボクの怒りの波動を、あんなにも優しい波動で返してくる君のココロは……愛の波動だと思っていたのに！」

みなまでいいおわらぬうちに、オダテブタはふりかぶったギターのエレキを唸らせた！

キイイイーン！　ババキュキーン！

あたりを疾(はし)る稲妻のような演奏が窓のガラスを粉々にうち砕く！

「オーちゃん！」

が、次の瞬間！　弾けとぶ窓ガラスの向こうから凄(すさ)まじい熱風が送りこまれてきたので、アイちゃんは声をのんで立ちすくんだ。

窓の外の様相は一変している。海は熔岩(マグマ)でまっ赤に煮えたち、空はグロテスクな色彩のまだらな雲が渦を巻いて蛇のようにのたうちまわっている。——それはさながらいまの少年の心だ。

身を振り、のけぞり、ジャンプするオダテブタの演奏する姿を、シルエットに浮かびたた

せている。
ベキベキベキッ！
星空の天井が割れて、ヤッターキングが、もんどりうって落ちてきたかと思うと、大理石の床を割って、半身を突っこんだ。
ハッチからトリオが弾きだされてきて、アイちゃんの足元に転がった。
「ドロンボー!?」
「あーっ？　おまえはーっ!?」
「ガンちゃんやオモッチャヤマをどうしたのーっ！」
もとより、このやりとりはオダテブタの魔の演奏にブッとんで聞こえることはなかった。
「あーっ、あいつはオダテブタっ！」
ドロンジョが指さすまでもなく、トンズラーもボヤッキーも、信じられないといった顔で、地獄の炎をバックに狂いまくるロックンローラーのシルエットを見て、声を失った。
「止めてーっ！　あの演奏を止めてーっ！　でないと、世界中の人々が、彼の怒りの波動で生きる希望さえ砕きちらされてしまうわーっ」
アイちゃんは敵味方をわすれて、トリオの耳元で負けずに怒鳴った。
「これが、世界を制するオダテブタのパワーだったのねーっ」
「オダテブタを制するものは世界を制す！」

「もとはといえばワテらの身内でまんねん」

「そうよっ、オーちゃん！　おひさしぶりー」

「ボクちゃんたちの顔をわすれたのかーい」

トリオはわらわらとオダテブタに走った。

が！　瞬間、目の前で、またしても信じられない光景が起こる。

アイちゃんの最後の『愛』のカケラさえ微塵に砕かれたとプッチンしたコブタちゃんは、みるみる怒りに膨れあがり、その優しい毛並みのいい全身の和毛はバリバリと猪の剛毛さながら、メタリック・ピンクの肌をおしつつんでしまったのだ！

可愛い口元は醜く肥大して牙を突き、かたちのいい鼻は、いまやクログロと皺を刻んで異臭を放った。つぶらな瞳は濁りきって血ばしり、咆哮とともに炎を空に噴きあげると、その巨体は轟々と上昇していく！

天井はことごとく崩れ落ち、瓦礫とともにヤッターマン一号の姿が、力なくアイちゃんの頭上に落ちてくる。

「あーっ!?」

アイちゃんの悲痛な叫びを残して、あたりは瓦礫の降りそそぐ、この世の終わりのような凄まじい光景を呈しつづけていた——。

ACT4　オダテブタは愛に悶える

「オラオラ・ド・アイン・テーベ・エト・バッカ・ウルスラ・テェ・アルツハイマー（略称ODATEBUTA）ですか……」
「これは由々しきことになりましたな」
「禍々（まがまが）しいことだ」
「逆縁の血ですか。先祖返りとみてまず間違いないでしょう」
「屠殺（ほふ）るにかぎります」
「しかし、なみの生体とはちがう」
「しょせんは豚にかわりはない。打つ手は必ずあるはずです」
「ま、しばし傍観するのもよい。パニックで人心が動揺すれば、株価に変動が出るでしょう。ひともうけする絶好の機会ともいえる」
うーん……といった重い沈黙が会議室を支配した。

――説明せねばなるまい。
ここは新宿副都心。世界に冠たる国際都市、シカゴやジュネーブを抜いて、いまや国際経済の先端をいく狂える金満ニッポンのヘソ、トーキョー・シティの国際会議ゾーン。

コンベンション・ビル群の林立するそのはるか地下、核シェルターに完全防備された、とある秘密の会議室である。

円卓を囲むメンバーは、一様にグロい豚のマスクを被(かぶ)り、血染めの緋(ひ)の衣をまとっている。議長とおぼしきひとりだけが紫のローブでその肥満した体をつつんでいた。

しばたたく目、溜め息を洩(も)らす口元は、巧妙(こうみょう)なSFXの化物のようだが、実は、れっきとした国際経済を陰で動かす人間どもだ。

だが、これこそ、古代より連綿と引き継がれてきた地球最古の秘密結社『血染めの緋豚団』の最高会議の緊急総会であることをだれが知ろう。

世界の政治経済を陰で動かすといわれる東部エスタブリッシュメントや、フリーメーソンをはじめとする秘密結社などの比ではない。その力からいっても、歴史からいっても、マフイアやエコノミック獣(アニマル)などは足元にもおよばない強大な力を秘めていた。その組織の末端は、あらゆる秘密結社や世界の要人に網の目のようにひろがり、その当人が彼らに動かされているなどとは夢にも思わない仕組みだから恐ろしい。

その彼らが、ときならぬオダテブタの出現の真意をつかみかねて、緊急会議を開いている。

会議場の巨大スクリーンには、昨日の未明から今夜半にかけて、世界中のいたるところに出現したオダテブタの、いや、いまや狂える巨大な猪へと豹変(ひょうへん)した——いや猪変(ちょへん)というべきか……その姿が映しだされていた。

マンハッタンの運河に、ロンドン・ブリッジに、赤の広場や、天安門広場に、ニースの海辺に、忽然と出現したオダテブタは、空に轟々と口から炎を噴いては、また忽然と消えていた。

「なんのデモンストレーションですかな」

「いまのところ、建造物や人身に被害をおよぼしてはいない」

「われわれの実態を探っているのでは？」

「復讐ですかな、やはり……」

「間違いなくあの種は、古代バークシャーと古代ヨークシャーのかけあわせの特徴が如実にあらわれています」

――これには若干の説明を追加せねばなるまい。

『血染めの緋豚団』の発祥は、遠く古代にさかのぼる。まだ大陸の名がパンゲアと呼ばれていたころ。宗教儀式に古代豚を屠殺って生贄に捧げる特殊な選ばれた人々の一団があった。

彼らは人々の運命を支配し、あやつることができたが、ふたつのグループに分かれて確執があった。バークシャー派とヨークシャー派がそれである。

血で血をあらう抗争のすえ、やがて和解に達した。彼らはバークシャーの『野性の王』と呼ばれる豚とヨークシャーの『花園の公妃』と呼ばれる崇拝を集めた豚同士を結婚させたのである。

その秘密の儀式によって、まるまると肥った愛らしい『王子』が生まれた。
かれは成長して、勇猛果敢な豚となり、その英知は人間をしのぐかと思われた。
豚とはいえ古代の豚である。剛毛におおわれ凛々しい牙をもつその王子は威き猪丈夫として儀式の一団に反旗を翻した。
すなわち生贄の廃止をスローガンに掲げた、豚族の反乱である。
が、秘儀を扱う一団は、奸計を弄して、この『王子』を暗殺した。反乱はあっけなく壊滅した。
やがて時が流れ、大陸も現在に近い様相を見せ始めたころ、メソポタミアに文明が萌え、秘儀を扱う一団の子孫は、養豚をなりわいとして、その肉を売りさばくことで財をなしていった。
またまた時は流れ、彼らは『血染めの緋豚団』を結成し、その秘儀と財力を縦横に発揮して、世界中に俊英を送りこんだ。以来、歴史の底流に暗躍し、現在に至っている。
『血染めの緋豚団』のメンバーは、自らをネオ・ブヒの申し子と呼び、血の結束を誇っている。ちなみにいまの養豚業界とはなんの関わりもない。——それはともかく。
なぜに、かくも、彼らがオダテブタの出現に震撼しているのか？
長い『結社』の歴史のあいだには、とかく内部抗争がある。
オラオラ・ド・アイン家、テーベ・エト・バッカ家、ウルスラ・テェ・アルツハイマー家

はともに『結社』のなかでは数千年の流れを汲む名家であったが、時を前後して、その豚小屋に黄金の剛毛におおわれた古代豚が生まれた。
それはまさしく、あの古代の『王子』の先祖返りの姿だったのだ。
が、その古代豚を飼うことはタブーとされた。生まれて、瞬時のうちに屠殺しなければならない。それが掟だ。
が、たぐいまれなその黄金の子豚を、時の当主は珍重し、タブーと知りつつ、深窓に隠匿して、これを愛でた。
そして、いつの世にもありがちな密告である。当主一族係累に至るまで、その名家は黄金の古代豚とともに血の粛清を受けたことはいうまでもない。
『結社』は、今、スクリーンにまのあたりにするオダテブタが、黄金の輝きこそないものの、あの禍々しき、古代粘土板や中世の銅版画に描かれた『王子豚』に酷似しているのに震撼していたのである。
――それにしても、あのオダテブタに、ヒロイック・ファンタジーにありがちな、かくも美しくも哀しい物語が秘められているのはほんとうだろーか？
「ともあれ、屠殺りの準備だけは、怠りなく」
「核ですか」
「ペンタゴンとNASAを動かして、宇宙に葬る。この地球が汚染されては、われわれとて

もともこもないからな」

いつの世も、権力者はわが身の安泰しか考えてはいない。

「ドクロベエを、少し調子づかせたようですな」

「うむ。何を血迷いおったか……」

なな、なんと！　ドクロベエが一枚噛んでいたとは！

「あやつ、禁断の豚魔術を弄したにちがいない。さては『王子の秘薬』を隠しもっていたな……」

紫の衣のネオ・ブヒの長老は、そう呟いて、苦々しく、鼻を鳴らした。

やや展開がシリアスに流れたようだ。……どこが……。ここで悪役主役のドロンボーどもに目を転じてみようではないか。

ンポポポポ……

ガパパパパパ……

んぼっがぼっぽがっ……

――説明しよう。別にワープロのキイを玩んでいるわけではない。

あの、異次元での、オダテブタの地獄のライブの煽りをくらって、海底深く沈んでいくドロンボートリオのもがき苦しむ音なのだ。

傍らには卵状の島の崖があるのだが、手を伸ばしてもツルツルのそれは、這いあがるなんのよすがにもならない。
驚くべきことに、島の底、すなわち卵の先あたりには、鋼鉄の杭のようなものが突きでている。思うに島を縦に貫いている椰子の木の根部のようだ。
ややや っ！　その杭の先端には大魔神みたいな巨大な落ち武者のようなのが、胸部を串刺しにされて横たわり、海底の泥に埋もれかかっている。
鎧兜のその巨人の顔は、眼窩を穿たれた髑髏と化し、よくよく見れば、ドクロベエのマークに酷似していた。
ンポホポポポ？
ゲボボボボ？
んがっほがっぽがっ？
ドロンボーたちも、そう察したのだろう。その髑髏武者の暗い眼窩に泳ぎ降りていく。
スッ――――とトリオの姿が闇に消える。
どうやら、それはエアー・ハッチのようだった。
「ぶへーっ」
「げぼーっ」
「んばーっ」

しこたまのんだ海水を床に吐いて、何はともあれ、トリオは人心地ついたのだ。
あたりを見回せば、薄暗い内部の壁面に、夥しいパイロットランプが点滅している。
メインコンソールに割れたドクロマークのエンブレムをみとめて、三悪はヨロヨロと立ちあがった。
「――ドクちゃん!?」
「ここがドクちゃんの指令部でっ!」
が、足をとられてともにつんのめる。
「へびーっ？　へびへびへび!」
「ぎゃーっ!!」
トリオは抱きあって、コンソールの上に跳びあがった。
「スカポンタン!　これはコードじゃないのよ」
「まー、ほんとですね。それにしても、これはいったいどーゆーことなのでしょーか?」
が、三悪は足元の溶けた電話機を見てゾーッと震えあがった。
「これは、あのテレクラ『ドクちゃん』の最後の指令と直結していたやつでしょーね」
「だって、あれは一〇〇回目のリピートで溶けてしまったんだろう?」
「しょーでしたしょーでした」
「と、いうことは。……ドクちゃんの本体は、ずいぶん前から、こんなことになっちまって

いたのかーい？」

「しょーゆーことですね。おそらく、あの変わりブタが謀叛を起こして、下剋上しちゃったんでしょー。しょーゆ顔のボクちゃんがしょーゆーから間違いありません、ハイ」

「どこがっ……」

トンズラーはといえば、またしても会話の輪のなかからひとり外されて、埃のかぶった電子板に『の』の字を書いてイジケている。

「おーいドクちゃーん、生きているなら返事をしてみろやーい。ま～、エラそーなこといってからに、からっきし、からっけつじゃないのかよーん、ボクちゃんのけつのけばでも煎じてのましてあげよーかーい」

挑発するように、ボヤッキーは剥きだしたお尻を突きだした。

「するなっ！　スカっ」

「あー、スカしっぺー」

「むけるなっ、つーのに！」

「おかしいな？　こーゆー挑発には絶対のってくるドクちゃんなんですけどね。やっぱりおなくなりになったのかもしれませんハイ」

と、そのときだ、イジけていたトンズラーの手元で、チカーッ！　と閃光が放たれた。ほつれたコードをコネコネしている拍子に接続したらしい。

『どほほほーれ、ひかへるだびぃぃぃ～』
まるで瀕死の重病人のような、ドクロベエの声が、あたりから漏れてきた。
「でかしたっ！　トンズラー！　それだね」
「ちえっちえっちえっ」
嬉しそうにはにかんで、トンズラーは幼児のように身を振った。ひさしぶりのドロンジョのお褒めの言葉にすっかり照れている。
「はなすなっ、つーのに！　スカポンタン！」
蹴り跳ばされて、コードを取りあげられるトンズラー。
「ボヤッキー！　はやくはやく」
「でも軍手がないと感電してしまうデショ」
「緊急事態だよっ。多少の犠牲はやむをえない。それに、すこしは頭に電流を流したほうがキリリッとするんじゃないのかーい」
「知らーん」
「ほらほらほら、そんなにイジケるもんじゃないよ。凛々しいお鼻、セクシーなおヒゲ、甘～い横顔に可愛い瞳、しょーゆ顔、しょーゆ顔」
「しょーゆーことでしたら」
気をとりなおしたボヤッキーがほつれたコードをもって構えた。

「なんだ軍手もってるじゃない」
「これはボクちゃんの素手」
「ステキステキ、とってもステキよーん」
「――――」
ムッとなるボヤッキーの手元が火花を散らしてコードを接続する。
『ンベベベベー……遅かったなドロンボーどもよ……オダテブタ、オダテブタはどーしたべー』
「それが、あのメカ豚ちゃん、ヒト豚になっちゃって、デっかい剛毛バリバリの猪にプッチンして飛んでいってしまったんですわ」
『べべべべェ！　それは大変だべェ……その姿で世界に躍りこまれては、こここ、このワシがネオ・ブヒのやつらに世界から抹殺されてしまうんだべェ』
「ネオ・ブヒ？　それって、ドクちゃんより偉いやつ？　いったいあの変わりブタに何があったとゆーのよ」
『じじじ、時間がない……オダテブタを制することができずば、やつを即この手で抹殺せねばわしがやられるべべェ』
「どーもドクちゃんのいうことはいまひとつわかりましぇんねー、ドロンジョさま」
「しょうしょう」

『い、いそげェェェ……そのわけはみちみち話して聞かせるから、いまはこの胸の杭を抜いて出撃のときだべぇ！』
「わーった、それじゃどーすれば！」
『オダテブタのやつが、わしに歯向かいおったときの、杭に切断された生命線をつなぐのだァ』
「アラホイサッサー！」
ドロンボーたちは、床にもつれあったコードをたぐりよせた。
「これ運命線？」
「これ知能線？」
「これは結婚線でまんねん？」
『アーカポンタン！　手相見やってるわけじゃなし……いそがぬかァァァァ』
ドクロベエが、手際の悪いトリオに業をにやして復活にもたついていたころ、あのペントハウスの瓦礫のなかではヤッターマンたちも、脱出に苦しんでいた。
「アイちゃんしっかり！　しっかりするんだ！」
「ガンちゃん、オーちゃんを追いかけて……いま彼が何を考えてるか痛いほどわかるの、額のマークを通して……彼は苦しみ悶えているのよ……裏切られた人々に怒りをぶつけたい

……でも、かれの心のなかは、まだ愛のカケラを求めてさまよっているの……早く……オーちゃんのそばに！」

——説明しよう。

体ごとぶつかって放り飛ばしたアイちゃんの咄嗟の機転で、ヤッターキングの足の間に転がったガンちゃんは、奇跡的に無傷で正気を取りもどした。

が、アイちゃんは一瞬遅く、右の脚を瓦礫に挟まれて負傷してしまったのだ。

そのアイちゃんを背におぶい、ヤッターキングの格納庫に横たえて、応急処置をほどこすガンちゃんではあった。

「目をとじれば見える……彼はいま次元の闇のなかから、どこに出ようかと迷っている……あ……東京湾かしら……？　そうだわ……オーちゃんはトーキョーに上陸しようとしている！」

「よし！　脱出だ！　ヤッターキング！」

が、瓦礫に半分めりこんだヤッターキングは、弱々しい悲痛な叫びをあげた。

「ワオーン！　なんとももうしわけないんだワーン！　この状態ではボクは出力が半分しかでないんだワン。ヤッターメカで先に急いでおくれ」

思い起こしていただきたい。ヤッターキングの格納庫にはつねに三体のヤッターメカが待機していたことを。そしてそのときにおうじてコンピュータが今日の登場メカを選びだすの

だ。
グー子がすわればヤッターパンダ。
チョキ子がすわればヤッタードジラ。
パー子がすわればヤッターブル。
「音楽スタートでコローン。なにとるこれとるイスをとるコロコロコロコロコロ……ストップ！」
「勝った。あたしはチョキ子よーん」
チョキ子がかってヤッタードジラ。
「ドジラー！」
しっ、しかしっ……この緊急時に、こんな手続きをふまなければならぬとは……が、ヤッタードジラの出撃間際、またしても巨大な震動がやってきた！
「あーっ！　あれはっ!?」
間一髪！　崩れる島のなかから海面をついて脱出したヤッタードジラからヤッターマンが見たものは——。
巨大な杭、いや椰子の木を小脇（こわき）に抱えて、いましも次元の壁を突破していく髑髏武者の後ろ姿だった。
「くそーっ、ドロンボーたちだっ！」

「ガンちゃん！　いま、へたにオーちゃんを怒らせたら……もうメチャメチャになっちゃう！」
「その前に！　なんとかくいとめなくっちゃ！」
疾走れ！　急げ！　ヤッタードジラ！

そうとは知らぬ、こちらは髑髏武者のドクロベエの指令室。
「ぬあんですって！」
「あのオダテブタが人間になりたいなんてン、豚にあるまじき、しかもメカの分際で〜」
「赤巻紙黄巻紙青巻紙……赤巻紙黄巻紙……」
「うるさいっ！」
ドロンジョに蹴り落とされて、頭の打ちどころが悪かったトンズラーがいじけているのを黙らせる。
――説明しよう。
復活したドクロベエの語るオダテブタ反逆の真実とはこうだ。
運命と偶然の支配者ドクロベエが、ドロンボーへの指令をわすれていたのは、禁断の豚魔術に凝っていたからだった。
古い祈禱書と皮袋を、遺跡のなかから偶然手に入れたドクロベエは、それをもって、世界

の人心を掌握し、あやつる秘儀を解読したのだった。
科学と魔術の融合！　そのドクロベエの着想は功を奏して、あのオダテブタを神にしたてあげる豚魔術に成功した。
メカとはいえ、人をノセる、あのたぐいまれなチビ豚に、『王子の秘薬』を塗りたくり、秘術をこらして、ついに半メカ半獣のオダテブタを生みだすことに成功したドクロベエはいった。
「わが子よ！……その神のちからをもって、おまえは世界の人々の心をあやつることができるのだべェ。魂とひきかえに、権力と野望をこい願うやからに近づき、その願いを叶えてやるのだ。さすれば、世界はわが心のままに支配できるのだべェ！　ゆけ！　いって汝のなすことをなせ！　べべべべべェ」
が、運命と偶然を支配するドクロベエの世界戦略にも誤算が生じた。
「ボク……人間になりたい」
「お前は神じゃ……神は人間を支配する」
「神って孤独じゃない」
「んっ？」
「ボクは友だちがほしい」
「これは遊びじゃないのだ。わが子よ」

「パパ、ボクは人間のほうがいい」
「人間より神のほうが楽だ」
「楽して神をやるより、なやめる人間のほうがいいんじゃない。苦悩のなかにこそ、愛が見えるもん」
「んっ？」
突然の哲学的なわが子の反駁に、ドクロベエはあわてた。
「愛などいらん。支配がすべてだべェ！」
「やだ。ぼくは世界中を愛で満たす、ロックンローラーになりたい！」
進路指導をめぐって、親子の断絶があった。
ものの弾みは恐ろしい。家庭内暴力で荒れくるったオダテブタは、椰子の木を振り回し、卵の島を楯に防御するドクロベエを、島ごと椰子の木で突きさしてしまったのだ。
飼い犬に、いや飼いブタに手を噛まれるどころか胸を貫かれ、瀕死の重症に喘いでいたドクロベエであったのだ。
そののち、孤独なペントハウスで愛のロックンローラーの特訓をおえたオダテブタが、世界中から発せられる念願成就の夢の波動に動かされ、ツトム君から大統領に至るまで、それを叶えてやったのは、われらの知るところである。

あるものは権力を手中にし、あるものはアイドルに、またあるものはスーパーエンターテイナーとして夢を叶え、イジメられていた少年は悪ガキになれたのだ。が、彼らは年に一度のオダテブタとの約束をわすれていた。授かってしまえば恩などわすれる。

かくも人間のココロは浅ましい。

忙しさに追われて、オダテブタの恩を、いやオダテブタの愛を、無視した彼らが、いかなる報復を受けたのかは、この物語の発端にあるとおりだ。

が、その愛の不毛に苦しむオダテブタ少年に届いたのは、美しい純粋無垢で、駆け引きを知らぬアイちゃんのココロの波動だった。

「それって愛？」

という彼のひと言には、万感の思いがこめられていたのだった……。

そのオダテブタ、いや、いまや巨大な剛毛猪と化した、愛に悶える虚ろな魂は、アイちゃんに感じた愛の波動と裏切りものたちへの復讐の狭間に苦悩して、霞ケ関ビル群から、新宿副都心に向けて、さまようように歩いていた。

愛に苦悩するマシュマロマン、いやオダテブタ。

欲望と夢を奪われた人々は、ヤジ馬根性だけは、しかし、しっかり残っていて、彼の姿を

遠く取り囲み、あるいはテレビ中継のブラウン管の前に釘づけになった。

そのころ、新宿副都心では、巨大なクリスマスツリーならぬ椰子の木が、燦然（さんぜん）たるイルミネーションに飾られて、そびえたっていた。

あの『血染めの緋豚団』のネオ・ブヒの子らが手を回した、NASAとペンタゴンの秘密工作部隊の設置した、核ロケットであることを人々は知らない。

オダテブタが、この椰子の木に登ったが最後離れられないしかけが施されており、頂上の椰子の実に手をかけたときは、すでに遅いのだ。

そして椰子の木もろとも宇宙の果てで、核爆発とともにオダテブタを四散させて葬るという卑劣な謀略だったのだ。

そのオダテブタは、四谷三丁目で、新宿の椰子の木をなつかしげに見あげてフラフラと進んでくる。

「どあーっ！」

「カイカイカイ、カイカイカイ」

異次元の壁を突き破り、新宿の空に忽然と現れた髑髏武者のなかで、泡をくって全身をかきむしっているのはドロンボートリオだ。

説明するまでもない。
異次元の椰子の実に貫かれ、爆発寸前にあったコクピットのなかで、彼らは、追撃してきたヤッタードジラが放つ、ゾロメカの猛攻にあっていたのである。
「ミズッムシ！　ミズッムシ！　ミズッムシ！」
さしもの三悪も、これをムシすることはできず、なんら方策をこうじることもできず、転げ回っていた。
「あ〜、カイカイカイ。カイ〜！」
そして、緊急事態を告げて点滅するコクピットのなかからは、脂に塗(まみ)れた奇妙な頭蓋骨(ずがいこつ)が、危険を察知して、脱出していく。
「うーむ、これまでだべェェェ！」
「あー、ドクちゃん！　見捨てるなんて、しどーい！　カイカイ！」
もはや、混乱の極みに達した三悪も、無我夢中で、夜空に躍りでたことはゆーまでもない。
虚空に浮かぶ髑髏武者は炸裂(さくれつ)した。
黒いドクロマークの煙が高く高くたち昇った。
「ヤッターヤッターヤッターマン！　それ、勝利のポーズだ！」
と、おきまりの凱歌(がいか)をあげるヤッターマンだったが、アイちゃんは、負傷した足の痛みに、顔をひきつらせた。

しかし、眼下にオダテブタの姿を見て、その顔には嬉しさがひろがっていく。
「オーちゃん！……間にあったわ」

巨大なイルミネーションの前で、佇(たたず)んでは見仰ぐ剛毛巨大猪ことオダテブタ。
その肩に、ボロボロにユニフォームを破られ半裸と化したドロンボーたちが落ちてきた。
「んまー、なつかしいわねぇ、オーちゃん」
「ボクちゃんたちと力を合わせて、また世界を牛耳ろう！　いや、豚汁(とんじる)べきだよ。なんてったって身内だもん。話しあえばわかる。ねね？　そーしよう」
「まんねんまんねんねん」
全身をかきむしりながら、私情に訴える三悪。
オダテブタは呟いた。
「関係ないね」
即座に無視された三悪は点ポチまなこになる。
「――――――」
「しょ、しょーんな水くさいじゃないの」
「もとの昔のマブダチに戻っておくれ、ねーオーちゃん？」
場違いなセクシーポーズで、オダテブタの気をそそろうとするドロンジョ。

が、ウロンげな目でそれを見ているオダテブタの目の前で、閃光が放たれた。

「ケンダマジーック！」

「シビレステーッキ！」

だれあろう、われらが正義の味方ヤッターマン！

「シビシビシビー！」

痺れのたうちながら、応戦の構えにたちなおろうとするドロンボーの前に、立ち塞がって、ガンちゃんは言い放った。

「アイちゃん！　君はオーちゃんの説得に！　雑魚どもはボクにまかせろ！」

「ザコっ!?　かっこーつけてくれちゃって！　ザコーが高いのはおまえのほうだろっ！　知ってんだぞっ、カカトの高いブーツはいて短足ごまかしてんだ。世間を欺くこの短足少年め！」

「いったなーっ！」

このやりとりをよそに、

アイちゃんは優しく微笑んで、オダテブタの掌に乗り、微かに揺れる瞳で彼を見あげていた。

「オーちゃん……よかった。復讐は思いとどまってくれたのね」

「――――」

「あなたとの約束を破った人たちは、いまごろ後悔してると思う……あなたがもとの姿に戻ってくれたなら、きっと……きっと、あなたのもとにとんできて、謝ると思うのよ」

「それって……愛の……復活？」

「ええたぶん。……少なくとも、いまの私のココロと同じ気持ちになってくれると思うの」

巨大猪は、考えるふうに、剛毛のなかから突きでている爪を噛んだ。

「わかった……アイちゃんがいうなら」

コクリと頷(うなず)いて、オダテブタは、アイちゃんをその肩に乗せると、巨大な椰子の木ロケットに登り始めた。

「この上の椰子の実をかじれば、ぼくはもとのコブタちゃんに戻れるのさ」

アイちゃんは嬉しさに顔を紅潮させて、微笑み返した。

この意外な展開に、ほくそ笑んだのは、だれあろう『血染めの緋豚団』のネオ・ブヒのメンバー。一時は、予定外の異次元からの椰子の木の炸裂に、あやうくしかけの椰子の木まで誘爆してしまうのでは、とハラハラしていた彼らであったが、ここまでくれば、もはや目的を達したに等しい。

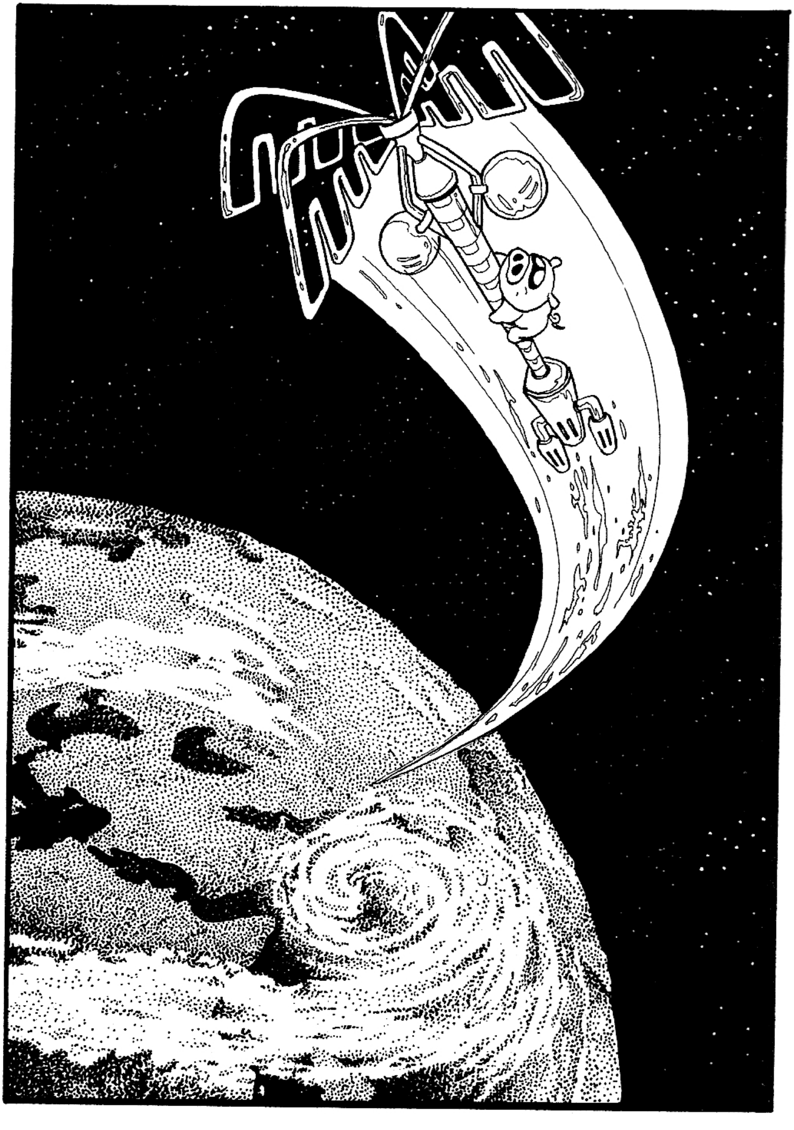
「ブタもおだてりゃ木に登る、ブウッ」

イルミネーションの椰子を登るオダテブタの肩で、アイちゃんは、これで無気力になってしまった人々に、明日の希望が再び甦るんだわ……と、ヒロインらしい感激にひたっていた。
が！
「アイちゃん！　危険だ！　オーちゃんを登らせちゃいけない！」
「え？」
椰子の木の下方から、登ってくるガンちゃんを見下ろすアイちゃん。
そのまた下から、懲りない三悪が、しつこく登ってくる。
「このロケットには核反応がみとめられる！　このまま登っていってはどんなしかけになってるかわからないんだ！」
「な――――」
アイちゃんが、驚愕して息をのんだとき、ゴゴゴゴゴコ……重い唸りを発して椰子の木ロケットは夜空に浮上を始めていた。
「やめて！　オーちゃん！　登るのはやめて！」
「ボクはもとの姿に戻るんだ……愛を、ボクのココロに取りもどすために……」
「やめてーっ、オーちゃんんんんっ！」
アイちゃんの悲痛な叫びを振りきって、オダテブタは登っていく。

昇る、昇る、椰子の木ロケット。
すでに大気圏を突破しようとしていた。
切り離された第一段ロケットとともにドロンボーは落ちていく。
ガンちゃんは、悲痛に叫んでオダテブタにとりすがるアイちゃんをむりやり引き離して、ヤッタードジラのなかに避難させた。
「止めて！　ガンちゃん！　オーちゃんを止めてーっっっっ！」
「アイちゃん、もう、ぼくたちの力でも、どうすることもできないんだ——」
「オーちゃんんんんんっ……」
アイちゃんの目の前は涙に揺れ、そして何も見えなくなってしまった——。
宇宙のはるか彼方で、チカーと閃光が瞬(またた)いた。星のキラめきではなかった。

エピローグ　そして、オダテブタはいなくなった

アイちゃんは、ガンちゃんに抱きかかえられるように、泣きつづけていた。
新宿御苑(ぎょえん)。よく晴れた青空のもと、冬の陽射しながら温かい芝生のうえだった。
「わたしのせいだわ……」
まっ赤に泣き腫らした目が、痛々しい。



ガンちゃんは、あれからさんざんアイちゃんの気をなだめようと、慰めてきたが、もはや、優しく肩を抱いてやることしか残っていないのだ。

ピクリ、とアイちゃんの肩が動いて、ふとその目が青空に向けられた。

「？」

いぶかしげに、ガンちゃんはその横顔を見る。

「生きてる！　オーちゃんは生きているわ！」

全身を歓喜に震わせて、アイちゃんは立ちあがると、目を閉じた。

感じる。あのかわいいピンク色の肌。つぶらな瞳。長〜い睫。かたちのいい鼻。そのひとなつこそうな笑顔がこちらを向いて、ニッコリと。

オダテブタは、燦めく星空のなかを飛んでいた。どこへ向かうのか、何を思うのか、それは知らない。

ただ、満足そうに、その和毛の鼻をかわいらしくめくりあげ、ブヒ……と鳴らしただけだった。

ドロンボーは、あろうことか、秋田県大館市の警察署の留置場で、惚けたように、三色のトイレットペーパーを繰りながら、虚ろな目で座りこんでいる。

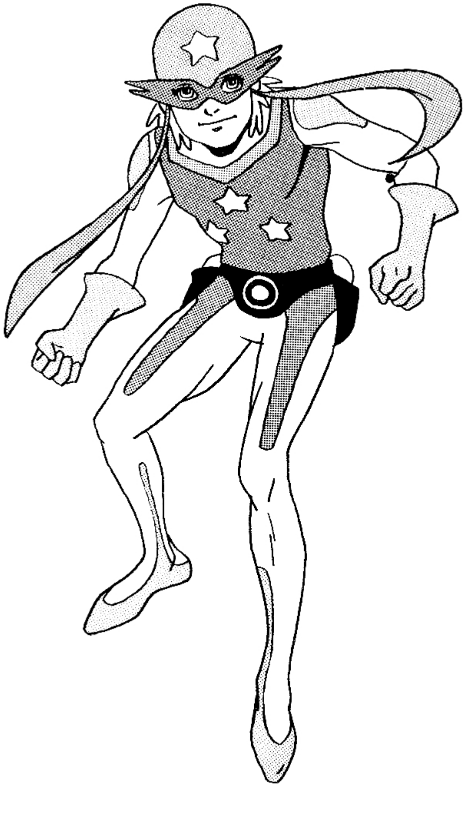
「赤巻紙黄巻紙青巻紙……赤巻紙黄巻紙青巻紙……」

説明せねばなるまい。
ロケットとともに、大館市の川に墜落したドロンボートリオは、どうやら頭の打ちどころが悪かったらしい。
突然、スーパーに走りこんでは、三色のトイレットペーパーにつかみかかって、わけのわからない行動を始めたのだ。一一〇番の通報を受けて、飛んできたお巡りさんに、とりおさえられると、「オダテブタ！　オダテブタ！」と叫び狂って暴れ始めたのだ。
昇級試験の勉強で、テレビ中継のオダテブタ騒ぎを知らぬお巡りさんは、とりあえず、暴力行為の現行犯で、逮捕。
オーダテのブタ箱のなかに、しまりのないシャレで納まったドロンボーは、駆けつけた医師の診断で、『突発性アルツハイマー症候群』と診断され、病院のおむかえを待っている。
『血染めの緋豚団』は沈黙し、ドクロベエは姿をくらました。
ツトム君やナンノを始めとする人々は、前非を悔いて、ひたすら忙しい合い間をぬっては除幕式をおえたばかりのオダテブタ観音に毎月一度は詣（もう）でて、ザンゲの日々を送っている。
再びオダテブタが戻ってくるか、それはいまの私にも説明のしようがない。
まずはめでたし。再び会える日がくるかどうか。ご静聴ありがとう！　ウンパッパ！

オタスケマン異聞

1990年セコビッチの冒険

曽田博久



ボクちゃんの家出

「まったくもうクレオパトラにゃ、ズッコケちゃったな」

「ホンマやで、ワイもひと目見たとき、乳母(うば)か召使いかと思うたもん。キンキラ金のブレスレットやネックレス、ムチ打ちになりそなごっつい王冠。それにまあ身体(からだ)中つけもつけたりダイヤやルビー、トルコ石、ガーネット……それになんちゅうたかいな、あれ、ラ、ラ、ラピス・ラズリとかゆう宝石なんかがあらへんかったら、ホンマあれはただのオバハンやで」

人の悪口、ことに女の悪口をいわせると、ボクちゃんのお友だち、ヨタノフ・ドワルスキーの勢いはとどまるところを知らない。

けなすことけなすこと、彼の下劣な品性そのままに罵詈雑言(ばりぞうごん)をつくすんだから。

おまけに彼はボキャブラリーが貧困だから本当にもう聞くに耐えないえげつないものになってしまう。

「目ジリはシワシワでよ、二重顎(あご)。おっぱいはベロンで三段腹やで。ケツもでこうおましたな。なんぼ三人もガキを生んだからゆうても、あの程度の女なら掃いて捨てるほどおるで。今日びの女は子持ちでもそう見えへん。三十女でも震えのくるようなええ女、なんぼでもおりまっせ」

「そうはいっても、ドワルスキー。紀元前三、四十年も昔と今を比べちゃ気の毒ってもんさ。

いくらエジプトの女王といったって、エステティックもない時代だったんだからな。食い物も違うし、第一平均寿命が違う。当時のエジプト人の平均寿命は四十歳もいかないんだぜ。支配階級はもっといいだろうけど、それにしたってタカが知れてるさ。三十の声を聞いたら、はや人生半分以上経過したと思わなきゃ」

「ほなら、八歩譲ってやでぇ……」

「はっぽ？　ひゃっぽだろう」

「百歩！　ひゃあッ、そんなに譲るのかあ……ワイはずっと八歩やと思うとったで」

まったくもうたまらん奴だ、こいつは。

「よかったね、ひとつ勉強して」

「ウン、九十二歩も進歩したわけや、たしかにこいつはごっついで」

素直なのはいいんだけど、くたびれる奴だ。

「そこで、八歩……じゃなかった、百歩も譲ってやで、若かりしころのクレオパトラはごっつうべっぴんやったとしよう。三十過ぎたあの姿からは想像もつかへんけどな。しかし、それにしても世界一の美女てないい過ぎやおまへんか？　世界一は吹き過ぎやで、ホンマ、どついたろか」

「怒るなよ、クレオパトラがいったわけじゃないんだから。後世の人間がそういったんだ」

「なんでや、なんであの程度で世界一なんや」

なんでこんなことでこいつに食ってかかられなきゃならないんだと思うのだが、ここでいい加減にあしらうと、いくら傷害保険に入っていてもたりなくなってしまう。面倒臭いし、どうせわかりゃしないと思うけど、一応真摯な態度で解説してやらなければならない。

「やっぱりそれはエジプト王国の魅力につきるのさ。当時クレオパトラの時代においてもすでにピラミッドは永遠の謎を秘めた神話世界の存在になっていた。このピラミッドに象徴されるエジプト文明に、古代ギリシアの歴史学者や哲学者たちがどれだけ魅了されたことか。その当時からナポレオンの時代に至るまで、ヨーロッパから見たエジプトは常に太古のロマンと無限の富をはらんだ王国だったのさ。

いくら落ち目とはいえ、クレオパトラはなんといってもそのエジプトの女王だぜ。絶世の美女でなくたって、エジプトを狙う野心家ならクレオパトラは無視できない。

クレオパトラはそこへつけこみ、カエサル（シーザー）を籠絡し、子供までつくっちゃった。今でいえば不倫の子だよね。だがローマの英雄カエサルとの間の子なら、王国の後継者としてはバッチリ、鉄板より固いと思っていたら、カエサルは暗殺されちゃった。でも彼女は負けない。次にアントニウスを籠絡し、双子をつくっちゃった。ただただエジプト王国を守り、繁栄を願うため、ローマの将軍たちを次々と手練手管どころか全面的に身体を張ってとりこにし、母として妻として女として怒濤の時代を生き抜いた。

こういうときの女って実物以上に美しく輝いて見えないかい。そのあげくローマ帝国に破

れ、悲劇的な最期をとげた。後世の人間だって、よってたかって絶世の美女に祭りあげちゃうさ」

「セコちゃん、エライ！　それだけ女について語れる男はめったにおらんで。それだけブスに寛容で理解のある男も珍しいで。せやけどその割にはブスにもてへんちゅうのはどないしたこっちゃ」

「ほっとけ」

もてないのはお互いさまだ。

だが知性と教養にまさる、いやはるかに凌駕している分だけ、ボクちゃんのほうが希望があるのだ。

でもそれをいうと生命保険のお世話にならなければならないので、あとの言葉はやせたソクラテスのような腹にそッと呑みこむ。

しかし、こいつは動物的カンでボクちゃんの腹のうちを見透かしたのか、たちまち険悪な目つきになった。

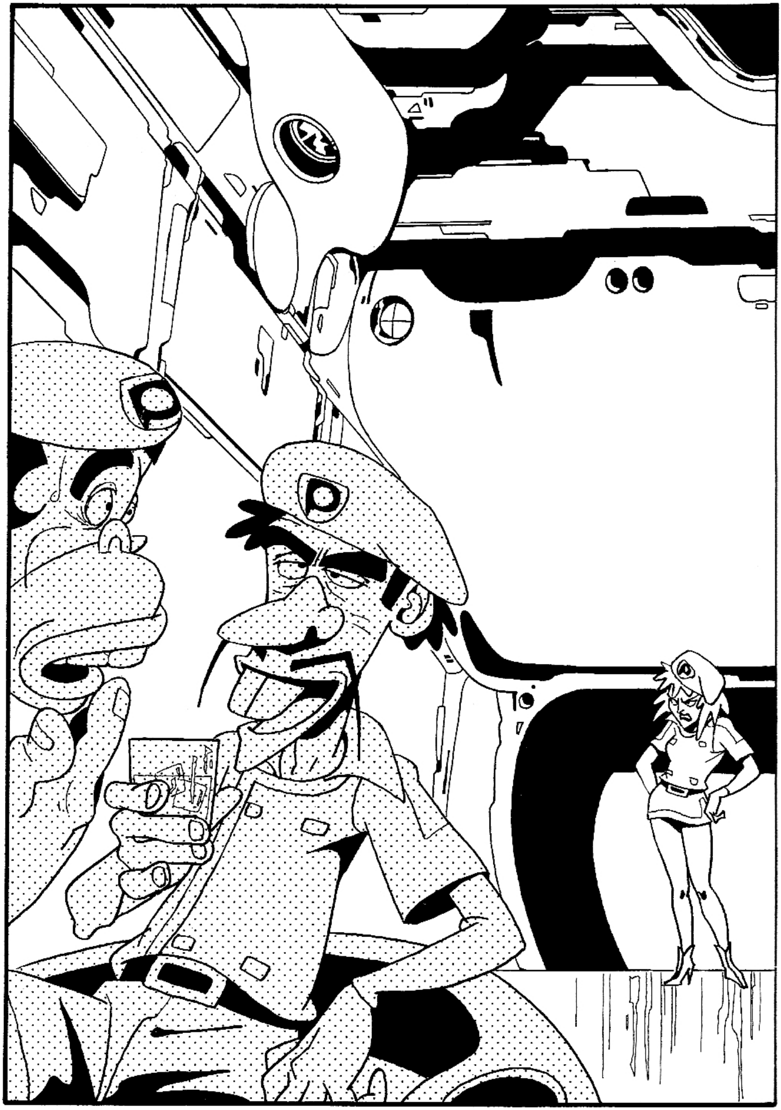
思わずボクちゃんは身構える。

こんなとき、ドワルスキーの巨体は信じられないスピードですっ飛んできて、ボクちゃんをレストルームの壁まで吹っ飛ばすのだ。

これまで何度生命保険がおりかけたことか。逃げるが勝ち。

命あってのものだねだ。
ところが今日のドワルスキーは深いソファにますますズブズブと沈んでいく。
こいつも疲れているのだ。
そりゃあそうだ。一週間に三度のタイムスリップは多過ぎるというものだ。
非常識！
しかも週末の臨時ツアーが古代エジプトときたもんだ。その上、ああ、思い出したくもない……近来まれに見る負け戦。
タンクのような身体、荒縄のようにぶっとく鈍い神経の持ち主、タイムパトロール隊A級タイムパトローラー、ヨタノフ・ドワルスキーにしてもくたびれ果てているのだ。
ましてやボクちゃんのような知性派で傷つきやすい魂の持ち主はいうまでもない。
遙かなる時の旅を終えて戻ってきても、地球を遠く遠く離れた宇宙ステーション（なんとタイムパトロール隊本部は宇宙ステーションなのである）のこんなレストルームで酒を飲むしかないのだ。しかも、いつも同じ顔と。うんざりだけど、ボクちゃんにはこいつと常に一緒でなければならない事情がある。
ドワルスキーにしたって気持ちは同じだろう。
何がレストルームだ。こんな所でふたりで酒を飲んでいれば、フラストレーションは高まるばかり。些細なことですぐに暴力沙汰に発展する。もちろん一方的に発展させるのはドワ

ルスキーだけど。
ボクちゃんはまず第一にボクちゃん自身の身の安全をはかるために、そしてボクちゃんとドワルスキーの間の平和的かつ友好的な雰囲気を保つために、最高のストレス解消法を見つけた。
それが悪口なのである。
本当に不思議だ。ボクちゃんの知性をもってしても、なぜかくも他人の悪口をいうのが気持ちよいのか解明できない。
おっと沈黙は危険だ。
ドワルスキーの目がすわってきた。爆発寸前、危険な徴候である。
何か喋らなければ、こいつの喜びそうなことを。とっておきの悪口を……。なんたってあの人の悪口が最高。
「しかし、まあなんだね、今度の旅でいちばん面白かったのは、アターシャ様だったと思わないかい」
ドワルスキーの顔がニターッと崩れた。
待っていたのだ。ドワルスキーもあの人の悪口を……。百万言費やしてもたりないあの人の悪口。これをいい合っている間はボクちゃんたちは平和で幸福。友情に似たものすら生じてくるから不思議だ。



もちろん、ボクちゃんはお育ちもいいし、ちゃんとした教育も受けているので、本人のいないところで悪口をいうことに関しては、いささか良心の呵責を感じないわけではない。

でも、この商売、いやこの任務、いや使命というべきか、こうでもしなきゃやってられないんだよね。

「ホンマや、もう行く前からごっつう緊張しとったで。なんべんもコンパクト覗いて、ルージュをひく手が震えとったで」

「へえッ、あのアターシャ様が……」

ボクちゃんも知ってたけど、わざと素ッ頓狂な声をあげて、下品な雰囲気を盛りあげる。

「そりゃあ、ワイらの前で我こそは史上最高の美女ゆうてさんざんうぬぼれとったんやからな。クレオパトラ？　楊貴妃？　なんぼのもんじゃいちゅうてイキがっとったんが、クレオパトラに会わなならんようになったんやから慌てますがな」

「アンドロメダマ号に乗りこみ、タイムスリップするときにも、レモンパックしてるんだもん。古代エジプトに到着した瞬間、レモンの輪切りのひとつが剝がれて、ボクちゃんの口の中に飛びこんできたときは参ったよ。おえって吐き出すわけにもいかず、仕方ないからもぐもぐ食べちゃったもんね」

「さあ、それからやがな、いよいよクレオパトラとの御対面」

ドワルスキーは身を乗り出してくる。

「アターシャ様もいざとなると意外と度胸がないんだよね。ビビッちゃってさ、まるで泥棒猫のように宮殿の柱の陰からそッと覗くなんて。面白かったのが次の瞬間だったよな。思わず『勝った！』って叫んじゃうんだもの。指でVサインして二メートル以上跳びあがってたぜ。でもその一瞬の中にもっと傑作なことがあったのに、ドワルスキー、気がつかなかったかい？」

「……」

「ヒ、ヒ、ヒ……なんとそのとき、左手はどこにあったかさ。右手はVサイン。じゃ、左手は？　どこだと思う？」

「……」

「な、な、なんと、アターシャ様は左手の親指と人差し指で自分の三段腹をつまんでいたのさ。すごいね。女の執念って。ただうわべだけじゃなくて一瞬のうちにお腹の脂肪のつき具合まで勝負してるんだもん。ハ、ハ、ハ……おかしいだろう」

「……」

「ま、何はともあれ、アターシャ様が勝ってご同慶の至りさ。あれで負けてたときのことを想像してみろよ。ゾッとするね。ボクちゃんたち生きてはいなかったよ」

「……」

「しかし、なんだね、クレオパトラに勝った勝ったと、あのあとエライ御機嫌だったけどさ、

三十過ぎたさ、三人も子供を生んだ女に勝ったからって、そんなに自慢することかい？　ねえ、どう思う、ドワルスキー？　さっきから黙ってないでなんとかいったらどうだい。どうしたの、酔っ払っちゃったのかい」

酔っ払っていたのはボクちゃんのほうだったのだ。ボクちゃんはもっと早く気づくべきだったのだ。

ドワルスキーの土気色の顔は、決して酒のせいでも疲労のせいでもなかったことに。ドーナツ型の宇宙ステーションの反対側にいてもツーンと匂ってくるあの香水の香りに気がつかなかったなんて。

今はもう酔いもどこかへ吹っ飛んでしまった。あの香りが部屋中にみちあふれ、肺の底まで染みこみ、むせかえりそうだ。

「セコビッチ」

思いきり甘ったるく優しい声をかけて、アターシャ様がボクちゃんの背後に立った。

背筋をひんやりと冷たいものが走る。

この声が曲者なのだ。

虫も殺さぬような声をして、この宇宙ステーションでどれだけのゴキブリを血祭りにあげてきたことか。

哀れボクちゃんももうすぐゴキブリの仲間に……と身の不運を嘆く間もなく、ガーンと凄

まじい衝撃が脳天を貫いた。
見なくてもわかっている。ハイヒールを逆さに持ってヒールの一撃を振りおろしたのだ。
続いて、ハイヒールを脱いだほうの足（身体の割には大ぶりな偏平足）の一撃が背中にズシーンと炸裂し、ボクちゃんは床に飛ばされ、ベチャッと文字どおりゴキブリのようにのびてしまった。
その上、さらに、
「ボケ、アホ、スカタン、マヌケ……」
タイムパトロール隊A級タイムパトローラーにして、タイムマシーン・アンドロメダマ号機長ヒステリーナ・アターシャとは思えぬ言葉をわめき散らしながら、ボクちゃんを踏みつけるのだ。
「ホンマにひどい奴やで、こいつは。アターシャ様のいない所ではいつもこうだっせ。もう聞くにたえんえげつない悪口ばっかりや。ワイはそんなん大嫌いやけど、生まれつき口ベタなもんやから、セコビッチにうまいこと注意もでけへん。内心耳を塞ぎたいと思いながら、仕方なしに聞いとったんです」
どこが口ベタだ。こういうときに限って知恵が回りやがって、アターシャ様の怒りの炎に油を注ぐようなことをいいやがる。
遠のく意識の中で、ボクちゃんはアターシャ様が葬り去った数百、数千のゴキブリたちと

同じ道をたどっていることを感じていた。
仲裁が入らなければ確実にそうなっていただろう。
危ういところを救ってくれたのは、ヒカルとナナとロボットのヒネボットであった。三人――いや正確には二人と一台というべきか――は、やはりボクちゃんたちと同じA級タイムパトローラーである。
ボクちゃんたちがA班とすれば、彼らはB班というところか。
ボクちゃんから見ればまだまだネンネの青臭いタイムパトローラーである。やたら正義感と使命感に燃え、タイムパトロールに青春しているのだ。
「どうして君たちは喧嘩ばかりしているんだい？　最近君たち三人ともおかしいぜ。いらいらしちゃってさ、ギスギスした雰囲気でなんだかとてもすさんでるよ」
よけいなお世話だ。
お前たちにわかってたまるものかと無視していると、
「セコビッチ、僕はとても心配してるんだよ。タイムパトロールというのはひとつ間違えると命取りのとても危険な任務なんだよ。チームワークがいちばん大切なんだ。それなのに君たち三人がそんな調子じゃ、そのうち必ず事故を起こすぞ。東南長官も心配しておられる」
ますますもってよけいなお世話だ。

ボクちゃんたちのことをわかりもしない上に見当違いなことをいわれた日には、ますますいらいらが高じるってもんだ。

第一冗談じゃない。いくらタイムパトロール隊の養成機関を史上最年少最優秀最短時間で卒業したとはいえ、こんなヒカルごとき坊やにタイムパトロールの心得を説教されてたまるものか。

こちとら歴戦のつわものだぜい。キャリアが違う。格の違いを示すためにもいちいち相手になんかしてられるかと、露骨に無視し続けていたら、ナナちゃんがボクちゃんの傷の手当をしながら優しくメッと睨(にら)むではありませんか。

正直いってボクちゃん、ナナちゃんにだけは弱いんだよね。すらりとした身体はもぎたてのレモンのようにみずみずしく、眩(まぶ)しいばかりの光沢(こうたく)を放っている。でもまだ固くて、酸っぱい。甘い香りの中に漂(ただよ)うその酸っぱさがたまらないんだよね。

「ねえ、セコビッチ。私たちは歴史を改竄(かいざん)しようとするトンマノマントとその配下のオジャママンたちと戦っているのよ。でもいつも危なくなると、いずこからともなく現れるオタスケマンという謎のふたり組に助けられ、オジャママンを撃退してもらっているわ。でもそれではいけないと思うの。いつまでもオタスケマンを頼っていては。私たちタイムパトロール隊員の手でオジャママンを倒し、トンマノマントを倒さなくては。そのためには私たちはもっと力を合わせて頑張(がんば)らなければならないわ。正しい歴史を守るために、お互いに助け合い、

励まし合わなくちゃ。そうでしょ」
ナナちゃん、たしかに君はいい子だ。だが君はいちばん思い出したくないことを思い出させてしまった。ほんのわずかな間だけでも忘れていたかった最も忌まわしいことを。
ナナちゃん、君は無邪気で明るい。
だが無邪気に明るく語れば語るほど、ボクちゃんは屈折し、どんどん暗く落ちこんでいくのだ。そして、ドオッと疲れがぶり返してきた。
ナナちゃんの笑顔に忘れていた疲れが、ナナちゃんの笑顔でぶり返してくるなんて皮肉なもんだ。
現実のどうしようもない泥沼にどっぷりとつかり、あがきもがいている自分の姿を認識したボクちゃんはのろのろと立ちあがり、暗い顔で医務室を出ていったのだ。
ありがとうともいわずに。
「ヘンな人」
とナナちゃんの声が聞こえた。
ボクちゃんは口の中で、フン、ガキめと呟いた。所詮ガキなのだ。ボクちゃんの悩みのほんのひとかけらにさえも気づかないのだから。いや苦悩していることさえも気づいていないのだ。
その苦悩の原因がなんたるかを知ったら、あのガキどもは腰を抜かさんばかりに驚くだろ

うなと思う。
こういうとき、ボクちゃんは思いきり叫びながら、タイムパトロール隊本部のこの宇宙ステーション内を走り回りたいという衝動に突き動かされるのだ。
（ボクちゃんがオジャママンなんだぞ！）

告白しよう。
ボクちゃんことペレストロイカ・セコビッチ、ヨタノフ・ドワルスキー、ヒステリーナ・アターシャ様こそが、かの有名なオジャママン三悪トリオなのだ。
表向きは真面目（まじめ）なタイムパトロール隊A級タイムパトローラーであるが、その裏ではひそかにトンマノマント様の指令を受け、歴史の改竄に精を出しているわけである。
ただしトンマノマント様の正体はボクちゃんたちさえも知らない。
わかっていることといえば、上から読んでも下から読んでもトンマノマントというだけである。
いつも一方的にこちらの都合などお構いなく指令してくるのだ。風呂へ入っていようが、トイレに入っていようが、寝ていようが、デートしていようが、直（ただ）ちに集合しなければならない。
実はボクちゃんたちのレストルームにあるホームバーの裏側に秘密の部屋がつくってある

のだ。
そこに大きなスクリーンがあり、トンマノマント様はいかにも悪の巨魁(きょかい)らしく、そこに自分のしかも逆さまの影を映し出して、阿呆(あほう)臭い、いや偉大なる作戦を発するのだ。
「アメリカ大陸を発見したのは断じてコロンブスではない。わがトンマノマント史書によれば、それはドロンブスという羊飼いである。コロンブスごときにアメリカ大陸を発見させてはならぬ」
こういわれちゃうと、ボクちゃんたちは一四九二年のスペインへ飛び、ドロンブスという海を見たこともない羊飼いのカナヅチを四苦八苦して遠征艦隊の艦長に仕立てあげるわけだ。
トンマノマント様には、偏執狂的なところがあって、ある作戦に興味を持つと続けざまに同じような作戦に取り組む性癖(せいへき)があった。
この一件が発端で発見シリーズと銘打ち、やれリビングストンだの、アムンゼンだの、ヘディンだの、ヒラリーだのという探検家や登山家の名を正史から抹殺(まっさつ)することに執念を燃やしたのであった。
おかげで炎熱のアフリカから極寒の南極、はたまた炎熱のタクラマカン砂漠から極寒のエベレスト山頂へと飛び回らされる破目になった。
ボクちゃんたちは秘境探検隊かちゅうんじゃ。
やっと発見シリーズに飽きたかと思ったら、次は戦争シリーズだった。

源平合戦や関ケ原の戦、幕末戦争の結果を正反対にしろといわれて、弓矢や鉄砲玉の飛び交う中を駆け回らされてへとへとになったものだ。

でもこんなのはまだ楽なほうであった。

トンマノマント様はヒットラーを敬愛しており、ヒットラーを自殺させてはならん、ドイツを勝たせいといわれてどれだけひどい目にあったことか。

毒ガスで死にかけ、戦車につぶされそうになり、大砲をぶちこまれ……。

そして、とどめはナナちゃんもいっていたように必ずオタスケマンの鉄槌だ。

やっとの思いでなんとか光明を見い出したかと思うと、必ずあの憎い憎いオタスケマン、青二才の男女ふたり組にコテンパンにのされてしまうのだ。

かくして青息吐息、息も絶え絶えに戻ってくると、トンマノマント様の怒りはますます燃えさかり、さらに苛酷な指令を発することとなるのだ。

タイムスリップというのは肉体的精神的にものすごいストレスを生じるので、どんな優秀なタイムパトローラーも本部規則によってタイムスリップは一ヵ月に一回と決められ、任務が終わったあとは必ず一週間のリフレッシュタイムが設けられている。

それくらいシンドイ仕事なのだ。

だが負けが続くものだから、トンマノマント様の指令は半月に一回になり、十日に一回、一週間に一回、四日に一回、ついには二日に一回！

もはや限界に達してしまった。
しかもこれだけ極秘活動が続けば、東南長官たちの目をカムフラージュすることも大変なのだ。どこでどんな些細なことで、ボクちゃんたちの秘密がバレてしまうかもわからない。
常に神経をピリピリさせていなければならない。
たとえばドワルスキーの寝言にまで。
「ワイはオジャママン三号やでぇッ！　オタスケマン、出てこいッ！　今度こそどついたるど！」
「アターシャ様のドアホ、ブス、イモ、タコ……とセコちゃんがゆうとったでぇ」
シンと寝静まった真夜中（といっても宇宙ステーションではいつも夜みたいなものだから、正確には睡眠タイム）に、割れ鐘のような声で叫ばれてもみてくれ、もういきなり心臓をワシづかみにされたような気がしてはね起きてしまうのだ。
おちおち眠ってもいられない。
こういう状況の中で、トンマノマント様は戦争シリーズにも飽き、ついにあの最悪の女王シリーズに取りかかったのである。
世界中の美女と自分との間に子供をつくり、その子に世界を支配させようという、だれでも一度は夢みることだけど、これまでだれひとりとしてなしとげたことのない究極の作戦。
後継者を歴史の中に残そうというトンマノマント様の意志に、これまでの作戦とは重みが

違うことを感じて思わず緊張した。
　といって子づくりのためにトンマノマント様自ら出向くわけではない。ボクちゃんたちは試験管に入った一CCばかりの白く濁(にご)った液体を授けられたのであった。
　ちょっと量が少ないのではないかと思ったが、儂(わし)の中味は濃いと一言のもとに退けられ、ボクちゃんたちはそれを恭々(うやうや)しく冷凍すると、古代エジプトへ運んだのであった。
　クレオパトラとカエサルが結婚する前に、クレオパトラに人工受精する予定だったのだが、なぜか十数年もずれてタイムスリップしてしまい、もう三人も子供を生んだ三十女のクレオパトラに出会ってしまったのだ。
　まあ高齢出産でも構うまいと、実行に取りかかったのだが、例によって例のごとく、またあと一歩のところで、あのにっくきオタスケマンが敵ながら颯爽(さっそう)と登場したのだ。
　ボクちゃんたちは増水期のナイル川にたたきこまれ、トンマノマント様の貴重なる一CCはエジプトの砂漠で一瞬のうちにジュッと蒸発してしまったのだ。
　アターシャ様はあの秘密ルームで厳しく叱(しか)られたのであろう。
　ボクちゃんは知っているのだ。
　アターシャ様はカエサルに面会する前の芳紀(ほうき)まさに十八歳のクレオパトラに会うことをためらい、わざとタイムスケールを十数年ずらせて、三十女のクレオパトラに出会ったことを。
　だから今日はアターシャ様ひとりだけが、作戦失敗の責任を取らされて、トンマノマント

様のお仕置きを受けたのだ。

ボクちゃんはそんなアターシャ様の女心がわからないではない。

だからトンマノマント様に叱られた怒りのハケ口をボクちゃんに向けてきたとしても、ボクちゃんは許してあげたいと思うのだ。

しかも、あんなアターシャ様を傷つけるようなことをいっちゃったんだもの、アターシャ様が逆上するのも当然だったのだ。

ここでもうひとつ告白すると、実はボクちゃん、アターシャ様のハイヒールで蹴(け)飛ばされ、踏ンづけられたとき、なんだかちょっぴりヘンな気分になってしまったのだ。

しかし、本当にもう限界だ。

ボクちゃんは耐えきれない。

そう思いながらハッチを開くと、その奥の小さな艇庫(ていこ)には、可愛いシャトルが横たわっていた。

これは、昔この宇宙ステーション建設初期に、資材運搬(うんぱん)宇宙船とステーションとの間の連絡用に使われたひとり乗り小型艇で、ステーション完成後もそのまま放置されていたのだ。

いまはもう役立たずのシャトルと、だれにも顧(かえり)みられなくなったことがボクちゃんには幸いし、ボクちゃんはひとりになりたいときはいつもこのシャトルの中に入りこみ、ひそかにこのシャトルを改造していたのだ。

ひとり乗りのタイムマシーンに。
改造作業に取り組んでいるときは現実の辛さを忘れることができたのだ。
いつかこれでボクちゃんは脱走してやるのだ。好きな時代の好きな場所へ。
その思いがボクちゃんを支えていてくれたのだ。
そして、こいつは実はもうとっくの昔に完成していたのだ。
それからは、もうボクちゃんはいつでも逃げられるのだ。辛くなったらいつでも。だから辛いけどもう少しだけ頑張ってみよう。そういうことの繰り返しでいままで最後の決断を一寸刻みに延ばしてきたのだ。
実をいうと怖かったのだ。
いざとなるとトンマノマント様から逃げることが。
だが本当にもう限界だ。
もういやだ。こんな生活。
ボクちゃんはタイムマシーンに乗りこんでいた。
指がタイムスケールのデジタルを合わせる。
一、九、九、〇。
ボクちゃんの両手は操縦桿を握る。
これまで何度も引こうとして引けなかった操縦桿を。

ついにボクちゃんは勇気の操縦桿を引いた。

ボクちゃんの天使

ボクちゃんはアルタの前に立っていた。
軽い時間酔いのせいか、それとも脱走という重大な規則違反を犯した罪悪感のせいか、それともついに自由を得たという解放感のせいか、あるいはそれら三つの理由全部のせいか、ボクちゃんの足は地についているような気がしなかった。
まだかすかに震えている。
心臓もまるで狂ったペースメーカーのように乱打し続けて自分のもののような気がしない。まわりの風景も曇った水槽越しに見ているようで、本当に自分の目で見ているような気がしなかった。
自分が自分であることを確かめるために深く息を吸ってみた。確かに肺の奥まで酸素が補給され、体内に新鮮な血液が送り出されていくような躍動感が伝わってきた。
それにつれて時間酔いも薄れ、罪悪感も薄れ、解放感も薄れ、実感が湧いてきた。
ボクちゃんは今、一九九〇年の新宿東口アルタの前にいるのだ。
日本の首都、東京一の繁華街新宿に。
ボクちゃんの足はさっそく歌舞伎町に向かった。

アルタの手前の大きな通りを下り、靖国通りとぶつかったところを渡れば、その先が歌舞伎町だということぐらいわかっていた。

いや地図を思い浮かべなくとも、ただ人の波に身をまかせていけば、自然に歌舞伎町に運ばれていくことも知っていた。

なぜ、未来の人間であるボクちゃんがこんなに詳しいかって？　かつて一度も来たことがないのに、一九九〇年の新宿をまるで故郷の町でもあるかのように歩けるかって？

実はボクちゃんは例のシャトルをタイムマシーンに改造したとき、タイムスリップ・カメラ・システムも発明したのだ。

どういうことかというと、小型カメラをタイムスリップさせ、そのカメラから送られてくる映像をリアルタイムで見るというシステムである。

ひとり乗りタイムマシーンを完成させても、まだ脱走する勇気のなかったボクちゃんは、この小型カメラを過去へ送ることによってさまざまな時代を覗き見し、気分だけでも脱走し、ストレスの解消をはかっていたのだ。

それにこうしてさまざまな時代の情報を得ておくということは、いざ脱走というときになって必ず役に立つと思っていたのだ。

これはオジャママンとしての作戦を失敗し続けて得た貴重な教訓なのである。

かくしてあっちこっち面白そうな時代をリサーチしているとき、わが愛する小型カメラは

ふらふらと週末の夜の歌舞伎町へさ迷いこんだのである。
初めに申しあげておきますが、ボクちゃんは非常に教育熱心なママに育てられました。幼稚園に入る前から早期教育を受け、以後はアカデミー学園都市のラサール大学付属小、中、高と全寮制の一貫教育を受け、ラサール大学応用物理学科を優秀な成績で卒業するやすぐにタイムパトロール隊養成機関にスカウトされ、月面基地の秘密養成所でスパルタ訓練を受けました。
こうした青春を送ってきた若者が、ある日突然、週末の夜の歌舞伎町へさ迷いこんだときの驚きというか衝撃というか、困惑、混乱を想像してみてください。
それはまさにカルチャーショックでした。
ここにはボクちゃんの知らなかったことのすべてがあったのだ。
まだあどけなさの残った中学生や高校生が深夜の歓楽街をうろつき、ゲームセンターで遊びに興じる姿など、ボクちゃんの過ごした青春時代——いや今でも青春なんだけど——からは、想像もつかないことだった。
だがこれはほんの子供の世界。
けばけばしいネオンの向こう側にはいわゆるひとつの大人の世界があったのだ。
キャバクラ、テレホンクラブ、ホストクラブ、ショーパブ、ゲイバー、ソープランド、ファッションヘルス、ストリップ、覗き部屋……なんちゅう世界じゃ！　こいつらは狂ってい

る！　なんと愚かな！　なんとふしだらな！　これがボクちゃんたちの祖先か！　嘆かわしい！　と口汚くののしりながら、ボクちゃんの目はしっかりとモニター画面に吸いつけられ、それから以後二度と画面が切り換えられることはなかったのだ。

そして、画面に映る人々を二度と口汚くののしることもなかった。口もきけないほど引きこまれてしまったのだ。喉はからからに渇き、心臓は割れ鐘のように打ち続け、血管は今にも破裂しそうだった。

ボクちゃんにとっていちばん不安だったのは、こんなにも自分をとりこにしてしまったこの世界が、常軌を逸した異常なものであったらどうしようということだった。もしこれが異常な世界だったら、ボクちゃんも異常者ということになってしまう。

厳格な教育を受け、理性を友とし、真理を探究することを生涯の目標としてきたボクちゃんにとって、自分が異常な性癖、異常な好みを持った人間であることを認めるのは耐えがたかったのだ。

でも心配はいらなかった。

この眠ることなき不夜城に出入りする人々の大半は、キチンとネクタイを締め、カードで支払いを済ませ、毎日会社へ通うサラリーマンであった。あるいは将来そういうサラリーマンになろうという学生たちであった。

ボクちゃんは安心した。人間ってみんな何くわぬ顔してこんなことをしているんだ。

そして、これも勉強だなとつくづく思ったとき、ボクちゃんはエネルギー保存の法則は勉強したけど、人類保存の法則は勉強してなかったことに気づいたのだ。
恥ずかしながらボクちゃんはまだ童貞である。
そんなときである。ボクちゃんの愛しい小型カメラが天使を見つけたのは。そのとき以来、マイちゃんはボクちゃんの天使になったのだ。

ボクちゃんはその天使に会うためにエビ通りの入り口までやってきた。
アルタから迷うことなく最短距離を通って。
迷うわけがない。ボクちゃんはモニター画面を通して、この街へ何百回となく来ているのだ。どんな細い路地の裏でも、野良猫が何匹子供を生んだかまでも知っているのだ。
このエビ通りを抜けた正面突き当たり、名物の串（くし）エビを焼く煙の向こうにかすんで見えるあの大理石とガラスでできた白亜の館（やかた）の中にボクちゃんの天使がいるのだ。
だがボクちゃんは一向に天使の館へ近づけなかった。
この狭い通りは色とりどりの肌をした人々で埋（う）まっていたのだ。各国語が飛び交い、まるでテープを早回ししたような喧騒（けんそう）の中、必死に人波をかき分けていると、突如、腕をつかまれ、すごい力で店の中に引きずりこまれた。「ハーイ、ウエルカム、ニーハオ……」
笑顔でテーブルの前に座らせられると、串エビが二本となみなみと注がれたサワーのコッ

プがドンと置かれた。
ボクちゃんは慌てた。これから天使に会いにいく者が、串エビと焼酎の臭いをプンプンさせるわけにはいかない。
「あ、あの、ボクちゃん、飲めないの」
手を振って出ていこうとすると、茶褐色の顔をした男は頭から抜けるようなキンキン声で何やらまくしたてた。どうやらベトナム語らしい。
「エビ、エビ」
かろうじてそう叫んでいることがわかった。
飲めないならエビでも食っていけというのだろう。
仲間の店員がその声につられて、また一皿串エビを持ってこようとしたので、ボクちゃんは、
「ノーサンキュー、サヨナラ、ゴメン」
と叫びながら店を飛び出した。
背後でベトナム語の怒声が飛び交い、数人の男たちが殺到する気配がして、襟首をつかまれそうになったが、ちょうどそこへ、いかにもアラブの高官と思える巨漢がお供をぞろぞろ連れて入ってきたので助かった。
ボクちゃんを連れこんだ男が満面に愛想笑いを浮かべてペコペコしている。

ホッとして、改めてよく店内を見回してみると、働いているのは全員ベトナム人であった。この店だけではなく、このエビ通り沿いの店の店員はことごとくベトナム人なのである。
そうか、みんな、ベトナム難民なんだなとボクちゃんは思った。
この当時、大勢のベトナム難民が日本へ船で漂着していたことは、ボクちゃんも知っていた。
きっと彼らは日本定住の道を選び、エビ通りに就職先を見つけたのだと思った。それにしては客引きのやり方が強引で、あれでは商売にならないのではないかと心配したが、言葉もよくわからないことだし、民族性の違いもあることだし、彼らも食うために必死なのだろうと、ボクちゃんは善意に解釈した。
天使に会う前に、串エビの匂いが身体に染みこんでしまわないかと気にしながら、やっと人波をかき分けて館の前へたどりついた。
天使への案内人は黒いタキシードに身を包み、ボクちゃんを見ると微笑を浮かべ、胸の前で両手を合わせると軽く頭をさげた。
どうやら彼はタイ人のようであった。
さすが礼節と微笑の国、タイの若者であると、ボクちゃんは感じ入った。きっと留学生なんだろうなと思った。よく考えてみれば、真面目な留学生がこんな所でアルバイトなんかするはずがないのに……。すでに正常な判断力を失っていたのだ。

ピカピカの大理石に思わず滑りそうになりながら、ボクちゃんは自動ドアの向こうに吸いこまれていった。

一歩踏みこんだ瞬間、ああ、ついにここへ来たんだと思ったときから、ボクちゃんは周囲の一切何も目に入らなかった。

見えていたのは鏡の向こうのマイちゃんだけ。

こちら側からしか見えず、向こうからは見えない仕掛けになっているのだ。

不思議だった。それがすぐマイちゃんとわかったことが。だってマイちゃんはボクちゃんが夢にまで見たあの姿、純白のテニスウエアではなかったのだ。短いスカートの下からすこやかに伸びたあの眩しいばかりの脚はどこにもなかった。

長いスカートを巻きつけたようなタイの民族衣裳(いしょう)を身につけていたのだ。きっと経営者の気分が変わったのだろうと思った。

ボクちゃんはそれも悪くないと思った。マイちゃんの微笑(ほほえ)みによく似合っているし、より天使らしいと思った。

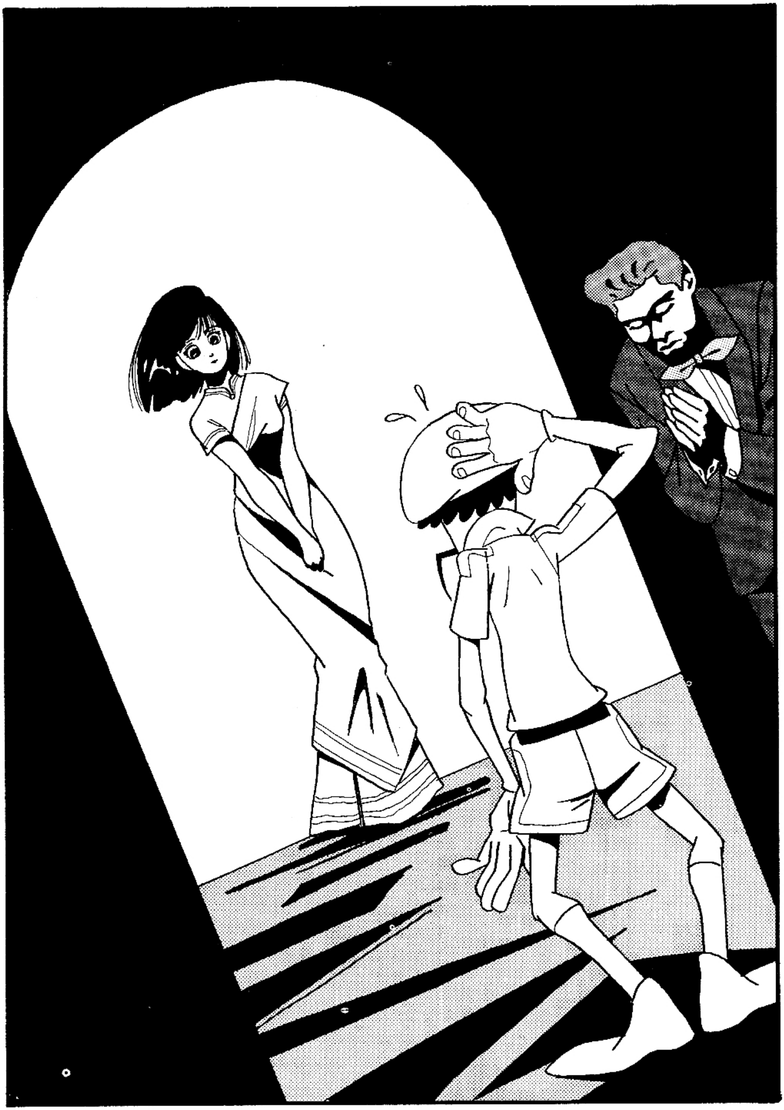
微笑と礼節の東洋の天使。

その微笑が不意にボクちゃんの前に現れると、ボクちゃんの手を取り一方へ誘っていった。

このあたりになると完全に時間の意識も方向感覚も欠落してしまい、気がつくとボクちゃんはボクちゃんの天使とふたりきりになっていた。

「シャワーを浴びましょうね」
まるで魔法でも見ているようにマイちゃんの衣裳が滑り落ち、まっ白な裸身が現れたとき、ボクちゃんは思わず目を閉じていた。
そしてそのまま奈落の闇(やみ)の底に沈んでいったのだ。

「お客さん、お客さん」
どこかで天使の声が聞こえる。ボクちゃんを呼んでいるらしい。耳元を柔らかく温かい息が撫(な)でていく。
目をあけるとマイちゃんが覗きこんでいた。
「気がついたのね」
ホッとしたようにマイちゃんはいった。
ボクちゃんは狭いベッドの上にあおむけに寝ていた。もちろん、服を着たままで。マイちゃんも天使の衣裳を身につけている。
どれくらいこうしていたのだろうか?
なんといいわけしたらよいのかと、回らぬ頭で必死に適切な言葉を探していると、人相の悪い男がいきなりノックもなしに入ってきた。
「時間だぜ、何してンだ」



「あの、このお客さん、気分悪くしちゃってずっと休んでたんです」
「なにッ」
じろりとボクちゃんを一瞥すると、
「だからどうだっていうんだ。さっさとしねえと、待ってるお客さんのほうが気分悪くしちまうぜ」
マイちゃんはおし黙ってしまった。
「いつまで寝てるんだ」
いきなりボクちゃんはベッドから引きずり降ろされ、ドアへ突き飛ばされた。
「痛いなあッ、何をするンですか」
「時間になったらとっとと出ていってもらわねえと商売にならないのさ」
そういって男はボクちゃんに手を差し出した。
乱暴なくせに意外と紳士なんだなと、思わずボクちゃんは握り返した。
一瞬男は当惑したようであったが、
「お客さん、冗談はよしてくださいよ。マネーだよ！　マネー！」
握手を求めたのではなかったのだ。そういえば差し出した掌は上を向いていたっけ。
今度はボクちゃんが目をむく番である。
「ちょっと待ってくださいよ。ボクちゃん、何もしてないんですよ、ただ気絶して寝てただ

けなんですから」
「この部屋に入れば三十分一万円なんだよ。何をしようがしまいが関係ないね、何もしなかったお前がドジなのさ。さあ、とっとと払って出ていってくれ、こいつにはな、指名がいっぱい入っているんだ」
一瞬ボクちゃんの天使は悲しそうな顔をした。
ボクちゃんがその顔に気を取られてぼんやりしていたものだから、男はいきなりボクちゃんの内ポケットに手を突っこんできた。
「何をするんですか」
「うるせえ」
男の手がボクちゃんの尻ポケット、そして上着やその他のポケットを素早く探った。
男の目が一瞬蛇のように細くなった。
その刹那、ボクちゃんも背筋にぞっと冷たいものを感じた。ボクちゃんは財布を持っていなかったのだ。この当時のお金を持っていなかったのだ。ボクちゃんの天使に会いたい一心でタイムスリップしてきて、そのままここへ来てしまったのだ。なんというドジ。マヌケ。あれだけ情報の必要性を認識し、脱走先の政治、社会、経済、地理、風俗などを調べておきながら、タイムスリップしたらいちばん先にお金を用意しておくことを忘れてしまうなんて。
オジャママンとしての貴重な敗北の教訓が全然活かされていなかったのだ。

「お客さん、顔の割にはええ根性しとるやないの。タダで遊ぼうなんて、オレたちをなめたらあかんで」

ボクちゃんは殺されると思った。

こんなとき、やせた身体が役に立つ。太った奴に比べれば素早く動ける程度だが。だがそこまでだった。出口にたどりつく前に、いかにもキックボクサーあがりと思える男たちにとっつかまり、串エビの焼ける匂いと煙の中へたたき出されたのだ。

あとはサンドバッグだった。

国際色豊かな野次馬の前で、彼らはキックボクシングのデモンストレーションでもするかのように、鋭いキックを繰り出してきた。

そのときである。ボクちゃんは館からひとりの女の子が飛び出してきたのを見た。民族衣裳のスカートが窮屈そうに、内股で人ごみの中へ駆けこんでいく。

チラッと振り返った顔はマイちゃんだった。

同時に鋭い怒声が飛び、タキシードが猛然と追い駆けていった。

もとキックボクサーたちも弾かれたように振り返ると、ドドッと突進していく。

悲鳴をあげて見物の人波が割れた。

その向こうでマイちゃんが人波に溺れる天使のように、必死に喘いでいる。

ボクちゃんの身体はひとりでに起きあがり、ひとりでに駆け出していた。自分でも身体が

動いていることにびっくりした。アターシャ様に感謝しなければならない。あの人のヒステリーのおかげで、ボクちゃんの身体はこんなにも打たれ強くなっていたのだ。

でも第三者から見たボクちゃんの姿はきっと滑稽（こっけい）だったと思う。気ばかり焦（あせ）って一向に身体は進まなかった。骨という骨は音をたててきしみ、筋肉という筋肉はやはりマヒしていたのだ。

マイちゃんはコマ劇場の前の広場に出る前に取りおさえられてしまった。

「助けて！　ヘルプ！　ヒルフェ！　アイウト！　アジュダーメ！　パマギーチェ！」

ヘルプのあとは確かドイツ語、イタリア語、スペイン語そしてロシア語だ。マイちゃんは路上にねじ伏せられたまま、国際色豊かな野次馬たちに必死に助けを求めている。

ボクちゃんは思わず近くにあったロッテリアの看板をつかむと、マイちゃんの上に折り重なっている男たちの頭上にたたきつけた。

ふたりが頭を血まみれにして転げ回り、ひとりはちぎれたコードで感電して奇妙な悲鳴をあげた。

その下にいたふたりが凶悪な顔で振り返って起きあがろうとしたところへ、ボクちゃんは看板の枠組みだけになった残骸（ざんがい）を真横からたたきつけた。

ボクちゃんはマイちゃんの手をつかんで引き起こした。天使の黒い瞳（ひとみ）が信じられないものを見たかのように見開かれていた。

次の瞬間、ふたりは固く手を握り合って駆け出していた。

気がついたらボクちゃんたちは森の中の下草の上に息も絶え絶えに横たわっていた。梢の向こうに超高層ビルが見える。どうやら新宿中央公園に逃げこんだようである。

冷たい下草が頬に、身体に、心地よかった。

ふたりは倒れ伏したまま顔だけ向け合っていた。やがて動悸が収まってきた。マイちゃんは本当に気持ちよさそうに下草に頬を埋めると、

「ありがとう」

と呟いた。

ボクちゃんは誠実で口ベタな正義のヒーローが常にそうであるように、もごもごと口ごもり、はにかんだような笑みを浮かべた。

マイちゃんも笑みを返してくれた。

絵になるシーンだ。

このまましばらく時間が止まってくれればいいなと思ったとき、近くの繁みから悩ましい吐息が聞こえてきた。

思わず振り返ると、日本人のギャルがオマー・シャリフを女たらしにしたようなアラブ人

に肩を抱き寄せられていた。

それだけではない、繁み越しに見渡す限りベンチというベンチは、黒人、白人、東洋人の男と日本人ギャルのカップルに埋めつくされているのだ。

六本木あたりでは、黒人にぶらさがるのが一時日本人ギャルのトレンドであったという話は知っていたが、これほど日本人ギャルも国際化していたとは知らなかった。

それにしてもどうしてこんなにたくさんの外国人があふれかえっているのだろう。

そう訊いたとき、マイちゃんは信じられないというように目を見開き、あっけにとられたようにボクちゃんを見つめた。

「あなた、国連決議のジャパン条項を知らないの？」

「国連決議？　ジャパン条項？」

ハテ、なんだろうとボクちゃんは首をひねった。この当時の政治、社会、経済にも必ずチェックは入れていたが、こんな文句は現代用語の基礎知識にも載っていないはずだ。

「あなた、どこから来たの？」

きたきた。タイムスリップしてきた者にとっていちばん困るのがこの手の質問なのだ。ボクちゃんの天使に会うために未来世界からやってきましたなんていえるだろうか。

ボクちゃんはこう見えても嘘がつけない性格で、もし、適当に嘘をついたとしても、すぐにバレてしまうのだ。応用物理や相対性原理には強いのに、こんなとき、機転のきかない頭

が本当に恨めしい。
「ごめん、あの、その、ボクちゃんにもよくわからないんだ……気がついたら、あそこにいたわけで……」
こんないいわけをどこまで信じてもらえるのか。
「それまで、どこにいたかも思い出せないんだ、ただひたすら勉強に打ちこんでいたことは確かなんだけど……」
事実ボクちゃんの人生の大半は勉強だった。
「あまり勉強に打ちこみ過ぎちゃったせいか、本当に世間にうとくなっちゃって……」
じッとボクちゃんの目を見つめて聞いていたマイちゃんは、どうやら信じてくれたようだった。
「日本はね、占領されちゃったの」
「占領？」
「世界中の国にね」

マイちゃんの話によると、そのジャパン条項というやつが国連で決議されたのは、一九八九年の暮れなんだそうだ。
そして、一九九〇年一月一日をもって、国連加盟国を始め世界中が一斉に日本を分割占領

しちゃったというのだ。

ボクちゃんがマイちゃんを見つけたのが一九八九年十月の歌舞伎町。ところがタイムスリップしたとき、あのチャチなタイムマシーンでは、タイムスケールを一年単位でしか刻めないので、一九九〇年に合わせたところ、なんと一九九〇年も半ば過ぎの日本へ到着しちゃったのだ。

だからボクちゃんは世界史上初めて、空前絶後、前代未聞のこんな大事件が起きているなんて知りようもなかったのだ。

そんなアホな、バカな、信じられないというだろうがホントに本当なのだ。

当の日本人があまりのことにショックを受け、ウッソーなんて茫然自失している間に、あれよあれよという間に、どんどん外国人が入ってきて、北は北海道から南は石垣島まで、日本は地図にさえ載っていない無人島に至るまで、見事に分割占領されちゃったのだそうだ。ことに繁栄を誇る日本の首都東京には世界中の国が殺到したのだそうだ。

「じゃあ、あれはベトナム難民じゃなかったのか」

「そうよ、エビ通りはベトナムの領域なの」

それであの通りの店の店員はベトナム人ばかりだったのだ。

「うちのお店の通りはタイなの」

マイちゃんはそッと目を伏せてそういった。

「エビ通りからプリンスホテルのほうに向かっては、フィリピンと台湾。歌舞伎町一番街は韓国、香港、シンガポール、マレーシア、インドネシアとか東南アジア系の地域なの。風林会館の裏手あたりがコロンビア、ペルー、ボリビアなどの南米系よ。さくら通りはソビエト、ハンガリー、チェコなどのワルシャワ条約機構加盟国がしっかり分け合っているわ。ゴールデン街なんて、コンゴやジンバブエ、スーダン、ジブチ、ザンビア、ザイールなんて連中が毎晩太鼓をたたいているって噂よ。あの人たちって自分で楽しんじゃってるみたいなんだって……」

そういってマイちゃんはおかしそうにちょっとだけ吹き出した。

要するに日本だけが繁栄し過ぎ、お金をためこんだことが世界中から反感を買ったのだという。

世界中の国々は幸せになった。

日本がためこんだ資産を分け合うことによって。

「私には耐えられない」

マイちゃんの目にキラリと光ったものが、下草の上に落ちて夜露のごとく散った。

あたりはすっかり暗くなっていた。忍び寄る夜気に肌寒さを覚えた。

「家はどこなの？　送っていくよ」

「それより学校へ送っていってほしいの！　どうしても明日の始業時までに！」
妙なことをいい出す子だなと思った。普通なら家に送り届けてもらい、今夜は何もかも忘れて泥のように眠りたいと思うのではないだろうか。
「明日ね、最後の授業があるの」
マイちゃんは思いつめたような顔でいった。最後の授業？　ますますわからない。
「世田谷区はいまやブラジルの世田谷州になっちゃったの。そして世田谷州政府はね、明日から世田谷州の公用語をブラジルの公用語であるポルトガル語にすると宣言したの。どういうことかわかる？　明日から世田谷州では日本語の使用が禁止になるの。世田谷州民は日本語を喋っちゃいけないの。全員、ポルトガル語を使わなくてはいけなくなるの」
マイちゃんの声が急に大きくなったので、周囲のアベックたちを驚かせたようだ。
ボクちゃんたちは慌ててその場を離れた。
「まるで植民地みたいだね」
「まるでじゃないわよ、完全に植民地なの、日本中全部が完全に植民地なの」
マイちゃんは怒ったようにいった。
「世田谷州じゃ、盆踊りもサンバになるのよ」
ボクちゃんは思わず吹き出しそうになったが、世田谷州民にとっては深刻な問題である。
その気持ちは世田谷州民にしかわからないだろう。

「だからね、どうしても明日の最後の授業だけは受けたいの！　なんとしても間に合いたいの！」

やけに明日までにと強調する意味がわかったのは、翌朝、日の出前に三軒茶屋(さんげんぢゃや)女学院の塀にたどりついたときであった。

マイちゃんの学校はその名のとおり世田谷の三軒茶屋にあったのだが、新宿中央公園を夜の七時に出て、なんと徹夜で歩き通して十時間もかかってしまったのだ。

ボクちゃんたちはお金がないのでタクシーに乗れなかった。たとえタクシーに乗っても、甲州街道や環六、環七、国道二四六号線には何ヵ所も検問所があり、そのたびに賄賂(わいろ)を取られるということだった。

そして世田谷州境の要所にはブラジル世田谷州政府の出入国管理事務所があり、パスポートがないと通れないという。

バスや電車で行っても、京王線は代田橋、小田急線は東北沢、井の頭線は池ノ上、東急新玉川線は池尻大橋でブラジル世田谷州政府の検札があるという。

ノーマネー、ノーパスポート、ノー身分証明書のボクちゃんたちに残された道は、裏通りから裏通りへ息をひそめていくしかなかったのだ。

その間、アメリカ支配地域から、メキシコが支配する渋谷のあたりをかすめ、駒場(こまば)の東大教養学部にまぎれこみ、目黒(めぐろ)から世田谷への侵入をはかったのだが、駒場を支配していたの

がウルグアイだったのがとんだ計算違いだった。
なんとウルグアイとブラジルはサッカーの南米カップ予選の試合で乱闘騒ぎを起こし、国家間の紛争にまで発展していたのだ。その対立が日本にまで持ちこまれ、両国は目黒と世田谷の境で、軍隊まで出動させて睨み合っていたのだ。
ボクちゃんたちは慌てて引き返し、大回りをすると、明大前と桜上水の間からやっと世田谷州へもぐりこむことに成功したのであった。

最後の授業が始まった。
ボクちゃんは三年A組の天井裏から見物させてもらっていた。
現代国語の教師はA組の担任でもある俵屋万智代。いかにも村上春樹命という感じのキャピキャピの女教師であった。だが教室へ入ってきたときから、その目は梅干しのように真っ赤に腫れあがっていた。おそらく一晩中泣き明かしたのであろう。
教壇へ向かう姿は不倫の恋に破れての帰り、渋谷の山手線外回りホームから身投げでもしかねないOLのようであった。
だが教壇へ立つと、気丈にもキッと顔をあげて、昨夜一晩中寝ないで考えた、今日のこの最後の授業のためのとっておきのひと言を発しようとしたとき、彼女はマイちゃんの顔を見つけたのである。

「一之瀬さん……まあ、あなた、どうしたの？　家出したと聞いて心配してたのよ……一体どうして」
　といいかけて万智代先生はハッとなった。
「そうか、今日が最後の授業と知って来てくれたのでしょ？　そうね、そうでしょ？」
マイちゃんがかすかにうなずくと、万智代先生は一之瀬さんと叫ぶや教壇を駆けおり、マイちゃんをひしと抱きしめたのである。
「よかった、あなたの席を残しておいて……」
感激した万智代先生は、一晩中寝ないで考えた文句も忘れてしまい、涙と鼻水で顔をくしゃくしゃにしながら語り出したのである。
「私、現国が人気のない課目だということはよくわかっていました……みんなは授業中でも少女フレンドを読んだり、トランプしたり、早弁したり、居眠りしたりしていました。でも、そんな人気のない授業なのに、今日というこの日、一之瀬麻衣さんまで出席してくれたのです……」
　万智代先生はマスカラが溶けて、パンダのようになった目で教室を見回した。
「そして、今日、みんなの目はとっても素敵です。みんな、光ってるわ……私が何もいわなくても、みんな、わかっていてくれてるのよね。今日、この授業を最後に私たちの言葉、日本語を喋れなくなるということの意味を！　世界で最も美しく、最も繊細で、最も感受性に

富み、最も豊かで、最も優しい言葉……私たちはもう二度と喋れない……でも、みんなはわかっていてくれている……日本語の素晴らしさを！　たとえ、昨日あるいは今日この一瞬に初めて気がついたとしてもいいの……みんなの心に残ったその熱い日本語への想いは永遠に不滅です。たとえ、十年、二十年、三十年間日本語が喋れなくても、みんなの心に生き続ける日本語は、いつしか必ず魂の叫びとなって噴き出すことでしょう。権力に言葉は奪えません。なぜなら言葉は私たちの魂だからです。いつの日か日本語が復活する日を信じて、みんな、私たちの日本語をいつまでも大切に心の中に生かし続けておきましょう！」

自分の演説に酔った万智代先生は思わず、「ビバ！　日本語！」と叫んでしまい、「いえ、万歳でした。万歳、日本語！　日本語、万歳！」と慌てていい直したのであった。

「さあ、もう時間が残り少なくなりました。私たちが日本語を喋れなくなるときが刻々と迫ってきています。私にはそのときを沈黙で迎えることはできない。日本人なら最後の一秒まで日本語を叫びたい、そうでしょう。みんな！　もう二度と喋れない世界一美しい言葉を！さあ、みんな、叫びましょう！　思い残すことなく！」

五十人の女生徒たちが一斉に立ちあがった。

「がんばリンゴ、ともだちんこ、いけませんえん、おはヨーグルト、たすけてんどん、こまってシマウマ、よーしゃせんぬき、もうダメでんわ、なるほロケット、どうもアリガチョウ、まけるモナカ、おそろシッコ、ぜっこーもん、さいならっきょ」

その若い大合唱は天井裏のボクちゃんをも感動させずにはおかなかった。こんなに純粋無垢な叫び声を聞いたのはいつ以来だったろうかと、不覚にも涙をこぼしたとき、マイちゃんがハンドマイクを手に取って窓辺に駆け寄るのが見えた。

いつの間にあんなものを。たぶんボクちゃんが天井裏へもぐりこんでいる間に手に入れたのであろう。何をするのかと思っていると、マイちゃんはハンドマイクの音量を最大限にあげて、学校中に叫んだのである。

「三軒茶屋女学院の教師ならびに生徒諸君！　こちらは日本解放戦線世田谷支部三軒茶屋細胞です！　我々は世界各国による日本植民地化に反対し、日本各地で反対闘争に立ちあがりました！　みなさん、世田谷区民も立ちあがりましょう！　世田谷植民地策動を断固粉砕しましょう！」

ボクちゃんにはその姿がジャンヌ・ダルクか、ローザ・ルクセンブルクのように見えた。後光が差して輝いて見えた。

そのとき、クラスメートの悲鳴がして、ふたりのカービン銃を持った兵士が駆けこんできた。

ブラジル世田谷州政府軍のＭＰである。

マイちゃんは無謀にもハンドマイクを投げつけようとしたので、ＭＰはさっとカービン銃を構えた。

危ないと思ったとき、天井板がメリメリと抜け落ちて、ボクちゃんはふたりのＭＰの上へ落下した。

ボクちゃんは素早く椅子を振りあげると、うずくまっているふたりのＭＰの後頭部に力一杯たたきつけた。ボクちゃんは背後からの攻撃には絶対的な自信を持っているのだ。

ボクちゃんはマイちゃんの手を取ると教室を飛び出した。

三軒茶屋はマイちゃんの地元。

ボクちゃんたちは太子堂のごみごみした住宅密集地に逃げこんで追撃を振りきると、三軒茶屋女学院の生徒たちのたまり場になっているお汁粉屋の二階にひとまずおちついた。

「ありがとう、また助けられちゃったわね」

マイちゃんはそういうと、上目づかいにちょっぴりいたずらっぽくボクちゃんを見た。

「びっくりしたでしょ。歌舞伎町のあんな店にいた子が解放戦線のメンバーだなんて」

そりゃあたしかにびっくりした。

「私、バカな子だからさ、家出してフーゾクしてたんだよね。そしたらある日、突然、経営者がタイ人に変わったのよ。国連決議のことなんか全然知らなかったの。その日から私たちは奴隷になったわ。タイ人はいったわ、これまで日本人は好き勝手にしてきた。今度は俺たちがする番だと。そんなとき、解放戦線のビラを見て、戦わなければいけないと思ったの。暴力で人を支配することはいけない。そしてこれまでの日本人がしてきたようにお金の力で

知らず知らずのうちに人を支配することはもっといけないと……。私たちがこの闘争に勝利したら、私たちのつくる日本は変わると思うわ」

ボクちゃんは微笑した。

「あなたって天使みたいな人ね」

「天使？」

「だってそうでしょ、こんな大変な世界のことを何も知らず、お金も持っていなかったわ……あのお店だって、何かわからないで入っちゃったんでしょ」

ボクちゃんはうろたえ、しどろもどろにうなずいた。

「それに、気絶しちゃったりして」

とマイちゃんは赤くなり、ボクちゃんはもっと赤くなった。

「縁もゆかりもない女の子なのに、二度も助けてくれて……やっぱり、天使よ！　あなたこそ天使だわ」

ボクちゃんはマイちゃんのために日本解放闘争に立ちあがることを、このとき、固く心に誓ったのである。

「セコビッチの逃亡先がわかった」

そういうと東南長官はヒカル、ナナ、ヒネボット、アターシャとドワルスキーに、セコビ

ッチと一之瀬麻衣の手配書を見せた。
「一九九〇年の日本、東京は世田谷区の三軒茶屋周辺じゃ」
「銀行強盗でもやったんか」
とドワルスキーがいった。
「そんな根性ありゃしないよ、あんな奴、せいぜい無銭飲食てとこじゃないの」
とアターシャがいった。
「おかしいですね。日本なのに、どうしてブラジル政府の手配書が張り出されているのでしょう」
「さすがはヒカルじゃ、いいところに気がついた。実はセコビッチの逃亡先を調査中に大変なことに気づいたのじゃ。一九九〇年の日本の歴史がすでに何者かによって変えられていたのじゃ」
ビエ〜〜ッとアターシャとドワルスキーは思いっきり素っ頓狂な声を発した。
「知らん、知らんで、ワイやないで」
とドワルスキーは思わず口走ったのであるが、東南長官たちはことの重大さに気を取られ、ドワルスキーのことなんか眼中になかった。
「これまで、オジャママンがどんなにワルさをしても必ず撃退してきた。これまで一度として、歴史を変えられたことなどなかったのじゃ。それが私らの気づかぬうちに見事なまでに

変えられてしまった。ヒカル、ナナ、ヒネボット、アターシャ、ドワルスキー！　タイムパトロール隊員の名誉にかけても、なんとしてもこの犯人を突きとめ、正しい歴史に戻すのじゃ！　もちろん、セコビッチを連れ戻すことも忘れずにな」
「イッチョや了解！」
栄光のタイムパトロール隊員たちは高らかに答えると使命感に燃えて飛び出していった。
ヒカル、ナナとヒネボットはタイムマシーン、オタスケサンデー号をめざした。
アターシャとドワルスキーはレストルームのホームバーの裏の秘密ルームをめざした。
ふたりは秘密ルームに飛びこむや、スクリーンに向かって、
「トンマノマント様、トンマノマント様」
「上から読んでもトンマノマント、下から読んでもトンマノマント様」
と連呼し続けた。
いつも一方的にトンマノマントから指令が来るだけであるから、こっちから連絡の取りようもないし、そのすべも知らないのだ。
だがトンマノマントはその影を映し出してくれた。
「ああ、トンマノマント様、これは一体どないしたことだすか？　もしやトンマノマント様御自身でおやりになったことだすか？」
「それとも私たち以外のだれかが……？」

「フ、フ、フ……お前たちの知ったことではない。お前たちの使命はただひとつ、せっかく変えたこの歴史を定着させ守り抜くことじゃ。歴史を修復させようというどんな行為も決して許してはならぬ。あの大馬鹿者のセコビッチの愚かな行為も」

燃えるボクちゃん

ボクちゃんたちは何をしたらよいのかわからなかった。何しろボクちゃんは正義の反体制運動にはうといし、マイちゃんにしたところで、たまたま買った焼きイモの袋が日本解放戦線のアジビラでできていて、それを読んで闘士になったという程度なのだ。そもそも日本解放戦線なる組織がどの程度の実体を持っているかわからないのだ。

でも若さはためらうことを知らなかった。ふたりがいれば不可能はないと信じこんでいたのだ。

日本解放戦線世田谷支部三軒茶屋細胞はとりあえず今夜の攻撃目標を、旧世田谷区役所(現在はブラジル世田谷州政府公館)前で開かれる盆踊りサンバ大会に設定した。

ポルトガル語を公用語にするだけではあきたらず、盆踊りまでサンバ化し、人民の芸能風俗まで手を出してくる強権に反撃の鉄槌をくだすために。

ボクちゃんたちはやすやすと盆踊りサンバ大会に潜(もぐ)りこむことができた。ラテン系の人たちは根が大ざっぱというか、すでにサンバに酔い、酒に酔っていたのだ。

広場の中央には櫓（やぐら）が組まれ、強制的に動員された旧区役所職員たちがそろいの浴衣（ゆかた）姿で阿波（あわ）踊りを踊っていた。いや阿波踊りに見えたのは、実は気勢のあがらぬサンバだったのである。いかに東京音頭をサンバ風に演奏してもノレるものではない。

それにもともと彼らは実直で真面目な公務員なのだ。呆（あき）れ顔で見ている群集の目を気にして気の毒なほど萎縮（いしゅく）していた。

ボクちゃんは彼らに同情した。

そしてマイちゃんのお腹を見た。マイちゃんのお腹は五ツ子でも入っているかのごとくパンパンに膨（ふく）れてはちきれそうだった。思案のあげく、マイちゃんには妊婦に化けて運び屋の役を務めてもらうことにしたのだ。

一向に日本人がノッてこないことに業を煮やした主催者は、あきらめてしまったのか、それとも自分たちだけで楽しむことにしたのか、曲を切り換（か）えてしまった。

本物のサンバがとどろくと広場は一挙に熱狂の渦に包まれた。消化不良のサンバにいらいらしていたブラジルの血が爆発したのだ。

大地が揺れ、夜がたちまち熱くなった。

小さな三角の布でおおっただけのほとんど全裸といっていい褐色の肌の娘たちが狂ったように踊っている。惜し気もなくさらされた乳房や腹や尻が激しく波打つ光景に、思わずボクちゃんは生唾（なまつば）を呑みこんだ。ひとりでに身体もリズムを取っている。

ボクちゃんはハッと我にかえった。
いけないと心の中で呟いた。
みると日本人たちも引きこまれているではないか。中にはもう踊り出している奴もいる。
ボクちゃんとマイちゃんの目が合った。
マイちゃんがパッとマタニティをめくると、ドサッと爆竹が落ちた。
ボクちゃんはその束を抱(かか)えるや踊りの中へ飛びこんだ。これだけの爆竹を一気に爆発させれば大騒ぎとなり、サンバ大会を粉砕することは確実なのだ。
ボクちゃんは次々と火をつけた。
バチバチバチ……蛇のように踊りながら一斉に爆竹がはぜた。
褐色の肌の娘たちが凄まじい悲鳴をあげた。
だが、次の瞬間、サンバはさらに盛りあがったのである。
爆竹がはぜるたびに娘たちも弾けた。
ボクちゃんは焦った。そんなバカな。
次々と火をつけたが、あまり焦り過ぎたので、爆竹のヒモがボクちゃんに絡(から)みついてしまった。
ますますボクちゃんは慌てた。ほどこうと手足を振り払うたびにますますこんがらがり、そこへ次々と引火したからたまらない。ボクちゃんは人間爆竹と化してしまったのだ。

マイちゃんがセコビッチと叫ぶのが聞こえた。そのとき、ザブンと頭から水をかけられた。目の前にバケツをさげたヒカルとナナがいた。

ボクちゃんはヒカルたちの話にショックを受けた。
なんとこの時代の歴史がすでに何者かによって変更されていたなんて。
ヒカルたちはトンマノマントとオジャママンのしわざと決めつけていたが、ボクちゃんには当然のことながら覚えはない。
考えられることはトンマノマント様か別なだれかがやったことなのだ。だがそれがボクちゃんとどう関わるのか判断に迷ってしまうのだ。
事情を知らないマイちゃんはヒカルとナナの出現を無邪気に喜んだ。
「みんな、力を合わせて戦いましょうね」
「そうね、あるべき正しい世の中にするためにね」
優しいナナちゃんが励ますようなことをいったので、マイちゃんはますます燃えあがったのであった。
ボクちゃんが松陰(しょういん)神社の境内(けいだい)をひとり歩きながら、その歴史が変えられてしまったことの意味を考えていると、マイちゃんがいきなり背中から抱きついてきた。
「セコビッチ、今夜はありがとう」

「えッ!?」
「頑張ってくれて……」
耳元に熱い息が吐きかけられ、背中にゴムマリのように弾む乳房が押しつけられた。
「でも、もうあんな危険なマネはさせないわ。仲間が増えたんですもの、これからはもっと効果的な作戦を考えましょうよ」
「よおよお、見せつけてくれるやんけ」
懐かしくも忌まわしい声がすると、繁みの中から、ドワルスキーとアターシャ様が現れた。
マイちゃんがパッと背中から離れた。
ボクちゃんはマイちゃんに目顔で心配するなといって、アターシャ様たちのほうへ行くと、さっそく声をひそめて訊いた。
「どういうことなんですか？　トンマノマント様にもできなかったことを一体だれがやったんですか？」
「ド阿呆！　まず家出したお詫びをせんかい」
ドワルスキーにいきなり拳骨をくらわされた。
マイちゃんが見ているというのに……。
チラッと見ると案の定マイちゃんは身を固くして、松の木の陰からジッとこちらをうかがっている。

アターシャ様は煙草の煙を鼻から吐き出しながらいった。
「トンマノマント様がおっしゃるには、あたしたちには関係のないことだってさ」
「ワイラの使命はな、現状を守ることや。せっかく変えた歴史をまたもとへ戻そうという動きは絶対に防がなあかんのや」
「そのためには歴史をもとへ戻そうというどんな小さな動きもつぶさなきゃならないの。わかってんのかい、どういうことか」
アターシャ様の目が意地悪く光り、ボクちゃんの顔にフウッと煙を吐きかけた。
「マイなんて女とは手を切るのよ」
ボクちゃんは愕然となった。
「マイちゃんはヒカルたちとは違う。あの子は歴史が何者かによって変えられたことなんか知らないで、ただ、こんな世の中は間違ってる！　なんとかしたいといってるだけなんだ！」
「トンマノマント様はね、偉大な成果が思いもかけないような些細なことから崩れることを心配していらっしゃるのよ」
「でも、マイちゃんにはそんな力なんて……」
ガーンとドワルスキーのパンチが顎に炸裂すると、ボクちゃんは三メートルも吹っ飛んでいた。

「ド阿呆、マイちゃん、マイちゃんて、なんべンぬかしやがる」

そこへマイちゃんがセコビッチと叫んで飛びこんできて、ボクちゃんの身体にひしと抱きついたので、もてないドワルスキーをますます逆上させてしまった。

騒ぎを聞きつけてヒカルとナナも止めにきたが、ドワルスキーを逆上させるばかりであった。

「アターシャ、見てないで止めなさいよ」

ナナちゃんのそのひと言が、キッカケが欲しくてうずうずしていたアターシャ様まで爆発させてしまった。

「うるさいわね、ブス」

「なにさ、オバン」

とうとうナナちゃんとアターシャ様までひっかき合いを始めたのである。

最悪の事態となってしまった。

ボクちゃんとヒカルには、怒り狂ったドワルスキーに対抗するすべはなかった。ふたりとも丸太のような腕に首根っこをつかまれ、頭と頭をガッチンコされそうになった。

ボクちゃんは思わず目を閉じて、ヒカルの頭が石頭でないことを祈った。

すると急にドワルスキーの動きが、電池の切れたロボットのように停止したかと思うとボクちゃんたちの首をワシづかみにしていた手が離れ、そのままあおむけにドサッと倒れたの

である。
夜目にもくっきりドワルスキーの白目がひんむかれていた。その頭のところに長いパイプを握ったやせてヒョロ長い若者が立っていた。
「同志、急いで」
若者はそういうとボクちゃんとヒカルを促した。
マイちゃんとナナちゃんタッグチームのほうは快調で、股裂きでアターシャ様を痛めつけていた。股関節を脱臼して動けなくなったアターシャ様を放置して、ふたりもボクちゃんたちに合流した。

若者に案内されて、ボクちゃんたちは松陰神社の拝殿の中へ逃げこんだ。
若者はボクちゃん、マイちゃん、ヒカルとナナちゃんの顔を見回すと努めて感情をおし殺すような低い声で呟いた。
「幕末の革命家吉田松陰公を祀った松陰神社で、現代の若き革命家たちが出会う！　これも何かの因縁かもしれませんね！」
差しこんできたかすかな月明かりに浮かびあがった若者の顔は、知的でニヒルだった。ボクちゃんほどではないけど。
「あなたは一体だれなの？」

ボクちゃんはその声が気に入らなかった。
マイちゃんのその声にはこの若者に対する期待以上のものがこめられていたからだ。そしてその答えは、口惜しいけどまさに期待以上だったのだ。
「日本解放戦線書記長赤曽根康弘」
マイちゃんは一瞬言葉を失い、まるで百年間も離れ離れになっていた恋人が出現したときのようにこの若者を見つめていた。
ボクちゃんはいいたかった。おいおい、ボクちゃんを天使だといったのはどこのだれなのよ。
「もちろんこれは本名ではありません。僕たちのような革命家は地下運動をするときは本名は使いません。コードネームのようなものだと理解してください。これからはアッちゃんとでも呼んでください」
赤曽根くんはどこまでもカッコよかった。
しかも東大生で国際政治学を専攻しているというではないか。
マイちゃんはもうすでに明治維新前夜の倒幕の志士の気分になったかのように上気していた。その目の輝きは、夜明けは近いことを確信している者のそれであった。
「日本解放戦線の闘争宣言に呼応して、世田谷支部三軒茶屋細胞が活動し始めたことを知り、偵察に来たのです！」

赤曽根くんはボクちゃんの手を握った。
「盆踊りサンバ大会粉砕作戦！　見事でした！　失敗したけど、あの革命的行為には感動しました！」
ボクちゃんも書記長に褒められて悪い気はしなかった。いたって肩書きに弱いタチなのだ。
「あなたたちのような闘士が加わってくれれば勇気百倍です！　まさに今夜は日本解放戦線にとって記念すべき夜です！　僕たちの戦陣は一挙に強化され、なんと総勢五人になったのです！」
「五人⁉」
思わずボクちゃんたち四人は反芻した。
マイちゃんの落胆ぶりが手に取るようにわかる。ボクちゃんも思わずサギだと叫びたくなった。日本解放戦線書記長だなんて、こちとら最低でも十万人ぐらいのゲリラを率いる革命家だと思っていたのに、お前は一人一党かちゅうんじゃ。
ボクちゃんたちの実体を知って、ヤブ蚊までブーンと襲いかかってくる。侘びしさがつのり、ボクちゃんは帰ろ帰ろと立ちあがった。
「待ってください」
赤曽根くんがボクちゃんの脚にしがみついた。
「僕はいままでたったひとりで闘争をやってきたのです。僕にできることといえばアジビラ

を発行する程度のことだけど、いつか志を同じくする人たちの輪が拡がることを信じて！　僕にとって四人も仲間が増えたというのは大変なことなのです！　セコビッチ君、革命というものは常に少人数から始まるのです！」
「そうね、セコビッチ、私たちだってたったふたりから始めたんですもの。五人に増えたことは喜ばなくちゃいけないわ」
マイちゃんにまでそういわれて、ボクちゃんはゴロンと不貞寝した。
赤曽根くんたちは四人で学習会を始めた。
国際政治学が専攻の赤曽根くんが、これまで研究してきたことの基調報告を行いたいというのだ。
「僕が不思議に思うのは、なぜ日本を占領するというようなトンデモナイことが、短期間でバタバタと決まってしまったかということです。ジャパン条項を議決する国連総会の前には加盟一五八ヵ国のほとんどに根回しがすんでいます。国際世論もまさにジャパン・バッシング一色。異常な盛りあがりを見せております。こんなことはたとえアメリカがいい出したとしても、いかにアメリカの力をもってしても、かくも短期間に一五八ヵ国に根回ししたり、国際世論を盛りあげたりするのは不可能です。考えられることは何ヵ国かが秘密裡に手を結び、ひそかに協力し合って、一挙にこの事態へ持っていったということです。果たしてそんな秘密会議は行われたのでしょうか。あったとしたら、どこで、いつ？　僕は一九八九年十

月二十三日に行われた国連安全保障理事会の秘密会に注目しました。実はこの日を境にして、一気に日本たたきが盛りあがったことに気づいたからです。果たしてこの理事会参加国はアメリカ、イギリス、フランス、中国、ソ連の五常任理事国とアルジェリア、ブラジル、ネパール、セネガル、ユーゴスラビア、コロンビア、エチオピア、カナダ、マレーシア、フィンランドの十非常任理事国で構成されているのです。日本が参加しておりません。今や大国となった日本の参加しない会議などほとんどないのに、この理事会にだけは日本が参加していないのです。しかも五大国はそろい踏みです。すなわちこの理事会で、日本抜きで、何かが決まったのです」

いつの間にかボクちゃんは起きあがっていた。

さすがは東大生、国際政治学を専攻しているだけのことはある。自ら書記長と名乗るだけのことはある。

ヒカルとナナも感じ入って聞いている。

マイちゃんも……。ボクちゃんは心の中で呟いた。マイちゃん、お願い、あいつをそんな目で見ないで。

「この五大国とカナダ以下の十ヵ国が日本占領の意志を固め、一致協力して進めることに決めれば不可能ではないでしょう。現に歴史が雄弁に証明しております。ただ、それでも僕にはまだ疑問が残るのです。この理事会で一体どういう風にしてこんな大それたことが決めら

れたのか？　この理事会にさえも十五ヵ国が参加しているのです。十五ヵ国もの人間が集まっているのに、この短い会議でよくも意見の一致を見たものだと不思議でならないのです」
トンマノマントのしわざだ。直感的にボクちゃんは思った。
「よし、行ってみよう」
思わずそう叫んでヒカルが立ちあがったので、赤曽根くんやマイちゃんがキョトンとした顔で見あげた。
「えッ、どこへ、ヒカル君」
「ああ、いえ、あの、ちょっとトイレへ」
「あーん、私も」
ヒカルとナナが飛び出していった。
ボクちゃんは呆れた。まったく嘘をつくのが下手な奴らだ。奴らが一九八九年の十月二十三日の安全保障理事会へタイムスリップしようとしていることはわかっている。ボクちゃんも慌てて追いかけた。
「セコビッチくん、どこへ」
「あッ、あの、ボクちゃん、ウンコ」
呆れた顔の赤曽根くんとマイちゃんを尻目にボクちゃんも拝殿を飛び出していった。
「おーい、ヒカル、ボクちゃんも連れてって」

ナナちゃんが振り返ると冷たくいった。
「あなたとは班が違うでしょ」
「アターシャたちと来るんだね。急がないと、東南長官に叱られるぞ」
とたんにボクちゃんは我にかえった。
そうだ、ボクちゃんはオジャママンだったのだ。トンマノマント様の御命令で今のこの狂った歴史のほうを守らなければならないのだ。
ヒカルたちが先に一九八九年十月二十三日の安全保障理事会へ入って、もし正しい歴史へ戻してしまったら、ボクちゃんたちはトンマノマント様からどれだけ厳しく叱られることか、想像しただけで身の毛がよだつ。
その一方ではふとマイちゃんのことが頭をよぎった。もしヒカルたちが歴史をもとへ戻すことに成功したら、マイちゃんはどれだけ喜ぶことか。
心はマイちゃんを思いながらも、足はアターシャ様のほうへ向かっていた。習い性というか悲しい性(さが)というべきか……。

ダメなボクちゃん

アンドロメダマ号はその雄姿を松陰神社の本殿の裏に横たえていた。
ボクちゃんが最後に乗りこもうとしたときセコビッチと呼ぶ声が聞こえた。

タラップから振り返ると、本殿の陰からマイちゃんと赤曽根くんが信じられないものを見るような目でボクちゃんを見ていた。

一瞬、ボクちゃんは凍りついた。

赤曽根くんの制止もきかず、マイちゃんは必死な声で問いかけてきた。

「セコビッチ……一体、あなたはなんなの？」

かたわらでは赤曽根くんが青ざめ、ワナワナと震えながら呟いている。

「宇宙人だ……宇宙人だ……」

辛かった。ボクちゃんの人生でいちばん辛い一瞬だった。「マイちゃんの天使さ」といえない自分が恨めしかった。このときほどオジャママンであることを呪（のろ）ったことはなかった。

勇気さえ出せば、マイちゃんの天使になれるかもしれないのに……せいぜいボクちゃんには家出する程度の勇気しかないのだ。

このタラップを飛び降りる勇気がないのだ。

目と鼻の先にマイちゃんがいるのに。

ダメなボクちゃん！　本当にダメな、ダメなボクちゃん……。

「阿呆（あほ）ンだら、何グズグズしとるんじゃ」

ドワルスキーの丸太のような腕が伸びて、ボクちゃんを引きずりこんだ。

そのとき、ボクちゃんはさらに悲痛な光景を見てしまったのだ。

世田谷州政府軍のMPたちが殺到してくると、たちまち赤曽根くんとマイちゃんにおおいかぶさったのだ。
屈強なMPたちの下敷きになったマイちゃんの白い手首にガチャリと手錠がうたれた。
同時にアンドロメダマ号のハッチも閉じた。
マイちゃんは永遠にボクちゃんの視界から消えたのである。
アンドロメダマ号発進の時空ショックがボクちゃんを襲った。
サヨナラ、マイちゃん、
ボクちゃんの天使。
感傷に浸っていると、またドワルスキーの怒声が飛んできた。
「阿呆ンだら、手伝わんかい！　ヒカルたちは先行してるんやで！」
「フ、フ、フ……焦るでないよ」
アターシャ様が余裕と自信の笑みを浮かべた。
「私はすでにスペシャル・オジャママメカ、超時空戦闘メカ、マタロス・カンダレタイプを開発ずみさ」
「超時空戦闘メカ？」
「マタロス・カンダレタイプ？」
ボクちゃんたちはそのネーミングのものものしさに、期待と不安を感じた。

「さあ、変身して乗りこむのよ！　オジャマアーッ！」
黄色い声をあげてアターシャ様が変身した。
ボクちゃんも完全にヤケクソで変身した。
オジャママンはさっそく超時空戦闘メカ、マタロス・カンダレタイプに乗りこむと、直ちにタイムスケールを一九八九年の十月二十三日、方位をニューヨーク国連ビルに定めた。
マタロス・カンダレタイプはアンドロメダマ号から発進した。
さすがは超時空戦闘メカである。
その超時空スクリーンにたちまち先行するオタスケサンデー号の不細工な姿を捉えたのである。
「超時空波動砲、用意」
オジャママン一号であるアターシャ様は叫ぶと、ピタリと照準をオタスケサンデー号の前方に定めた。
メカの全エネルギーが超時空波動砲に集められると、一気にエネルギーの渦となって放出された。
超時空空間を走ったエネルギーの渦はオタスケサンデー号の前方に集中し、超時空空間に穴をあけたのである。
一瞬穴の向こうにアリゾナの砂漠が見えたかと思うと、オタスケサンデー号はバランスを

失い、その穴の向こうに吸い出されていった。次の瞬間、穴は閉じ、超時空戦闘メカ、マタロス・カンダレタイプは何事もなかったかのように超時空空間のかなたに消えていったのである。

「ホ、ホ、ホ……見たかい、超時空戦闘メカ、マタロス・カンダレタイプの威力。あんな坊やたち敵じゃないのさ。たぶん、今ごろはアリゾナの砂漠でガラガラ蛇に追いかけられてるよ」

「さすがアターシャ様やで。美しいだけやのうて、頭脳もピカ一でんなあ」

さっそくドワルスキーがゴマをすっている。

一九八九年十月二十三日。ニューヨーク、国連ビル。ボクちゃんたちにとっては、新宿から新大久保(しんおおくぼ)へ来るようなものであった。

当面の敵はアリゾナ砂漠だし、今回に限ってはにっくきオタスケマンの気配は露(つゆ)ほども感じられない。

だがボクちゃんたちは国連ビルに潜入したときから異常に緊張していた。

日本解放戦線書記長赤曽根くんの説によれば、今日の安全保障理事会の秘密会こそが歴史の転換点になっているという。

いけない。マイちゃんのことを思い出してしまった。ＭＰに捕まったマイちゃん。厳しい

取り調べにあっているのではないだろうか。
裸にされて、吊るされて、ムチで打たれたりして……。
ボクちゃんは必死にマイちゃんへの思いを振り払った。
理事会……理事会だ。問題の理事会に集中しなければ。
赤曽根くんはとてもいいカンをしている。
さすがは東大生だ。だが彼をもってしてもその背後にトンマノマント様の影がうごめいているとは思いもすまい。
ボクちゃんは確信していた。
問題の理事会に必ずトンマノマント様のなんらかの意志が働くに違いないことを。
ボクちゃんたちはその現場を見たかったのだ。口惜しいけどオジャママンが一度として成功しなかった歴史の改竄を一体だれがどのようにして行うのか。
ボクちゃんたちは送風口のダクト内を必死に這い回っていた。
トンマノマント様の影を求めて。
だが理事会は始まろうとしているのに、なんの異変も感じられない。
ボクちゃんたちは焦った。
ボクちゃんたちの気づかないところでことが進められているのだろうかと。ボクちゃんたちにとってはそれはたまらないことだった。なんとしても現場を目撃したかった。

ボクちゃんたちはさらにダクト内を急いだ。
そのとき、突然、目の前の上げ蓋が持ちあげられて、ひょいとひとりの若者の頭が現れた。
ボクちゃんは一瞬心臓が止まるかと思った。
すると若者は狭いダクト内に泥棒のように這いつくばっているボクちゃんたちに驚くでもなく、いたって涼しい声でこういったのだ。
「なあんだ。オジャママンじゃないですか」
ボクちゃんたちは二の句がつげなかった。
一般人からこんな風にあしらわれるなんて。
第一、この時代の人間がなぜオジャママンなんて知っているのか不思議でならなかった。
若者は金髪で肌は白く目は青かった。口惜しいけどはっきりいってボクちゃんより何倍もいい男だ。
「困るなあ、そんなとこで泥棒猫みたいにゴソゴソされちゃあ、警備員に見つかったらどうするんですか」
まったく妙なことをいう奴だ。
「早く降りてきてくださいよ」
そういって若者の顔が引っこんだ。
ボクちゃんたちはすっかり毒気に当てられて、いわれるままにダクトから下へ降りて呆気に

とられた。
そこは同時通訳のためのブースで、十数人の男女がグーグー大鼾（おおいびき）をかいて寝こんでいた。
そして、その部屋の片隅に白い布に身を包んだひとりの若い女が石のようにうずくまっていたのだ。
「シーッ、静かにしてください。いま、彼女はトランス状態に入ろうとしているのですから」
「なんのこっちゃ？　一体お前はだれや？」
ドワルスキーがいらいらして声を荒らげた。
若者は声をひそめると改めてていねいに挨拶（あいさつ）するではないか。
「初めまして、私、オジャママン見習いのドラマチック・ゲキガスキーです」
「オジャママン！　見習い！」
アターシャ様が素ッ頓狂な声をあげたのでゲキガスキーとやらは慌てて制した。
「静かに……お願いしますよ。静かに……彼女の邪魔をしないでください」
若い女はまるで巫女（みこ）のように全身を震わせ何やら呪文（じゅもん）のようなものを唱えている。
「これから、偉大な実験を始めるんですから。日本を世界中の国が占領するという前代未聞、空前絶後の歴史的大事件を起こすんですから」
こいつが変えたのか。この部屋へ入ったときから、オジャママン見習いと聞いたときから、

もしやという気がしていたのだが、こうはっきりいわれるとショックを受けないではいられないボクちゃんたちだった。

ドワルスキーが我慢しきれずに叫んだ。

「それがあのオナゴとどう関係があるちゅうんじゃ」

ゲキガスキーが小声でささやいた。

「ヒミコなんですよ」

「ヒミコ？」

「そう、邪馬台国(やまたいこく)の卑弥呼(ひみこ)」

ゲキガスキーの話によると、オジャママン見習いとして採用されたゲキガスキーも、トンマノマント様から女王シリーズ作戦を命じられ、邪馬台国の卑弥呼のもとへタイムスリップしたのだそうだ。

もちろん、あの貴重なる一CCを持って。

ところが卑弥呼は子宮筋腫(きんしゅ)で子供を生めない身体だったのである。

普通ならそこで戻ってくるのであるが、このオジャママン見習いは違っていたのだ。

ゲキガスキーは卑弥呼が大変な呪術者であり、超能力者であり、集団催眠にものすごいパワーを発揮することを知り、一九八九年十月二十三日の国連安保理事会の秘密会に連れてきたのだ。

すなわち同時通訳のレシーバーを通して、理事会参加十五ヵ国のメンバー全員に集団催眠をかけてしまおうというものだったのである。
日本占領すべしと。
ボクちゃんたちは唸った。
ボクちゃんたちはすでに結果を知っている。
これからわずか二ヵ月たらずで日本は世界の孤児、世界一の嫌われ者となり、一九九〇年一月一日をもって、世界中から占領されてしまったことを。
突然、卑弥呼が奇声を発して立ちあがった。
初めて卑弥呼の顔が見えた。
恐ろしい！　一瞬ボクちゃんはそう感じた。
だが次の瞬間、それは妖しさに変容し、さらに凄絶なまでの美しさに変容していったのだ。
そのとき、白衣が割れて、突然ボクちゃんの目の前に、まっ白な脚が剝き出しになった。
一瞬ボクちゃんは息が止まるかと思った。
呪文に合わせて痙攣したかのように小刻みに震えるその脚は、これまでに見てきたどんなダンサーの脚よりも美しかった。いや比較すること自体がおかしいのだ。なぜなら、卑弥呼のその白く透き通った、ムダな肉のひとつもない脚はまさに神様がおつくりになったものだからだ。

トランス状態が進むに従ってさらに卑弥呼の呪文と動きは激しくなった。

卑弥呼の白衣は、布の中央に穴をあけたものをすっぽりとかぶるという簡略なものであったから、卑弥呼の動きが激しくなるにつれ、白衣も激しく翻る(ひるがえ)のだった。

両手を思いきり天に突きあげる。

ゆったりとした白衣が肩までずり落ちると、その奥にお椀(わん)を伏せたような乳房が揺れていた。

ゴクンと隣から生唾を一リットルもまとめて呑んだような音が聞こえてきた。ドワルスキーである。もうまるで阿呆みたいに、といっても本当に阿呆なんだけど、ポカーンと口をあけ、目は完全に血走っている。

そのドワルスキーの鼻面(はなづら)をかすめるように卑弥呼が旋回した。

ふわりと貫頭衣の裾(すそ)も翻る。

ドワルスキーは思わず床に這いつくばって下から仰(あお)ぎ見ようとした。

まったくもうはしたない奴だ。ストリップ劇場のかぶりつきじゃないんだぞ。

そう思いつつボクちゃんもドワルスキーの横にしゃがみかけたとき、アターシャ様の視線に気づいたのだ。

蔑(さげす)むような、獣(けもの)を見るような目でボクちゃんたちを見おろし、決して卑弥呼のほうを見ようとはしない。

どこで手に入れたのかマイルド・セブンを蒸気機関車のように吐き出し続けて、さも三流芸人の踊りにあきあきしたような素振りで。
いけない、いけない、アターシャ様の機嫌がよくない証拠だ。
ボクちゃんは慌てて立ちあがるとドワルスキーを蹴飛ばした。
「なにすンねン、もう少しで見えたのに……あいつ、パンティはいとらんでぇ」
ドワルスキーが血走ったギョロ目を三角にして起きあがったとき、卑弥呼のトランス状態が最高潮に達した。
ゲキガスキーが同時通訳のマイクをすべて卑弥呼の前へ集めると、次々とスイッチを入れた。
卑弥呼の口がかすかに開いた。
「ニッポンを……占領すべし……」
そのときである。いずこからともなくあの懐かしくも忌まわしい声が聞こえてきたのである。
「待て、オジャママン」
とたんに卑弥呼のトランス状態が崩れた。
「だれだ」
ゲキガスキーが叫んだ。

見習いの青年は知らないのだ。
「歴史を守って、過去、未来」
「オジャママンのあるところ、必ず現れる」
「世紀の助ッ人、オタスケマン一号」
「同じく二号」
「ただ今参上！」
ゲキガスキーは慌ててオジャママンに変身した。見習いにしてはなかなか見事な変身ぶりではないか。
そして、キョロキョロとあたりを見回した。
「どこだ？　オタスケマン？　オタスケマン、出てこい」
偉そうなことはいってたが、やはりまだまだ見習いだ。初めての戦いにビビッていることが手に取るようにわかる。
だが次第にボクちゃんも不安になってきた。
なぜ今日はあの懐かしい姿を見せないのか。
「未来世界の人間が、まさか国連ビルを舞台に戦うわけにはいかないからな」
天井のダクトの通風口からコショウが抛りこまれた。
ボクちゃんたちはとたんにクシャミを連発するとたまらず通訳ブースから飛び出した。

おのれ、よくも天下のオジャママンにこんなセコい手でと怒りつつも、クシャミは止まらず、涙や鼻水までもがとめどもなく出てきた。ドワルスキーがひどい姿なのはいうまでもないが、アターシャ様も金髪の色男も邪馬台国の女王もふた目と見られない姿であった。

金髪の色男と卑弥呼は抱き合い、鼻水をこすりつけ合いながらヒイヒイ悲鳴をあげている。

ボクちゃんたちは自分たちの鼻水に滑って転びながらも、国連ビルの屋上に止めておいた超時空戦闘メカ、マタロス・カンダレタイプに転がりこんだ。

だれかがハクションとクシャミをして、おデコをぶつけたとたんにスイッチが入って、超時空戦闘メカは一気に空のかなたへ上昇していった。

狭いコクピットの中はたちまち五人のクシャミと涙と鼻水でビシャビシャになった。

だが次第に発作が収まってくると、ボクちゃんは正直いってホッとしていた。

あの狂った歴史はもう消え去ったのだ。

歴史はもう変わらない。

日本が占領されることはないのだ。

これから先、歴史は狂わないのだから、世田谷区で公用語がポルトガル語になることはないし、盆踊りがサンバになることもないのだ。

一九八九年十月二十三日からまたもとの正しい歴史に戻るのだ。

今のこの瞬間から。
だが現に変わってしまった何ヵ月かの歴史はどうなるのだろうという疑問が湧いてきた。
ボクちゃんとマイちゃんの出会い。
ともに日本解放闘争を闘った青春の日々。
あそこには確かにボクちゃんとマイちゃんの歴史があったのだ。
でも、そんなことはもうどうでもいいことだ。すべてがもとへ戻ったのだから。マイちゃんが望む世の中へ戻ったのだから。
ボクちゃんの記憶の中にだけ残っていれば。
そう思ったとき、ボクちゃんは不覚にも涙を流してしまったのだ。
決してコショウのせいではない涙を。
ボクちゃんはそう信じている。

ボクちゃんたち、全員がようやく回復したとき、超時空戦闘メカ、マタロス・カンダレタイプはロッキー山脈の上空に到達していた。
ボクちゃんたちはメカを降下させると、ただちに戦闘態勢に入った。
レーダーが接近してくるオタスケメカを捉えていたのだ。
オタスケマンめ、ロッキー山脈まで追いかけてきたのだ。

果たして今日はどのオタスケメカで挑戦してくるのか。
やがてズシンズシンと凄まじい地響きがするとオタスケキンタが姿を現した。
相変わらずダサイ奴だ。足柄山（あしがらやま）の金太郎のごとく、マサカリを振り回すしか能のない奴だ。
いつも思うことだが発想もデザインもなんと古臭いのか。
そんな奴になぜ負けてきたのかということはこの際おいといて、ボクちゃんたちもオタスケキンタに対抗すべく、超時空戦闘メカ、マタロス・カンダレタイプをトランスフォームし、戦闘ロボットに変型した。
その名もオジャマロボとオタスケキンタの激闘の火蓋が切って落とされた。
オジャマロボのスーパーウエポンが次々と炸裂した。
バズーカ、ビーム砲、レーザー銃。
だがオタスケキンタのマサカリが縦横無尽に空を斬（き）ると、それらの攻撃をことごとく撥（は）ね返してしまうのだ。
こんなとき、いつも徒労感に襲われる。これだけのスーパーウエポンがなぜマサカリごときに軽くあしらわれてしまうのか。
「先輩、敵ながら空恐（そらおそ）ろしい奴ですね。相当な手練（てだれ）と見受けました」
ゲキガスキーがのんきなことをいっている。
こいつはこの次に来るオタスケキンタの必殺マサカリ脳天割りの恐ろしさを知らないのだ。

見ろ、あの目を。オタスケキンタが間合いを測っている目だ。
おもむろに背中の大マサカリに手をかけて引き抜く。
ボクちゃんたちはこうなるといつも、どうしたことか金縛りにあい、身動きひとつできなくなってしまうのだ。
「先輩、どうしたんですか？　顔が青いですよ……やっぱり、タイムスリップのし過ぎって身体に毒なんですよね。いい仕事をするためにはタイムスリップの回数も減らさないと、帰ったらトンマノマント様にいっとこかな」
バカヤロー、お前なんぞ生きて帰れるものかとボクちゃんは心の中で叫んだ。
見ろ！　必殺マサカリ脳天割りが来た！
思わずボクちゃんたちは目を閉じた。
だが次の瞬間、すぐにいつもと違うことに気づいた。目をあけると、目の前でオタスケキンタが大マサカリを振りあげたままブルブルと震えていたのだ。
「すごいよ、卑弥呼」
ゲキガスキーがそういうと、隣の卑弥呼にチュッと投げキッスをした。
卑弥呼は美しくも妖しい狂気の表情でトランス状態に入っていた。
「卑弥呼、薪割りでもさせておやり」
そうゲキガスキーがささやきかけると、卑弥呼は目の前の通信機に向かって、さらに強い

思念を送った。
するとどうだ。オタスケキンタはたちまち木を斬り倒し、薪づくりを始めたではないか。
ゲキガスキーがニカッと笑った。
「卑弥呼はオタスケキンタを操縦しているオタスケマンに催眠術をかけてしまったのです」
なんという新入りなんだろう。
かつてこれほどオタスケマンを苦しめた者がいたであろうか。
「お次はどじょうすくいでもやらせてみましょうか、アラエッサ、サアッ」
卑弥呼は窮屈な操縦席に座ったまま思念を送り続けた。
狭いコクピットが残念だった。さっきのような覗きができない。
ドワルスキーも同じ思いらしい。ちょっぴり不満そうな顔をしている。
カラカラとゲキガスキーが笑った。
「先輩、もうこれでオタスケマンは敵ではありません。オタスケキンタを片づけたらさっそくまた国連へ戻りましょう」
ボクちゃんは愕然となった。
「お前、まだあの作戦をあきらめてないのかい?」
「当然じゃないですか。オジャマママン見習いとして初めての作戦ですもの。私はやりますよ！　断固として！」

「エライ」
とドワルスキーが叫んだ。
ボクちゃんはまたあの悪夢の歴史がぶり返すのかと思うと暗澹となった。
マイちゃんの運命を思うと絶望的になった。
彼女はまたけなげにも盆踊りサンバ大会に爆竹を持ちこむようなことをしでかすだろう。
そして、あの別れの一瞬にボクちゃんが見たように、MPに捕まって……。
「ええど、ええど、もっとやったれ」
ドワルスキーの興奮する声で我にかえったボクちゃんは土下座したオタスケキンタを見た。
その背中をいまオジャマロボがこれでもかこれでもかと踏みつけているのだ。
アターシャ様まで興奮している。
「いいよ、その調子、その調子！　オタスケマンごとスクラップにしておしまい」
ボクちゃんの目にもオタスケマンの敗北は確実だった。
ということはマイちゃんはまた……。
「やっぱり、天使よ、あなたこそ天使だわ」
そういったときのマイちゃんの声と顔がまざまざと甦ってきた。
そのとき、ボクちゃんは気づいた。
ボクちゃんは天使じゃない。天使らしいことは何ひとつしていないのだ。マイちゃんの運

命のために。マイちゃんを救うために決定的なことは何ひとつ。
「すごい、すごいじゃないか！　ついにオタスケマンをやっつけるときが来たんだよ！」
アターシャ様がボクちゃんの肩を抱きしめ、激しく揺すった。
そのとき、ボクちゃんの目には通信機を通して、オタスケマンに思念を送り続ける卑弥呼の姿が映った。
「ホントにすごい、すごいですよねえ、卑弥呼は！」
咄嗟(とっさ)にボクちゃんはそういっていた。
「すごい超能力ですよ！　なあ、ドワルスキー」
「せやせや、日本一、いや世界一やで！」
「超能力だけじゃないぜ」
「せやせや、べっぴんやなあ」
一瞬アターシャ様の目がキラッと光った。
「ええ女やでえッ、なあ、ゲキガスキー」
ゲキガスキーが得意に小鼻をふくらませ、
「もちろんですよ。卑弥呼こそ世界一の美女です！」
アターシャ様のこめかみにひと筋ふた筋ピクンと青筋が走ったのを、ボクちゃんは見逃さなかった。

ゲキガスキーはすっかりニヤけてノロケ始めた。
「クレオパトラや楊貴妃なんてメじゃありませんよ。あいつらが美女だなんていうのは卑弥呼を知らない奴らのいうことですよ。ねえ、そうでしょう……おお、なんて美しい、先輩たちは幸せですよ、目の前でこんな美女が拝めるなんて……もっとも、世界一の幸せ者は私ですけど……私と卑弥呼が組めばもうこの世に不可能はなし……」
ゲキガスキーの幸せはそこまでだった。
アターシャ様の蹴りが炸裂すると、この色男は他愛もなくノビてしまったのだ。
ボクちゃんは心の中で思わずニタッと笑いながら呟いた。
青年よ、アターシャ様の蹴りのすごさがわかったかい。オジャママンになるってことがどういうことかこれで少しは身にしみてわかったかな。
だがアターシャ様の怒りがそのくらいで収まるはずがなく、
「冗談じゃないよ、こんなキツネツキどこがいいんだい」
と叫びながら卑弥呼に襲いかかり、その長い髪をつかんで引き倒したのだ。
女王の尊厳を傷つけられた卑弥呼が怒ったのはいうまでもない。
だが女王卑弥呼とアターシャ様との史上最大の戦いは長くは続かなかった。
オタスケキンタが雄々しく立ちあがると、逆襲の大マサカリを振りおろしてきたのだ。
オジャマロボは木ッ端微塵に吹っ飛んだ。

ボクちゃんはその残骸(ざんがい)と一緒に宙を飛びながら、ボクちゃんは天使になれたと思った。オジャママンとしての良心は痛まなかった。だってボクちゃんは決して仲間を裏切ったわけじゃないんだもの。

ただ卑弥呼を見て思わずきれいだといっただけなのさ。そうしたらアターシャ様が逆上して……

卑弥呼はオタスケマンによって、邪馬台国へ送り届けられたそうである。

一九九〇年。夏。日本は相変わらず繁栄していた。とどまるところを知らず繁栄し続けていた。

ボクちゃんはまたあの懐かしいエビ通りに立っていた。

ちょっと落ちこむことがあって、また家出したのである。

ボクちゃんは吸いこまれるように白亜の館へ入っていった。

ひんやりと心地よい冷気がボクちゃんを包んだ。

ボクちゃんは例の鏡の前に立った。

でもマイちゃんはいなかった。

歴史は変わらなかったのだけど、きっとマイちゃんは変わったのだろう。

逆転イッパツマン・番外篇

実録!? 恐怖の魔界王を倒せ!

高山鬼一

――この物語を読む前に――

おれは、徳種（とくだね）　実（みのる）。ＩＰＣ（中央国際新聞社）社会部の記者だ。
これからお話しする〝逆転イッパツマン・番外篇（へん）『実録!?　恐怖の魔界王を倒せ！』〟は、テレビ・アニメの〝逆転イッパツマン〟の続篇と考えて読んでほしい。
だが、テレビやビデオでご覧になったことのない人のために、かいつまんで、これまでの〝あらすじ〟を説明しておこう。

〝逆転イッパツマン〟――あらすじ――

一九九七年、秋。
オストアンデル市にある、国際的な大企業のなかで、トップを続けている〝株式会社タイムリース〟では、今日もリース品を運ぶ仕事に追われて、現場は大忙しだった。
注文主から依頼があれば、現在はもちろん、過去でも未来でも、時間や次元を超えて、世界の各地へ飛んでいくのだ。

このタイムリース社のエースといわれる豪　速九はエンジニアのチーフだが、その正体は国際平和機構から派遣されたエージェントである。

豪の上役のヒゲノ部長と、部長の美人秘書、星　ハルカもまたエージェントの一員だ。

受注したリース品はトッキュウザウルス（またはトッキュウマンモス）で運ばれるが、その運搬要員に、放夢ランという名の美少女と、その弟のハル坊がいる。

ランはカッコいい豪に憧れていたし、ハル坊も豪を兄のように慕っていた。

同じ乗員のひとりに、情報係の特殊ロボット、2―3（ツースリー）もいた。

ロボットながらカラオケが好きで、名古屋弁を使う愛嬌者である。

一方、同じ市内に、タイムリース社にはやや劣るが、国際企業番付では、第二位にランクされている〝シャレコーベリース株式会社〟の北支社と西支社とがあった。

北支社の支社長はムンムン、部長はコスイネン、課長はキョカンチンという名で呼ばれ、シャレコーベリース社の別動隊だった。

三人は、シャレコーベリース社のコン・コルドー会長から秘密指令が下ると、直ちにクリーン悪トリオに転身（変身）して、ライバル会社であるタイムリース社の仕事の妨害にかかる。

その目的は、タイムリース社の信用を落とさせること――だというのだが、会長の真の狙

いは別にあった。

トッキュウザウルス（トッキュウマンモス）で、毎回、リース品を運ぶランやハル坊たちは、悪トリオに襲われたり、妨害されて危機に陥る。

ハル坊から〝ピンチ通信〟を受けた豪はイッパツマンに転身（分身）、弾丸ヘッド号に乗って、悪トリオをたたくために飛び立つ。

悪トリオと対決してイッパツマンは、難なく勝ったかに見えるが、悪トリオは巨大プロレス・メカを呼んでイッパツマンを窮地に追いこむ。

絶体絶命のイッパツマンは、サイコキネシス（念動力）で豪と特殊エネルギー交流する。

一瞬、イッパツマンから電波がトッキュウザウルス（トッキュウマンモス）に飛んで、トッキュウザウルス（トッキュウマンモス）のボディが分解し、逆転王（または三冠王）のボディとなる。

イッパツマンが乗る弾丸ヘッド号とボディが合体、逆転王（三冠王）が完成する。

逆転王（三冠王）と悪メカロボは凄絶な決戦の末、逆転王（三冠王）の勝利で終わる。

そして、最終回。コン・コルドー会長は、正体を現す。

太陽系の外から来た宇宙人（インベーダー）、それが、真の正体だったのである。

しかも、エージェントの一員、星　ハルカは、宇宙人の操るスパイだったこともわかった。
ハルカを救出しようとしたイッパツマンは、逆に、ハルカの振りかざすダイヤモンド剣に追いつめられてしまう。
だが、このとき、ランがわが身を捨ててイッパツマンをかばった。
ランの愛の力は、ハルカを操っていた宇宙人のサイコキネシスを解き放った。
もはやこれまで――と、宇宙人は円盤機で逃げ去ろうとするが、イッパツマンは三冠王を呼び、アームガンで円盤機を撃墜する。
戦いすんで、日が暮れて――、ドサクサに紛れて逃げ出したクリーン悪トリオは、これからは、清く正しくまじめに生きていこうと誓い合う。
だが、その行く先には黒く深い霧が立ちこめていた。
一方、タイムリース社では、ヒゲノ部長が豪やランたちに別れを告げていた。
自分のしたことを恥じて去った、星　ハルカの上司として責任を取るために。
一抹の悲哀を感じる余裕もなく、豪たちはまた忙しい仕事場に戻っていった。
平和と、人の愛の尊さを深くかみしめながら……。

この事件から約一年半後に起こったのが、これからお話しする〈番外篇〉なのだ。
よろしく、最後まで読んでいただきたい。

PART・1 PROLOGUE

そして、事件が始まった!

午前一時二十分。
豪　速九は、タイムリース社に隣接する、特殊工作機械工場の宿直室で眠りについていたが、ドーンッという爆発音で夢を破られた。
豪が工場に駆けつけると、タイム・ワープ発射台付近から炎々と火の手が上がり、数名の守衛やエンジニアたちが消火器で火を消そうとしているところだった。
「待てっ、その酸アルカリ消火器を使うな!」
豪の声に、一同は振り向いて、
「豪技師長……?」
「なぜ、この消火器を使っちゃいけないんですか?」
「君たちには、この匂いがわからないのか!」

一同は、燃え盛る発射台に鼻を向けていたが、
「やっ、ガソリンの匂いだっ！」
「そうだ、ガソリンだ！」
啞然とする一同に、豪が、
「泡消火装置を使うんだ！」
豪は、叫びながらも、自分で床のハッチを開き、泡消火器のホースを引き出すと燃え盛る発射台に向けてノズルを開いた。
守衛やエンジニアたちも、豪にならって泡消火器を取り出して消火を開始した。
ブォーッと噴出する泡状の消火液で、さしもの火も収まった。
後には、黒く焼け焦げて一部が溶解しかけた発射台が残った。
守衛たちが、暗然と見やりながらぼやいた。
「これで、今年になって、三度目のつけ火だな！」
「リース品の運搬車の事故も続いたしなぁ……」
「それに、エンジニアたちが三人も行方不明になってるしな！」
「警察もヤッキになって調べているらしいが、全く手がかりがつかめんそうだ」
守衛たちの言葉に耳も貸さずに、火元を調べながら、ひとりうなずいている豪を見てエンジニアのひとりが聞いた。

「技師長、今度の火事の原因はいったいなんですか？」
「こいつは、昔の戦争で使っていたという焼夷弾らしいな」
「焼夷弾っていうと？」
「ああ、つまり、先にガソリンをばらまいておいて、そいつに爆薬で火をつけるやつさ」
「はあ、火炎瓶みたいなものなんですね！」
豪がうなずいて、
「ガソリンや油の火災のときには酸アルカリ消火器を使えば、火が消えるどころかなおさら火力が増すんだよ」
「あっ、それで、技師長は、あの消火器を使うなっていったんですね！」
「前の二度の火災は、単なる発火装置を使ったものだったが、敵のやり方もエスカレートしてきたな！」

翌日、技術部長室に三人の男女が集まり、ある種の密談を交わしていた。
特殊工場の総責任者兼技術部長の日毛野良雄と、技術課長であり、技師長である豪　速球。
それに、技術部長秘書であり、超自然科学者の春野さくらの三人である。
日毛野良雄（三十九歳）は、中肉中背、鼻の下にチョビ髭を蓄えているので、一名、ヒゲノ部長と呼ばれている。

だが、このあだ名の由来は、先代の技術部長で、実父にあたる日毛野濃蔵(ひげのこいぞう)が、口のまわりいっぱいに髭を生やしていたので、工場関係者たちが愛称でヒゲノ部長とつけたところからくる。

つまり、今のヒゲノ部長は二代目になるわけなのだ。

豪速九（二十一歳）は、ヒゲノ部長を補佐する技術課長だが、知能指数は一二〇、運動神経も抜群で、しかも十ヵ国語に通じる天才的な青年である。

春野さくら（二十三歳）は、名前のとおり、花のように可憐(かれん)で、容姿ともに群を抜く美形であり、心根も人一倍優しい女性だ。

ミス・タイムリースの声も高く、ファンも多い。

以上が三人の表の顔であるが、その真の姿は、国際平和機構のエージェントだった。

この事実を知る者は、国際平和機構の幹部とタイムリース社の一部の重役だけである。

「豪君、すると、これまでの工場内の火災を起こした犯人は、何ひとつ後に証拠(しょうこ)を残していないというんだね」

ヒゲノ部長の問いに、豪はキッパリと、

「そうです。工場内に設置してあるビデオカメラにも、犯人らしい者の姿が全く映っていません、それに……」

「それに、何かね、豪君？」

「最近、ウチのリース運搬車が、続いて九回も事故に遭っていますが、いまだにその原因がつかめていないでしょう」
「そうだったな！……、それと優秀なエンジニアが三人も行方不明になっているしな」
「ぼくは、工場の火災も、運搬車の事故も、エンジニアの行方不明も、同じ犯人のしわざだと考えます」
「フム……、見えない犯人か。まるで、幽霊か、透明人間のようなやつだな！」
ヒゲノ部長の言葉に、春野さくらが手元のメモから目を離し、美しい顔を上げると、
「ヒゲノ部長、これはやっぱりサイコキネシスだと思います」
「ウム、なるほど。サイコキネシス、つまり、念動力でやることも考えられるな！」
と、ヒゲノ部長は腕を組み直しながら、
「その分野は、春野君、君のほうが専門じゃろうが、どうかね、サイコキネシスであんなことまで、実際にできるのかい？」
「わたしの知る限りでは、サイコキネシスで物体を移動した例は二八〇〇件以上あります。でも、あれだけ大きな爆薬をしかける力を出すには大変なエネルギーを使わなければなりません。運搬車の事故にしてもですが……」
「しかし、可能なのですね？」
と、豪が質問した。

「ええ、机やベッドのような大きな物体を動かした例が、ソビエトで十七件、ドイツやフランスで八件、アメリカでも十件以上あります。でも……」
「でも、どうなんだね、春野君？」
ヒゲノ部長が身を乗り出して、春野さくらの顔を見つめた。
「サイコキネシスで大きな物体を動かす場合、遠隔(えんかく)ではエネルギーが分散して不可能に近いんです」
豪が思いついて、
「そうか！　特殊工場の、ビデオカメラに映る範囲内でなければ、サイコキネシスは使えないってわけか！」
「とすると、やはり、サイコキネシスは無理なのかねぇ……」
ヒゲノ部長は、思わず口元の髭に手をやって大きな吐息を漏(も)らした。
春野さくらが小首を振って、美しい顔を曇らせながら、
「わたしたちもいまだ知らない、強大な力を使う超能力者がこの世にいれば別です！」
「もし、そんな超能力者がいたら、どうなるのかね？」
ヒゲノ部長の質問に、
「もし、そんな超能力者がいて、悪い考えを起こしたとしたら……」
ヒゲノと豪は、息をのんで春野さくらの次の言葉を待った。

「人類の危機につながるかもしれません」
「人類の危機に!!……」
三人はお互いの顔を見つめ合い、いまや、重大な局面が迫ったことへの緊張で、身が引き締まるのを覚えた……。

PART・2 START
大企業の秘密をスクープしろ!

国境のトンネルを出ると、そこはもうオストアンデル市の見える丘の上であった……。
ナーンチャッテ、偉い作家をまねた気分になって、隣の助手席にいる河合ユキのほうをチラッと見やりながら、おれは愛車スーパー・タイガー・Zのアクセルをグイッと踏みこんだ。
時速一八〇キロのスピードだと、磯の香のする海風がヒュッ、ヒュッと入ってきて、頭の芯まで涼しくしてくれる。
天気はいいし、大好きなユキとも一緒に仕事はできるし、おれも、やっとツキが回ってきたなと、いつしか、口元がほころんでくるのを止めようがなかった。
そのときはまだ、今度の取材が、あんなおぞましい大事件に発展するとも考えずに……。

まずは、ここでおれの自己紹介をしておこう。
おれの名前は、徳種実。年はこの春二十七歳になった。
五年前、法科系の大学を出てから、首都ヒネルトジャー市の中央国際新聞社（Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ Ｐｒｅｓｓ ｏｆ Ｃｅｎｔｅｒ）、つまり、ＩＰＣに入社した。
ＩＰＣでは、社会部に配属となり、かなりの社会的事件ともつき合ってきた。
おれは、人一倍探究心も冒険心も強く、自分でいうのもおかしいが、正義感も人には負けない記者魂を持っているつもりだ。
身長は一七五センチ、体重七二キロ、学生時代ラグビーで鍛えた身体には自信がある。
だれかが、昔の二枚目俳優、ライアン・オニールに似てるっていってたっけ。
以上が、おれのコマーシャル。
ついで――といっては失礼だが、隣席の河合ユキのことも説明しとこう。

中央写真短期大学に在学中だが、子供のころからカメラいじりが大好きで、一昨年のインターナショナル・グラフィック・コンテストで佳作に入選した腕前を持っている。
ＩＰＣには、バイトで来ているが、そのまま社員として居座るつもりらしい。
プロポーションは、身長一六七センチで、Ｂが七八、Ｗが六三、Ｈが八〇ってとこだ。
年はまだ十九歳。

ちょっとボーイッシュだが、可愛くって、明るくって、積極的な、つまり、ピチピチの現代ギャルだ。
だが、今どきのコにしちゃ珍しく、他人にも優しく、思いやりもあるんだ。
タレントでいえば、若いころの富田靖子に似ている感じかな。

おれは、ここらで、ユキへの愛を告白しようかと思ったが、口から出たのは、
「ユキちゃん、オストアンデル市内に入る前に、ふたりの取材方針を確認しておこうや」
と、全く見当違いのセリフだった。
(なんて、アホなことを！　せっかくのチャンスを無にしてからに……)
おれが大反省して、言葉を変えようかと考える暇もなく、ユキが、
「サンセイッ、あたしはタイムリース社の調査だからまだいいけれど、徳種さんは、マクア・リース社だから心配なのよ」
「いや、タイムリース社も事故や火災が続いてるんだから、きみだって安心できないよ」
「あたしなら大丈夫よ。それより、うまく事件の真相がつかめるかしら」
「とにかく、虎の穴に入らなくっちゃ、虎の子は捕まえられないからな！」
とかなんとか、カッコいいことといったが、実際のところ、おれにもどこから手をつけていいのかまだ正確にはわからなかった。

あれは、ちょうど、一週間前のことだった。
一九九九年。つまり、二十世紀もドンジリの今年の七月三日、おれがある街の殺人事件の取材を終え、汗まみれになって社に帰ってきたときだった。
編集デスクの賭持さんが、今年五十歳になって、かけ始めた眼鏡越しにおれを見ると、
「おい、トクちゃん、キャップが呼んでるよ」
と、声をかけてきた。おれは、仲間の一部からは〝トクちゃん〟と呼ばれてるんだ。
キャップの名前は、山尾踏太。
年齢、五十五歳。柔剣道で鍛えた身体全体が四角張っていて、顔つきは、猪に似ている。
それに、声も当たり前に話していても、ダミ声だからガナッているように聞こえる。
だが、心根はいたって優しく、人情家である。
おれが部長室をノックして中に入ると、キャップはデスクの前のソファーにかけていたが、なんと、その前に河合ユキが向き合って座っていた。
キャップはおれを手で招きながら、
「やあ、トクちゃん、ここにかけてくれたまえ」
例のダミ声で呼んだので、おれは、ユキの隣に腰を下ろした。

「実はだねえ、今、河合ユキくんにも話しとったんだが……」
と、おれを部長室に呼んだ理由を話し始めた。

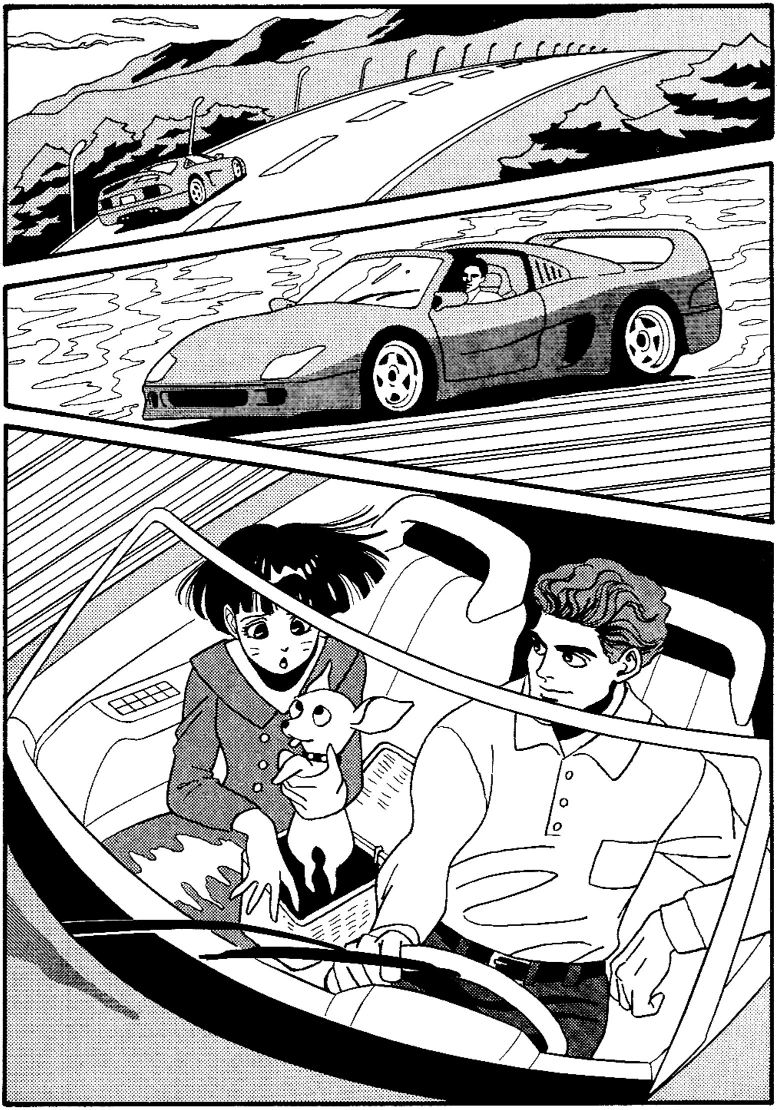
それは、国際企業番付で、十一年もの間連続トップの座を守っている〝株式会社タイムリース〟についてのことだった。
タイムリース社は一年半くらい前に、同じリース会社で業界二位にのしあがってきた、シャレコーベリース株式会社のコン・コルドー会長のために大事件に巻きこまれた。
(この事件については、前に説明したので省略させていただく)
だが、事件がかたづき、今では以前のように社内も平和を取り戻し、活気づいて仕事も順調に流れ始めていた。
ところが、シャレコーベリース社が解散するのを待ちかねてでもいたかのように、新しいリース会社が乗り出してきた。
その名は〝株式会社マクア・リース・エンタープライズ〟。
ちょうど、その前後からタイムリース社には続いて不可解な事故が起こり出した。
リース運搬車の相次ぐ故障、工場内の火災、技術者数名の失踪(しっそう)等々……。
ブンヤ(新聞関係者、主に記者のことをよぶ隠語)仲間から、切れ者といわれているキャップは、タイムリース社の事故や失踪には、なんらかの形でマクア・リース社が絡んでいる

のではないかと考え始めた。
つまり、ブンヤの第六感にピンと来たのだ。
さっそく、社会部の幹部クラスを集めて検討した結果、初めのうちは取材という形で、タイムリース社とマクア・リース社に記者かカメラマンを送りこむことになった。
必要なら、潜行調査もする覚悟でやってみるべきだ——という意見も出たが……。
もちろん、他社のブンヤに嗅ぎつけられないように行動しなければならない。
その仕事の第一の白羽の矢がおれに立ったってワケだ。
「どうだい、トクちゃん、やってくれるかね？」
おれは、もちろん、ふたつ返事でＯＫした。
「もし、この事件がわしの考えているとおりだとしたら、大スクープものだが……」
「そうですとも、タイムリース社には国際平和機構のエージェントも何人かいると聞いています。そのエージェントでさえ、まだ、事件を解明できないそうですからね！」
「ウム、それだけに危険も伴うはずだな」
「危険を恐れていては、社会部のブンヤなんか勤まりませんよ！」
と、おれは一瞬キャップの前だということも忘れて叫んだ。
「いやぁ、こりゃ、トクちゃんに一本とられたな！　ウワッハッハッハハハ……」
キャップは豪快に笑うと、キチンと座り直して、

「よしっ、徳種くん、きみに頼む！　ただし、くれぐれも、無茶はするなよ」
「はい、心得てます！」
「それから、河合くんをきみの助手につける」
それを聞いておれはソファアーから跳びあがった。
「ユ、ユキちゃんをですか！」
そのおれをいたずらっぽい顔つきで見やると、河合ユキが、
「アラ、あたしじゃ不足なの？」
おれは、興奮の極みに達して、顔を赤くしたり青くしたりしながらわめいた。
「だ、だって、きみぃ、命がけの仕事だぜ、それに、きみはアルバイトじゃないか！」
そのおれをとりなすようにキャップが、
「いやぁ、トクちゃん、実はこの仕事のフンギリをつけたのは彼女なんだ……」
口をアングリあいて、パクパクしているおれにキャップが続けた。
「わしはマクア・リース社に疑惑を持っていたが、ただの思い過ごしだと考えとったとき、河合くんがここへ来て、マクア・リース社が怪しいと話してくれたんだ」
おれは、やっとアングリの口を閉じて、
「それで、フンギリが！……」
「ウム、それに、河合くんは、この仕事を手伝わせなければ、ＩＰＣを降りるとまでいっと

るんだよ」
「降りるって、この新聞社をやめるのか？」
おれは、今度はユキに向かって叫んだ。
「ええ、だって、こんな事件をおとすくらいならやめたほうがいいもん」
キャップがうなずいて、
「そこでわしからの妥協案で、トクちゃんにはマクア・リース社に行ってもらって、河合くんにはタイムリース社を調べてもらおうと思うんだが、どうかね？」
そうか、さすがはキャップだ。より危険と考えられるのは、マクア・リース社のほうだから、ユキをタイムリース社に向かわせるというのは正解に違いない。
おれは、すぐ納得したが、大スクープを狙っていたユキはしぶしぶＯＫした。
おれとユキは、さっそく、タイムリース社とマクア・リース社について、できうる限りの情報集めをしてみた。
タイムリース社については、一年半前にさかのぼり、例のシャレコーベリース社絡みの事件も詳細にわたって調べあげた。
わが社の誇るスペシャル・コンピューターは数時間のうちに全データをそろえてくれた。
しかし、不思議なことに、肝心のマクア・リース・エンタープライズ社についてのデータは皆無に等しかった。

ただ、わかったことといえば、マクア・リース社のデーモン会長から、政治家や有力者に莫大な金がばらまかれていて、そのため良い客筋を得ていること。
また、国の関係の大きな仕事をかなりおさえているらしいこと——くらいだった。
血のめぐりの悪いおれの頭でも、何か裏があると考えるようになった。
おれとユキは、行動を開始した。
まず、あまりフェアじゃないことだが、わが社のスペシャル・コンピューターに特殊進入システムを加えて、多面的に調べた結果、マクア・リース社の機密部分は、なぜか、オストアンデル市にある同社の西部支社に隠されているらしいことが判明した。
つまり、タイムリース社にしても、マクア・リース社のことについても、その調査する場所はオストアンデル市に集中していることだけは事実である。
おれは、ウチ（IPC）の学芸部を通して、タイムリース社にコンタクトを取らせた。
その理由は、世界一のリース会社を〝グラビヤ特集で紹介したい〟からということにした。
次に、経済部を通して、マクア・リース・エンタープライズ社の西部支社に〝超一流企業を支える支社〟という特集を組むので協力してほしいと連絡した。
その結果、どちらからもOKを取ることに成功した。
おまけに、両社には密着取材のため、三日間、それぞれの会社の宿舎に泊めてもらうという約束までも取りつけた。



あとはやるっきゃない！

「ワーッ、やっちゃったァー！」

突然、隣の席のユキが叫んだので、おれは慌ててブレーキを踏むところだった。

超高速道路で、へたにブレーキなんか踏んだら、前後の車にまで自動制御がかかってしまう。

「なんだっ、どうしたんだい、ユキちゃん？」

と、見ると、ユキが膝の上に載せていたバスケットの下から、グリーンのタイトスカートの上に、なんか水が漏れているんだ。

「いやだわー、ロッキーったら、おもらししちゃってぇ！」

「ロッキーって、まさか、きみは犬を！」

ユキはバスケットの蓋(ふた)を開いて、中からチワワのロッキーを抱きあげながら、

「そうよ、だって、ひとり者のあたしが外泊するんですもん、ロッキーだけ置いてはこられないじゃない、ねえ、ロッキーちゃん」

と、ユキは自分の鼻をロッキーの鼻にくっつけている。

ロッキーが「クンー、クンー……」と、ユキに甘えると、

「よしよし、お腹が空(す)いたのね、もうすぐ何か食べさせてあげるわよ」

いいながら、ロッキーを下のシートに置いたので、おれはちょっと頭にきた。
「おいおい、車のシートにオシッコさせないでくれよ。まだ、新車なんだからね！」
ユキはハンカチを取り出してスカートを拭きながら、ケロリとしていった。
「バスケットの中でタップリやっちゃったから、もう出ないわよ」
「だけど、大事な仕事に行くっていうのに、犬なんか連れてって大丈夫かい？」
ユキは返事をせずに、前方の陸橋上に取りつけられた標識を見上げて叫んだ。
「あら、そろそろ超高速を出るのね！」
標識は道がふたつに分かれていることを示している。
左が海寄りのオストアンデル市、右が山側よりのアッケラカン市だ。
やがて、超高速道路を出る分岐点に来て、おれは左の道へハンドルを切った——。

PART・3 DASH

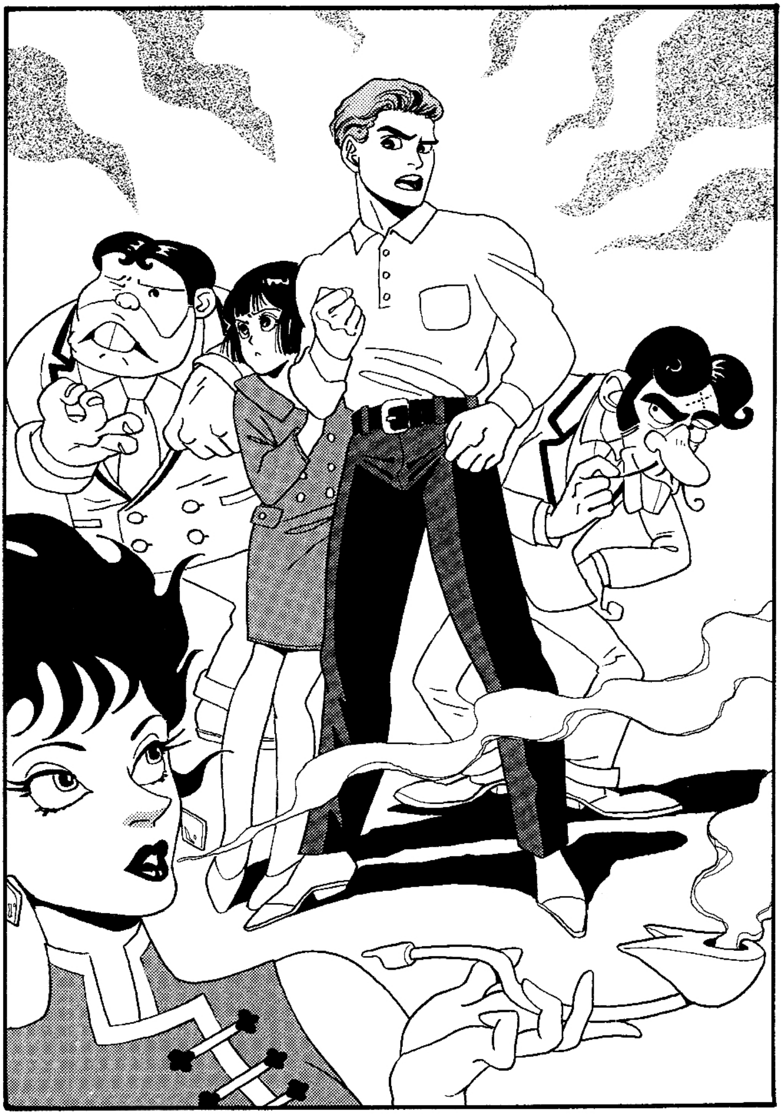
カモが、向こうからやってきた！

一般道路に入ると、ビルとビルの間からチラリチラリと青い海が見え出した。
市街中心地への近道と考えられるビルとビルの間の路地に、おれは車をカーブさせた。
そのとき、いきなりその路地わきから一台の車が飛び出してきて、おれのタイガー・Zの

前部バンパーにガツンッと来やがった。
「チッキショウ、やってくれたな!」
おれは、この街に着いた途端の事故に、嫌な予感を覚えた。
ぶつかった車種は、一九七八年型のフォードだ。
今どき、ちょっとお目にかかれないクラシックカーなので、一瞬、おれも唖然として、その珍しい乗り物を見やっていた。
フォードから、バラバラッと赤いチャイナ・ドレスの女とふたりの男が飛び出してきた。
女は、歳の頃は三十少し前くらい、中国系ハーフで、厚化粧のせいか、アクが強いがまずまずの顔とスタイルの持ち主だ。
男は、ひとりのほうが痩せぎすで、鼻の下にチョビ髭がある小柄でキザな感じの三十男。
もうひとりはその男の三倍もあるような四角張ったゴッツイ身体つきのやつで、口のまわりや顎に髭のある、やはり、三十一か二くらいの鈍感そうなやつだ。
男たちはふたりとも、どぶ鼠色のくたびれた背広を着たサラリーマン風といったところだ。
いうならば、三人とも、品がないし、ファースト・インプレッションはあまりよくない。
しかたがないので、おれも車から降り立つと、三人が興奮気味に近づいてきて、まず小柄な男がベラベラ喋り始めた。

「きみぃ、ど、どうしちゃってくれるのさぁ！　大事なぼくちゃんの外車に傷つけて、頭に来ちゃうのよね。ほんと！……」
おれもトサカに来たが、ジッとこらえながら、このマザコン男の言葉を聞いていた。
「待ってくださいよ。おれはちゃんと信号を見て、徐行しながら来たんですよ。あなたのほうが飛ばしてきてぶつかったんじゃないですか！」
すると、チャイナ・ドレスの女がズイッと前に出て、
「おや、妙なことというじゃないか、人の車にぶつけておいて、ずいぶんないいがかりをつけるんだねえ、坊や！」
女に合わせて、小男がまた、喰ってかかってきた。
「そうですよね、ムンムン部長！　こいつ若いくせに生意気なんだから、もう！　ぼくちゃんの車を修理するんだってお金がかかるのよ！」
そうか、こいつらはわざと人の車に、あのポンコツをぶつけて、逆に賠償金をたかろうとしてたのか。
おれの正義感がムラムラとわき立ってきた。
「君たちは当たり屋か、金がほしくてわざとぶつかってきたんだな！」
おれの言葉に、女も小男も、一瞬たじろいだが、小男のほうが意地になって、
「何いってんの、若いギャルなんかとドライブして、イイカッコするんじゃないわよ！」

小男の言葉で、女も開き直ると、
「そうだよ、コスイネンのいうとおりさ。遊ぶお金があるなら出したっていいだろう!」
そらきた、おいでなすったなと、おれも覚悟を決めていい返した。
「ふざけるな! おれも、あの車に乗ってる人も仕事中なんだ。君たちの相手をしている暇もないし、やる金なんか一円だってない!」
おれはクルリと回れ右して、車に戻ろうとすると、女がヒステリックな声をあげて、
「そうかい、それじゃあ、奥の手を出そうかね。キョカンチン、やっておしまい!」
女の声に、それまでウドの大木のように突っ立っていた、四角張った髭の男が一歩前に出ると、
「オースッ、わしがひとひねりしてやるであります! ムンムン部長!」
と、いうやドスドスとおれのほうに駆け寄ると、いきなり、丸太のような腕でおれの胸倉をグイッとつかんだ。
おれだって、多少腕力には自信があるほうだ。
大男の腕を外そうとして暴れたが、万力につかまれたようでビクともしない。まるで怪物だ。
「ウーッ、畜生め、このおれをどうしようっていうんだ……」
ムンムン部長と呼ばれた女は、得意気におれに近寄ると、



「あたしだって乱暴なことは嫌いさ。おとなしく出すものを出せば、許してあげるっていってるんだよ、坊や」

「おれは、これでもジャーナリストの端くれだ！　暴力なんかに負けられるか！」

おれは、もう、ヤケッパチになって叫んだ。

そのとき、おれの車から河合ユキが降り立って、

「待ちなさいよ！　あんたたち、今、あたしが無線電話で警察に連絡したから、間もなくお迎えが来るはずよ。それでもやるつもり？」

よくやった！

さすがはおれが愛した女性だけのことはある。

ユキの言葉を聞くと、コスイネンと呼ばれた小男が慌て出して、

「や、やばいよ、ムンムン部長。警察だっていってますよ！」

「しょうがないねぇ、キョカンチン、早くその坊やの財布を取るんだよ！」

「わかったであります！」

キョカンチンは左手でおれの襟首をつかんだまま、右手でおれの背広の内ポケットから身分証明書やカードの入った財布を引っぱり出した。

ユキが駆け寄って、ムンムンに叫んだ。

「あんたたちのやってることは恐喝と強盗よ、わかってんの！」

「うるさい娘だねえ。こうでもしないと、あたしらの小遣いが足りないんだよ！」
ムンムン部長は、キョカンチンから財布を引ったくるように取ったが、フと、身分証明書を見た途端、目をみはって、
「アラッ、アラアラアララ……！」
と、急に言語障害に陥った。
「ムンムン部長、どうしたんでありますか？」
「まさか、財布の中がからっぽだなんていうんじゃないですよね！」
コスイネンとキョカンチンが、ムンムンの持っている、おれの身分証明書を覗いたが、
「ウソー！……」
「ホントー？……」
と、おれと身分証明書を見比べて目を白黒させた。
キョカンチンがおれをつかんでいた手を急に放したので、おれはドスンとアスファルトの上に落とされて、イヤッというほど尾骶骨を打ってしまった。
ユキが駆け寄って、おれを助け起こしながら心配そうに、
「徳種さん、大丈夫？」
「ああ、べつに怪我はないけど……」
そういいかけたとき、奇妙な現象が起こったのにはおれもびっくりした。

あのムンムン部長とかいう女が、不意におれたちの前の地面にガバッと平伏したからだ。
「あんたは、中央国際新聞社の徳種さんだったんですね！」
おれは、あまりの状況の変化に茫然としながらも答えてやった。
「ああ、徳種だけど、それがどうかしたのかい？」
「ハエ……、それを説明する前に、今の車の一件については、水に流すといってくださいませ」
そういいながら、フと、後ろにボケッと突っ立っている男ふたりに気がついて、
「コスイネン、キョカンチン、お前たちもお願いするんだよ！」
その言葉に、慌ててコスイネンとキョカンチンも大地に平伏しながら、
「お許しくだせえまし！……お願え申しますだ！……」
おれは、てっきりこの連中は暑さの影響で、おかしくなったんだと考えたから、
「わかった、今のことは水に流してやるよ。それで、君たちはいったいなんなんだい？」
「ハエ、実は、あたしはマクア・リース・エンタープライズの西部支社の営業部長で、本当の名前は頓　紋々と申します……」
「ぼくちゃんは、営業課長の小杉　念ですねん……」
「自分は、同じく営業係長の基幹　珍であります！」
それを聞いて、今度はおれとユキがアングリあいた口がふさがらなくなった。

「マクア・リース西部支社のぉー……！」

こいつは、たまげた、もんざえもん！

おれの目的が向こうから転げこんでくるなんて、神のいたずらだろうか！

しかも、こんな妙な形で現れるなんて。

ムンムンとか、コスイネンとか、キョカンチンという名は、おそらくこの三人の呼び名なんだろう。なかなかそれぞれをうまく表現している。

だから、おれは今後は、本名よりもこの呼び名のほうで記録することにする。

しかし、そのムンムンとか、コスイネンとか、キョカンチンとかいう名は、確かどこかで聞いた覚えがあるのだが……。

まあ、今は、そんなことはどうでもいいか！

ムンムンは、おれの財布を差し出しながら、

「西部支社長のボローキン・波家多（はかた）から徳種さんが取材に来られることは聞いてました。いつも、お宅の新聞で宣伝していただいているから、そそうのないように、と……」

そこまでいうと、いきなり両手を顔に当ててワーッと泣き出したから、おれはまた驚いた。

「ど、どうしたんですか、ムンムン……、いや、頓さん？」

ムンムンは、泣きじゃくり、ついでに鼻水まですすりあげながら、芝居がかって、

「聞いてください、徳種さん！　あたしたち三人は、さる大会社に勤めていたんですが、会

社は倒産して、退職金もなしに追い出されたんです……」
ムンムンの言葉をコスイネンがついで、
「それを、今のマクア・リース社の会長が拾ってくれたんですが……ワーッ……」
と、今度はコスイネンまで、身を震わせて泣き出したので、後をキョカンチンがついで、
「仕事が歩合制でありますからして、自分らはいつもカラッケツなんであります！　つまり、腹もペコペコでありますから……」
そこまでいってから思い出したように、こいつもウワーッとバカでかい声で泣き出した。
凄まじい泣き声の大合唱に、おれとユキは呆れ返って顔を見合わせながら、
「いや、大体わかりました。食べるお金もなくなって、やむをえず、おれたちにたかろうとしたってわけなんでしょ」
その言葉で、三人はピタリと泣くのをやめて、
「それそれ、それなんですよ。あたしたち、初めてこんな悪いことやったんです！」
「ほんとの本当なんです。だから支社長にだけは絶対内緒にしてくださいよ！」
「内緒にしてくれたら、なんでもするであります！」
この三人が初犯でないことは、顔つきでわかる。
しかし、おれがこれから取材するのには、こいつらの弱みを握っていれば、かえって好都合というものだ。

アハッ、おれもなかなかのワルだよな！
「いやぁ、おれは正義と言論の自由を護るブンヤなんでね！」
おれが、追い討ちをかけると、ユキまで調子に乗って、
「そうよ、世の中の悪にはかんぜんと立ち向かうのが使命ですものね！」
三悪はうろたえたが、ツとムンムンが立ちあがって、おれに擦り寄ると甘い声色を使って、
「ねえ、あたしたち、徳種さんのいうことなんでも聞くからさぁ……」
これを見た河合ユキが、キッと眉を吊りあげてムンムンに詰め寄りながら、
「なーによ、今度は色仕掛けすんの、オバタリアン！」
〝オバタリアン〟のセリフにムンムンもカッとなったのか、
「と、徳種さん、この娘もウチの取材に来たのかい？」
こいつは、まずい。
ユキがマクア・リース社とはライバルのタイムリース社に行くと知れば、変に警戒されて、仕事がやりづらくなる。
「いや、ユキちゃんは、ここの観光協会に取材があるんで、乗せてきたんですよ」
と、ごまかしたが、ムンムンはうさんくさそうにユキを見やっているので、おれは慌てて、
「ああ、さっきの話だけれど、おれの仕事に協力してくれるのなら、あなたたちの秘密は守りますよ！」

この言葉に、ムンムンはニコッとご機嫌を直した。
「アーラ、ありがとう！　わかってくださったのね、あんたなら、なんでも協力しちゃう！」
ようやく話がついたので、そこで、河合ユキと別れて、おれはマクア・リースの西部支社へムンムンたちとともに向かうことになった。
コスイネンが、フと思い出して、
「あっ、そうだ、さっき、ユキちゃんが電話で呼んだポリスはどうなったんですか？」
というと、ユキはケロッとして、
「ああ、徳種さんの車の電話は昨日から故障してたのよネ。だから、ただ、おどかしただけよ」
それを聞いた途端に、三人の悪党はショックで、
「シビビン、シビビン、シビビンナー！……」
と、飛んだり跳ねたりのブレークダンスを始めた。
河合ユキの行く先は、もちろんタイムリース社だが、おれもユキも特別につくらせた超小型のビデオカメラをポケットに忍ばせて持っている。
それと、お互いの連絡用に、首からかけたペンダントに小型通信器もしこんである。

このペンダントが、おれとユキの赤い糸になったら……ナーンチャャッテ！
そんなことを考えている間に、おれのタイガー・Zを先導していたフォードの三人が海岸に近い株式会社マクア・リースの西部支社に着いた。
見かけは三階建て、二〇〇平方メートルのビルだが、倉庫を改造したモルタル造りで、壁にはアチコチに亀裂が走る、しみだらけの古い社屋だった。
リース業界で、タイムリース社と競うマクア・リース社の一翼を担う西部支社にしては、やけに貧弱なもんだ。
いや、ケチで金を残すのも企業のあり方なのかも知れないナ。
正面玄関の自動ドアがあいて中に入ると、突き当たりの壁の上に〝社訓〟を書いた紙が貼ってあった。

一、お客様を見たら、金と思え。
二、お客様をつかまえたら絶対離すな。
三、仕事を取るには手段を選ぶな。
四、出る金は半分、入れる金は倍に。
五、社員は会社の礎となれ。
六、同僚は皆ライバルと思え。

七、営業上は、ウソも方便。
八、掛け売り無用、現金有用。
九、他社を追い越せ、追い抜け。
十、すべての力を、会社のためにつくせ。

凄(すご)い！
こんな前時代的な社訓が、今どきの会社に存在するなんてたいしたもんだ。
社訓の下に窓口があり、そこが受付らしい。
中でヒマそうな女の子が爪を磨(みが)いている。
だが、玄関を入った途端に、左わきから近づいた守衛につかまった。
背丈(せたけ)は二メートルもあるが、痩せぎすで、妙にまっ白く、映画で見たドラキュラにそっくりだ。
ムンムンが、おれのことを支社長の客だと説明すると、守衛はコックリうなずき、回れ右して道を開いた。
事務所内には、十人ほどの老若男女の社員がいたが、おれが、部屋に入ったとき、
「やあっ、ＩＰＣの徳種さんでおますな！」
と、関西弁で、日本人離れした顔つきの妙な男がおれに声をかけた。

この男が、マクア・リース西部支社のボローキン・波家多支社長だった。
ウチの（ＩＰＣの）スペシャル・コンピューターで知る限りでは、この支社長は北欧系の日本人であるということだ。赤ら顔に、鷲鼻（わしばな）、くぼんだ目、ブロンドの髪、そして背丈も二メートル近くある男だ。
「支社長、あたしたちがちょうど街へ出たとき、徳種さんをお見かけしたのでご案内したんですのよ！」
ムンムンが得意顔でいうと、コスイネンもならって、
「ええ、そうなんですよ。ぼくちゃんが最初に見つけたんです！」
「いや自分が見つけたんであります」
と、キョカンチンまでしゃしゃり出てきた。
どうもおれが、彼らのやったことをバラスんじゃないかと恐れて、先制攻撃しているらしいのだ。
だが、ボローキン・波家多支社長は三人に向かって怒鳴りつけた。
「シャーラップ！　あんたらは何やっとるねん、営業幹部が三人もそろうて今日もサボッとったんやな！」
「サボッてたなんて、そんな人聞きが悪いですよ、支社長！」
ムンムンが、赤くなって抗議すると、コスイネンたちも、

「そうですとも、ぼくちゃんたち大真面目(まじめ)で営業に歩き回ってたんですよ！」

「腹もペコペコであります！」

必死で抗議する三人に、支社長はわきの壁に貼ってある営業成績のグラフを示しながら、

「あんたら、ナント弁解してもあかんわ、この営業成績をよう見いや、昨日入った新人かて三件も仕事を取ってきとるんやでぇ、あんたらはどうや、今月に入ってもゼロやないか」

確かに、トップの波家多が十三件で、頓、小杉、基幹がそろって0件、ほかの社員は三件から十件の成績がグラフに明記されている。

三人は急におとなしくなって床を見るしかなくなった。

「ええか、あんたらはウチのデーモン会長からの口ききやいうさかい、なんもせんのに部長だの課長だの係長いう席を与えられとるんやでぇ、わかっとんのかいな！」

支社長に問いつめられて、ムンムンが蚊の鳴くような声で、

「わかってますけど……」

「わかったら、キバッテ仕事を取るんや！　取れなんだら、ウチは歩合やさかい一円も給料は出えへんで！」

ボローキン支社長はいうだけいうと、しょげている三人を無視し、おれに向かって、ニカッとつくり笑いしながら、

「やあ、どうも、見苦しいところをお見せしてすんまへんどしたな……」

といいながら、思い出したように、
「そうや、マクア・リース西部支社の案内は、頓部長ら三人にさせましょ、ウチらの会社で、今、暇なのはあの連中だけやさかいな……」
てなわけで、おれの取材の案内役は、用なしトリオと決まった。
ムンムンたち三人は、大喜びでこの仕事を引き受けた。
なにしろ、営業どころか、仕事らしい仕事に初めてありついたわけだから。
……だが、結果として、皮肉にも、おれがこのトリオと一緒だったから〝マクア・リース社の秘密を知る〟という目的を達成することができることになったのである。
さて、このへんで、ポーンッと場所を変えて、本来の事件の始まりでもある〝タイムリース社〟に向かった河合ユキからの情報を紹介してみよう。

PART・4　HOP

タイムリース社の〝エース〟登場！

エー、あたし、河合ユキは、徳種さんと別れてからタクシーを拾って目的のタイムリース社に向かいました。

大都市オストアンデルの南、つまり、沿岸に面して建てられた株式会社タイムリースの本社の威容は、まるで、現代のお城といった感じです。
さすが、世界のリース界をリードする大企業は違うなぁと感心しながら、正門から入っていったら、親切な守衛さんが広報部に連絡してくれました。
広報部の係の方はエレクトローラー・カーで、広大な庭園を回って第一応接室に連れてってくれたんです。
五分くらい待ったころ、技術部科学研究室員で同社一の美人、春野さくらさんが来られて、さっそく、タイムリース社の中枢部(ちゅうすうぶ)に当たる特殊工作機械工場へ案内してくれました。
工場といっても、大きな航空機やタンカーの部品をつくったり組み立てたりする工場なので、床から天井までが三〇メートルもあるんです。
その天井にはレールやケーブルが縦横に走っていて、それらの下に巨大な航空機の翼や、船のエンジンなどがクレーンで吊り下げられ、リモートコントロールで移動しています。
工場内で動いている機械はほとんどが工作用ロボットで、数人のエンジニアはロボット機械の調整や点検をするだけが仕事のようです。
この工場で、総責任者でもある、工学博士の日毛野良雄技術部長に紹介されました。
ここの人は皆、ヒゲノ部長と呼んでいるのであたしもそう呼ぶことにします。
年は三十九歳、働き盛りのガッチリした身体を白衣に包んで、エンジニアたちに指示して

いる姿は、同じ年のウチの父より素敵に見えたのは、あたしのヒガミかしら。
あたしが、カメラでヒゲノ部長のスナップをパチパチ撮ってたら、あたしと同じ十九歳くらいの女の子と、弟らしい七歳くらいの坊やと、変な形のロボットが近寄ってきました。
女の子は放夢ラン、坊やは放夢春雄（みんなはハル坊と呼んでます）、そして、変なロボットの名は2—3（ツースリー）です。
あたしは、この三人のことはウチ（IPC）のデータで調べていたので知ってました。
でも、ランちゃん（放夢ランのこと）が、タレントで〝ゴクミ〟と呼ばれた後藤久美子の若いころにそっくりの可愛い娘だったので、嬉しくなっちゃいました。
ハル坊も、ランちゃんに似て可愛いけれど、いかにもいたずらっ子のようです。
ロボットの2—3は噂のとおり、妙な名古屋弁で話したり、胸にセットしたカラオケセットで、大好きなカラオケを唄って得意になっています。
あたしはランちゃんたちと、すぐ仲良しになったので、タイムリース社の工場や事務所、宿舎などを案内してもらうことになりました。
でも、その前に、ぜひ、会ってみたい人がいたんです。
IPCのデータや徳種さんから聞いていた、有名なあの人！
そうです、タイムリース社のエースともいわれる豪　速九さんです。
その豪さんは、特殊第一機械工場のタイム・ワープ発射台のところにいました。

あたしも、徳種さんから聞いてましたが、一昨日の午前一時半ごろに、発射台のあたりで放火があったんだそうです。
案内されて、火事のあった発射台の場所に来てみて、あたしはびっくりしました。
発射台や、そのわきに置かれたトッキュウザウルスが、強烈な火力のためにドロドロに溶けていたからなんです。
その周囲で、大勢の作業員たちが、まっ黒になって後始末をしています。
だれがこんなひどいことをやったんでしょう。
そのとき、作業員たちの間から、白いつなぎの作業服を着た若い男性がこっちへ向かってきました。
豪　速九さんです！
顔は、あたしの大好きな昔の俳優のアラン・ドロンの若いころにそっくり。
ガッチリした上半身とスラリとした長い足。
スポーツは万能で、知能指数は国際的にもトップだとか……。
その豪さんが、あたしの前に来ると、よく通る声で、
「やあ、ＩＰＣの河合ユキさんですね」
と、あたしと握手してくれたんです。
感激ぃっ！

……あたし、もう、なんにもいらない！

と、まあ、河合ユキの報告を聞いていると、メチャンコに話が長くなるので、おれ（徳種実）が、代わって、この先の経過を説明させてもらいます。

ユキは、この後、発射台付近や、使用不可能になったトッキュウザウルスの写真を撮り、放夢ランの案内で、これから泊まる宿舎に向かった。

社員との密着取材なので、宿舎にはユキの希望を入れて、タイムリース社社員アパートの、ランとハル坊姉弟の部屋が割り当てられた。

一口に社員アパートといっても、超豪華である。

海を望む風光明媚（めいび）な緑地の高台に建てられた、十七階建ての白亜の近代的ビルで、一名、ヴィーナス・タウンと呼ばれているそうだ。

各室にはベッド、応接セットがあり、冷暖房はもちろん、バス、トイレ、キッチンもついている。

おまけに、ベランダ側はサンルームになっていて、温室には一年中花も咲いているのだ。

そのほかに、共同で使用できる体育館やプールや劇場、医療室、喫茶室（きっさしつ）、スーパー等がそろっていて、ひとつの小タウン化している。

このアパートで、ユキはランたちと三日間を一緒に過ごすというわけだ。
ロッキーも、ベランダに、ダンボール箱を犬小屋代わりに置いてもらったのでひと安心。

その晩、ささやかながら、心のこもった〝ユキの歓迎会〟がランの部屋で催された。
ユキと、主催者のランとハル坊、ロボットの2―3に、途中から豪　速九も加わって、ヒゲノ部長から、ケーキや飲み物の差し入れもあり、なかなか豪華なパーティとなった。
何より、豪が同席したので、ユキは大感激して、得意の歌まで披露してしまった。
だが、歌といえば、2―3の独壇場である。
調子にのった2―3は、続けざまに二十五曲唄って、ついには喉をからしてしまい、豪から喉にオイルを差してもらう始末となった。
ここで、その小パーティの一部をかい間見てみよう。
宴もたけなわになったころ、2―3が、
「さあ、喉が直ったから、もう一曲いってみるかナモ！」
「2―3、もうたくさんよ、また、今度にしてよ」
ランが微笑っていうと、
「ハーレー、ランちゃんは豪さんがいれば、なんにもいらんのキャーモ？」
と、2―3が冷やかせば、ハル坊までが調子にのって

「ほんと、ほんと、ランねえちゃんは、豪さんがいれば天国だもんねー！」
その言葉に、ランはまっ赤になって、拳を上げると、
「ンもおっ、ふたりとも変なことというと、後でお仕置きするわよ！」
2―3とハル坊が、拳を避けて逃げながら、
「やあ、ランちゃんが本性を現したデャーモ！」
「豪さん、ランねえちゃんと結婚したら、毎日殴られるかもね！」
これには、ランも恥ずかしさに顔をおおって、
「知らないわ、もぉ……」
それまで笑って見ていた豪も、
「こら、こら、2―3も、ハル坊も、あんまり大人をからかうものじゃないよ！」
豪の言葉に、2―3とハル坊は、急に素直になって、
「ハーイ！」
と、神妙に返事をした。
そうか、放夢ランは、豪　速球に恋をしているのだ。
豪も、ランに気があるようだし。
考えてみればふたりはよいカップルだ。
(そうだわ、あたしには徳種　実さんがいるんだったっけ！　豪さんは夢の中に出てきた王

子さまだったのよ、きっと!……)

ユキは、豪への思いを、キッパリ捨て去ることにした。

ユキは、翌日から、おれたちの目的に向かって敢然と行動を起こした。

ブンヤ魂が甦ったのだ。

できる限り、タイムリース社の内情を知ることだ。

まず、ユキはヒゲノ部長に、ランたちが過去の時代へリース品を運ぶときには、必ず、タイム運搬車に乗せてくれるよう頼んだ。

これに対して、取材中の三日以内ならよいだろうと許可が下りた。

また、ユキは地下三階より下には、ヒゲノ部長や豪など、一部の幹部しか入ることのできない室や通路があることを知った。

そこへの出入りには、特別通行カードと手紋照合の二重チェックをしなければならない。

ユキは、なんとか、その室や通路の秘密を知りたいと考え、妙案を思いついた。

それは、チワワのロッキーを利用することだった。

幸いにも、豪は犬好きで、ロッキーも豪になついている。

ロッキーの首輪に、持ってきた超小型ビデオカメラをつけて、豪の後を追わせれば、地下の秘密もわかるかもしれない。

超小型ビデオカメラは、大きいボタン程度だから、ロッキーがつけていても目立たない。
ビデオカメラはリモコンで操作できるし、モニターはユキのコンパクトに内蔵してある。
さっそく、ロッキーにつけて、試してみたが、一日目も二日目も何も収穫はなかった。
さすがに、河合ユキも焦(あせ)りを感じた。
そして、三日目の朝が来た。
タイムリース社取材の最終日である——。
その日も、過去二日間と同じように、ユキは郊外にあるヴィーナス・タウンのアパートからランたちとともに、タイムリース社へ向かった。
だが、ランがタイムリースの玄関へ入るのを待ちかねていたかのように、豪が駆け寄り、
「ランちゃん、非常呼集だ！　直ちにタイム運搬車のところへ行ってくれたまえ！」
「わかりました、すぐ行きます！」
ランは緊張した顔で答えて、後ろのハル坊と2—3にも合図すると、地下二階にあるタイム・ワープ発射台へ向かって駆け出した。
やっと、目的のひとつがかなえられると、張りきって、ユキが三人の後を追ったのはいうまでもない。
せっかく、緊張が高まった場面で中断するのは、はなはだ恐縮だが、おれが取材中のマク

ア・リース西部支社の話に、再び、ポーンッと戻すことをお許しいただきたい。

――と、いうのは、タイムリース社の事件と、マクア・リース社との間に、大変な関連が生じてくるからなのだ。

おれはムンムン（頓　紋々部長）たちの案内で、マクア・リースの西部支社を見学させてもらうことになった。

この古い建物は、二年前まで、某工場の倉庫だったのをたたき値で買い取ったものらしい。

一階は営業事務所、二階がリース品倉庫で、三階はクモの巣だらけのガラクタ置場、そして、裏手には、穴だらけでスレート張りの屋根の車庫があった。

中には、錆びついたポンコツトラックと乗用車が二、三台置いてあるだけだ。

その車庫の下は地下倉庫だったらしいが、今は錠をかけて使用してないとのことだった。

車庫に隣接して、モルタルでできた粗末な造りの社員寮が、どぶ川をはさんで二棟あった。

一棟は女子寮で、もうひとつのほうは男子寮だ。

以上が、マクア・リースの西部支社のすべてらしい。

つまり、この支社は、ただの営業所の窓口の役目しか果たしていないというわけだ。

実際の業務や、大きなリース品を置く倉庫や大型輸送車等は、ヒネルトジャー市にある本

社のほうにあるのだ、とムンムンはおれに話した。
おれは、当てが外れてガックリきた。
タイムリース社の事件をもとに、わが社のスペシャル・コンピューターを駆使して、やっと『その秘密がマクア・リースの西部支社にある』と、突きとめたはずだったのに……。
とにかく、その日は、コスイネンやキョカンチンと同じ男子寮に泊まりこむことにした。
おれに当てがわれた部屋は、二階のいちばん奥にある小汚い小部屋で、隣がコスイネン、前がキョカンチンの部屋である。
トイレも共用だし、バスもみんな一緒くたで入る共同浴場だった。
その共同浴場へ行くと、コスイネンとキョカンチンが先に入っていた。
ふたりはタオルを頭に載せて、演歌を唄っていたが、ひどい音痴で聞くに耐えなかった。
おれが入ってくるのを見て、
「やあ、徳種さん、どうです、よい記事が書けそうですか？」
と、コスイネンが声をかけてきたので、おれはカマをかけてみた。
「いや、おれが知りたいのは、西部支社がほかの支社とどこが違うかってことなんですよ」
つられて、キョカンチンが、
「おお、それはでありますな、この支社は、実際のところ、自分たち三人がいるから存在しているようなものでありますよ」

「ほお、三人というと、頓部長さんとあなた方の三人ですね！」
おれの言葉に、コスイネンも調子にのって、
「ほんとよ、マクア・リース社のデーモン会長は、ぼくちゃんたちのためにこの支社を用意したんですからね！」
「つまり、自分たち三人は、デーモン会長の目的を果たすために、いちばん役に立っているわけなんであります」
これは驚きだ。
支社一、役に立たないはずの三人がいちばん役に立っているということは！
「ほお、どんなお役に立ってるんですか？」
すかさずおれが聞くと、キョカンチンは得意顔で、
「それは、タイムリース社の妨害……」
「シャーラップッ！　喋（しゃべ）り過ぎよ、基幹（きかん）係長！」
と、キョカンチンがいいかけた口に、コスイネンが慌ててタオルを押しこんだので、キョカンチンは目を白黒させて、
「アワアオアウゥ……」
となって、話は中断してしまった。
そうか、やっぱり、この三人はタイムリース社の事件と関わりがあったのだ！

コスイネンは、キョカンチンの口をふさいでから、取ってつけたように、
「そうそう、今日は徳種さんの歓迎会をしなくちゃいけなかったわね！　基幹係長」
「アハ、そ、そうでありました……」
さすがに鈍いキョカンチンも、やっと、秘密を漏らしかけたのに気づいたらしい。
そのとき、おれは急にあることを思いついて、急いで浴場を出た。
浴場内では、またコスイネンたちがへたな歌を唄い始めた。

さて、なぜおれが、慌てて浴場を先に出たかということだが……。
前にも話したが、おれとユキはふたりとも、首から吊ったペンダントに、超小型通信器をしこんでいる。
また、ポケットの中には大型ボタンほどのビデオカメラもお互いに持っている。
ウチの技術部の、器用なやつが取材用につくってくれたものだ。
おれとユキは、人がいない場所で、通信器を使いお互いの状況を連絡し合っていた。
おれのビデオ・モニター装置は、シガレットケースにしこんであって、遠距離からも操作できるリモート・コントロール式だ。
ビデオテープだって、二時間は使える特殊なマイクロテープなのだ。
ビデオカメラの裏には、マグネットがつけてあるから、鉄器類ならピタリとくっついて便

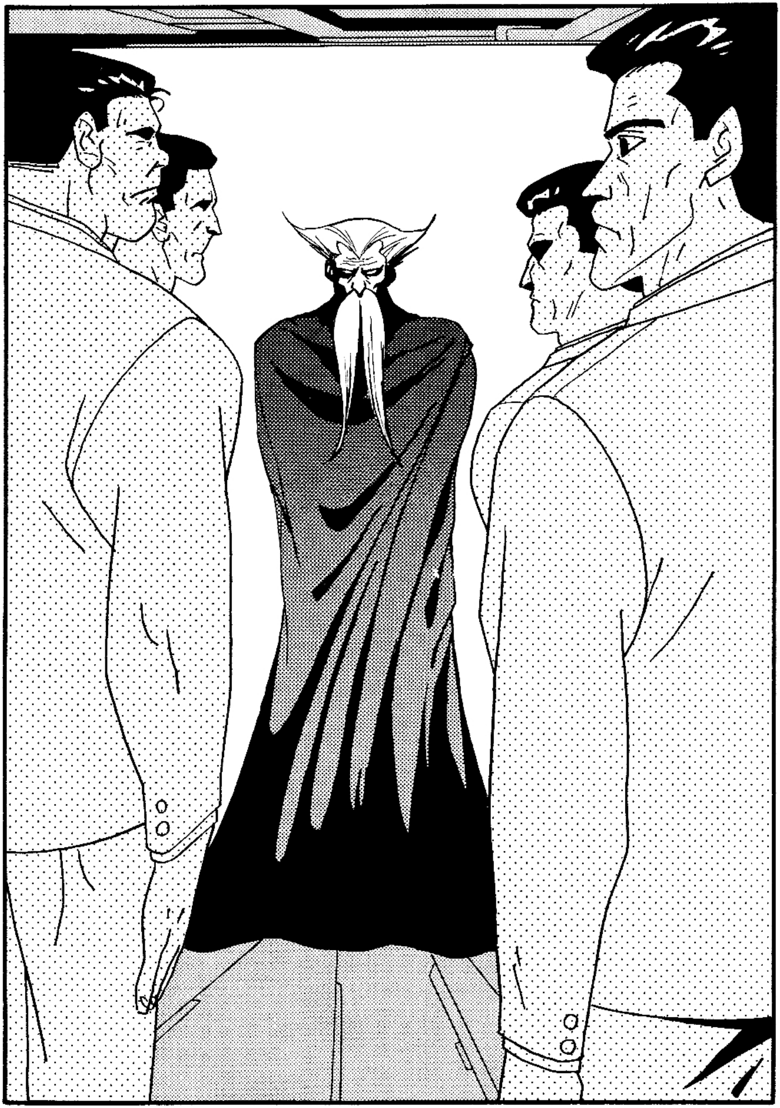
利なもんだ。
おれは、浴場から出て、キョカンチンの部屋へ直行した。
幸い、部屋のドアには鍵がかかっていなかった。
キョカンチンの部屋に入ると、ロッカー内にあるダブルの背広を引っぱり出した。
そいつについている、でっかいボタンにビデオカメラをしこむってわけだ。
だが、簡単にいくと思ったのに、意外に手間取って、やっとのことで終わったとき、廊下の向こうから、コスイネンとキョカンチンの音痴合唱が聞こえてきた。
おれが慌てて、廊下に飛び出したとき、間一髪でふたりが角を曲がってくるのが見えた。
その夜、おれの部屋にムンムン、コスイネン、キョカンチンが集まって、ドンチャン騒ぎが始まった。
それは夜明け近くまで続いた。
おれの歓迎会のはずが、結局、飲み物や食べ物の代金はおれが払うことになって……。
二日目の朝、大変なことが起こった。
二日酔いで、モウロウとしていたおれは、寮の廊下をドタバタ人が駆け回る音で目が覚めた。
急いで服を身につけて廊下に出たら、コスイネンとキョカンチンに行きあい、

「た、大変よ、会長が自らここへ来られるのよ！」
そういうコスイネンの、ズボンを見ると、裏返しにはいていた。
「会長って、デーモン会長が？」
おれも、予期せぬ出来事に唖然として問い返した。
「そうであります。社員一同でお迎えするであります！」
キョカンチンも、大分慌てたと見えて、一着しかないダブルの背広の上から、ネクタイを巻きつけていた。
ふたりがアタフタと外に駆け出したのを見て、おれも追って外に出た。

PART・5 STEP
巨怪(きょかい)、デーモン会長の正体を暴け！

おれが、支社の前庭に駆けつけると、既(すで)に、支社の社員全員が玄関前にそろっていた。
支社長のボローキン、ムンムン部長、コスイネン課長、キョカンチン係長やほかの社員も緊張した面持(おもも)ちで、一方の空を見上げている。
デーモン会長の名前は、この一年間のうちに、国際的にも有名になったが、その姿や顔を実際に見た者は少ない。

報道関係者には絶対に写真は撮らせない。
われわれが新聞に掲載する写真は、マクア・リース社から送られてくる一、二枚の修正されたスチールを使っているだけだ。
大体、マクア・リース社の社員ですら、会長に会ったのは重役と一部の者だけということだから、こんなチッポケな支社に来ることは大事件に違いない。
ちなみに、おれが今、ここに駆けつけたとき、カメラを持っていないかの身体検査まで、支社長はしやがったんだ。
もちろん、そんなものはおれは持っていなかった。
もっとも、シガレットケースには、超小型ビデオカメラのモニター装置とリモコンが入っていたが、支社長がそこまで調べている間がなかったのが幸いした。
そう、おれが持つより安全なところにカメラはある。
キョカンチンのダブルのボタンに、超小型ビデオカメラをしこんでおいた効果が、こんなに早く来ようとは!
おれは、大スクープをつかむ期待にワクワク胸が高鳴った。
やがて、大空の一角から、バラバラという音とともに一機の中型ヘリコプターが飛来して、西部支社上空を一周の後、前庭に着陸した。
ボローキン支社長が叫んだ。



マスコミにも、社員の前にも顔を出したがらない、デーモン会長とはいったいどんな人物か。

おれは、頭を下げながらも、上目づかいでへりから降りる人物を見守った。

呆れて見ているおれにも、支社員のひとりが頭を下げろと合図した。

その声で十人の支社員は一斉に、へりに向かって最敬礼をした。

「社員一同、礼！」

秘書兼ガードマンらしい男の後から、傲然と現れたのは、身長が二メートルもある巨体の、年齢は七十歳くらいの老人だった。

老人は身体にスッポリと真紅の釣り鐘マント風の衣装を羽織っている。

白髪白髭で、突き出た高い鼻、鷲のような鋭い目は人に威圧感を与えるに充分だった。

おれは、会長の目がこっちを向いたとき、なぜかゾーッと背筋が寒くなるのを感じた。

ボローキン西部支社長は、腰をかがめながら、

「会長、おおきに、ようお出でくださいました。どうぞ！」

と、玄関から中の応接室へ、デーモン会長を案内した。

その間も、会長はひと言も口をきかず、支社員は最敬礼のままでいた。

会長が、社内に消えたのがわかると、やっと、一同は頭を上げて、ホッと吐息を漏らして生き返ったような顔つきになった。

実際、デーモン会長が現れたのには、特別な理由があるからに違いない。
おれは、中に飛びこんで直接その理由を聞きたい衝動に駆られた。
だが、そのチャンスは、意外に早くやってきた。
支社長ボローキンが、何か慌てて、中から飛び出してきて、
「頓部長、小杉課長、それから、基幹係長、会長がお呼びやで！」
ムンムンら三人組が驚いて、
「な、なんのご用なんでしょう？」
「わいには、なんもいわれんかったが、どうせ営業成績が悪いやよってに、クビだとでもいわれるんやろ。わいもそのほうが助かるがな」
「ク、クビーッ！」
三人は、震えあがって、お互いに顔を見合わせながらオロオロするのに、支社長が、
「はよう行きなはれ！　会長は気が短いさかいな」
「支社長、一緒に行ってとりなしてくださいな！」
「嫌やっ、わいには中に入るなといわれとるさかいな」
ムンムンは、今にも倒れんばかりにしおれながら、コスイネンとキョカンチンに、
「しかたがないから行こうか、課長、係長……」
コスイネンとキョカンチンも力なくうなずいて、フラフラと社内に入っていった。

おれは、ハッとビデオカメラのことを思い出して、ソッと、その場を抜けると、自分の部屋に駆け戻った。

おれは、興奮に震えながら、シガレットケースを内ポケットから出すと、音声はイヤホーンで聞こえるようにして、ビデオモニターのスイッチボタンをオンに入れた。

画面に、事務所の隣の応接室が映し出された。

もちろん、映っているのは、キョカンチンの胸のボタンにしかけた、ビデオカメラのレンズを通した映像に間違いない。

と、すれば、そのレンズにはデーモン会長が映っているはずだ。

ムンムンやコスイネン、キョカンチンは、支社長のいっていたように、仕事のことで、怒鳴りつけられているんだろうか？

だが、最初に画面に見えたのは、机の側面だけだった。

そうか、キョカンチンたち三人は、きっと、会長の前に平伏しているんだろう。

そう考えていたおれの耳に、デーモン会長らしい声が聞こえてきた。

重く、低く、まるで、地獄の底から響いてくるような声が。

「ムンムン、コスイネン、キョカンチン、お前たちはわしとの約束を忘れてはいまいな」

「決して、決して、忘れてません。あたしたち三人が失業してるところを拾ってくださったんですもの……」

ムンムンの声が答え、続けてコスイネンも、

「会長のご命令どおり、タイムリース社に火事を起こすメカもつくりましたしね！」

「ウム、コスイネン、今度使った爆弾は、なかなかよかったぞ。あの火災のためにタイム・ワープ用の発射台の一台は使用不能になったし、運搬用のトッキュウザウルスも当分使いものにはならんはずじゃからな」

「でも、会長、タイムリース社の三人のエンジニアはどうしたんでありますか？」

「フム、あの三人は、タイムリース社の企業秘密を知るために連れ去ったが、用がすんだ後、始末してやったわ」

やっぱり、タイムリース社の火災や運搬車の事故、誘拐(ゆうかい)の元凶(げんきょう)はここにいたのだ。

ブルブルとモニター用のシガレットケースを持つ、おれの手が興奮に震えた。

続いて話すキョカンチンたちの言葉に、おれは、さらに興奮の極みに達した。

大スクープだ！

こいつは絶対ピュリッツァー賞ものだ！

「自分たちはタイムリース社や、イッパツマンには恨みがあるであります！」

「そうですとも、あたしたちが前にいた、シャレコーベリースでは、あのイッパツマンたちにひどい目に遭いましたからね！」

ここまで、聞いていたおれは、ハッと重大なことを思い出して愕然(がくぜん)とした。

そうか、そうだったのかっ、おれもなんてドジなんだ！
ムンムン、コスイネン、キョカンチンというのは、確かにタイムリース社が一年半前、シャレコーベリース社に絡(から)んだ事件に巻きこまれたときに登場していた名前だ。
ウチ（IPC）のコンピューターの記録に、その名があったのに、今ごろ気づくなんて！
頭がボーッとしてきたおれの耳に、コスイネンの声が続いた。
「でも、会長、ぼくちゃんがつくった発火装置を、どんな方法でしかけたんですか？」
「そうだよねぇ、国際平和機構の連中もその謎(なぞ)が解けないらしいからね」
「グワッハッハハハ……」
デーモンは、不気味にこもる声で、得意気に笑うと、
「そんなことは、わしにとって赤ん坊の腕を捻(ひね)るより簡単なことじゃ！」
「魔法を使ったのでありますか？」
「そんなことはどうでもよいわっ、それより、明日で、すべてが決まる！」
「明日ですべてが？……」
「明日は、えーと、確か、西暦一九九九年七月十三日でしたわね」
「そのとおり、明日こそがわしにとっての最大で、最後のチャンスなのだ！」
「最大で、最後のチャンスでありますか？」
キョカンチンの言葉には答えずに、デーモンは、

「よいか、これはお前たちにとっても最後のチャンスじゃぞ！」
「あたしたちのチャンスといいますと……もしかして……」
「ウム、ムンムンは確か世界一の美女として、登録されたいと申したな」
「ンまぁ、そ、それが可能に！」
ムンムンのかすれた声に続いて、コスイネンも、
「ぼくちゃんは、世界一の科学者として認められるんですか？」
「そのとおり、そして、キョカンチンも……」
「自分が世界一の力持ちとして、ギネスブックに載るんでありますか！」
「わしの力で、お前たちの夢はすべてかなえてやるぞ！」
「あたしたちの夢が！……」
「とうとう、かなえられる！……」
「会長、自分は、命に代えても、なんでもやるであります！」
キョカンチンの言葉に、ムンムンとコスイネンも同調して、
「なんでもやります！」
「よろしい！　お前たちの命はわしが預かろう！」
その後、興奮した三人がガヤガヤ喋り合っていたが、それを断ち切るように、
「よいかっ、お前たち三人は明日の朝、タイム・ワープして、西暦一五五〇年のフランスは

ブルターニュの森へ向かうのだ！」
いきなり、デーモンが下した命令に、聞いていたおれも緊張して耳をそばだてた。
「一五五〇年のフランスのブルターニュへ……？」
「その森で、一体、何をするんですか？」
「その森の奥に、一万年前につくられた石造りの小さなピラミッドがある……」
「へえっ、フランスにピラミッドが……？」
「そのピラミッドの入り口には、悪魔封じと称して、黄金の十字架が架けられている」
「黄金の十字架が！……でも、一万年もの昔、だれがそんなものを？……」
「よけいなことは聞かんでもよい！　とにかく、そのピラミッドの封印である十字架を取り外すのがお前たちの役目だ！」
「十字架を外すんでありますね！」
このとき、キョカンチンが、急に立ちあがったのか、机の向こう側、つまり、デーモン会長がいるあたりの映像が映し出された。
だが、そこに映っていたのは、フワフワと宙に浮いた真紅の釣り鐘マントだけだった。
そうなんだ。
ビデオカメラのレンズを通して、映し出されたデーモン会長は、その顔も身体も、実体がなかったのである。

まるで、透明人間か、ドラキュラか、幽霊のように……。
マクア・リース社の会長、デーモンの正体は、一体、なんなのだろう?
少なくとも、普通の人間ではないようだ。
そのデーモンが、西暦一五五〇年のブルターニュの森で、小型ピラミッドの封印を外そうとしている。
一体全体、なんのために?
デーモン会長とムンムンたちの会話は、その後、急に声が小さくなったので、おれのビデオモニターでは聞き取ることができなかった。
それから、数分後、デーモン会長は来たときと同じように、ヘリに乗って帰っていった。
会長が去った後、ボローキン西部支社長は大張りきりで、販路拡張のため外回りに出かけていったし、ほかの社員たちは、適当に自分たちの持ち場の仕事にかかった。
そうか、キョカンチンが共同浴場でいいかけたことの内容が、今、わかってきた。
この西部支社は、デーモンの本来やっている悪事の隠れミノに過ぎなかったのだ。
知っているのは、デーモン会長とムンムンとコスイネン、キョカンチンの四人だけ。
このことは、ボローキン西部支社長も支社員も知らないようだ。

ムンムンとコスイネン、キョカンチンだけは、こっそりと社屋の裏手に向かった。

おれも、三人に気づかれないように用心しながら後をつけていくと、三人は車庫の中に入っていった。

「コスイネン、明日の朝は早いから、シャレコーベ・バギーの整備をしとくんだよ！」

ムンムンがいうのに、コスイネンが答えて、

「わかってますよ。こんなこともあるかと思って、チャンと手入れしておきましたからね」

と、ポンコツトラックの前に立つと、

「キョカンチン、そのポンコツをどけてよ」

「わかったであります！」

キョカンチンはトラックに両手をかけると、まるで机か椅子(いす)でも持ちあげるように、ヒョイとトラックを持ちあげてわきへ置いた。

トラックの跡の床から、縦七メートル、横五メートルのスチール製シャッターが現れた。

なるほど、地下の倉庫の入り口は錆びついた錠が下りたままになっていたが、あれは単なるカムフラージュだったのか。

コスイネンは、シャッターの隅にある小さな上げ蓋をあけて、内側にあるボタンを押した。

スチールのシャッターは、軽いきしみ音をあげて地下への入り口を開いた。

コスイネンを先頭に三人は、地下への階段を降りていった。
おれも、少し間をおいて、地下へと降りていった。
地下の倉庫は二部屋あって、想像していたよりも広く、天井の高さも高かった。
入り口に近い倉庫は、壊れて錆びた機械類やガラクタが、所狭しと積み重ねられていた。
だが、奥の倉庫には、おれがまだ見たこともない黒い乗り物が置かれてあった。
これが、コスイネンのいっていた〝シャレコーベ・バギー〟なのだろう。
外観は、確かに、人間のしゃれこうべに似ていて、車全体が特殊鋼板で包まれ、しゃれこうべの目に当たる左右の位置には、機関銃まで装備されている。
車高は二メートル、車幅は二・五メートル、車長は三メートルの三輪式だが、タイヤはオフロード・サバイバル仕様のコミカル四駆用が取りつけられていた。
そのシャレコーベ・バギー自体が、ひとまわり大きな透明カプセルの中に納められている。
また、バギーの下部には複雑に配線されたコードやワイヤーが壁の計器と接続していた。
おそらく、それらはタイム・ワープするときに必要なものなのだろう。
おれが物陰から覗いているとも知らずに、三人は、バギーを見ながら喋っている。
「懐かしいねえ！　このシャレコーベ・バギーに乗って、イッパツマンたちと戦ったころを思い出すよ！」
「ほんとですよね。だけど、明日はフランスのブルターニュへ行くだけですから楽チンです

よ」

「それだけで、自分たちの夢がかなうんでありますから、感激であります！」

「だけれどさ……チョット、話がうま過ぎるって気もするんだよね」

と、ムンムンがフと考えこむように腕を組んでいうのに、コスイネンが、

「ぼくちゃんも、それは考えたけど、あの会長なら嘘(うそ)はつかないでしょ」

「自分も信じているであります！」

ふたりの言葉にムンムンも折れて、

「そうだね、あたしの思い過ごしだよね！」

「それじゃ、明日の打ち合わせは上に行ってしましょ」

三人は、うなずき合って入ってきたほうに向かって歩き出した。

おれは、とっさにガラクタの陰に隠れた。

外へ出ると、おれの頭の上で、コスイネンがもとのとおりスチールのシャッターを閉じた。

さらに、その上にキョカンチンがポンコツ・トラックを載せたようだ。

しまった！

おれは、この地下に閉じこめられちまったんだ。

おれは、自分の間抜けさに腹が立ってきた。

そうだっ。

今日はまだ河合ユキに連絡をしてなかったっけ。
河合ユキに、マクア・リース社の秘密を伝えておかなければならない。
そして、警察にデーモン会長たちのやった悪事を連絡させないと……。
おれは、急いで首にかけたペンダントを引っぱり出すと発信ボタンを押した。
だが、いくらボタンを押してもなんの反応もなかった。
おれのいる、この場所には外部との通信が不可能な磁気バリヤーが張ってあるらしい。
すべての望みは絶たれた！
しかし、おれは腕利きのブンヤの端くれだ。
このくらいのことではへこたれやしない！
どうせ、明日はムンムンたちがフランスのブルターニュへ飛ぶはずだ。
そこで何をやるのか、おれのこの目でジックリ見てやろう。
やつらの悪事をトコトン見届けてやるのだ！
そのためには……。
そうだっ！
おれは、シャレコーベ・バギーのある倉庫へ引き返した。

PART・6 JUMP
〝聖水(せいすい)の瓶(びん)〟破壊指令が出た！

河合ユキは、取材三日目の朝、放夢ランたちと一緒にタイムリース社に出社したが、その玄関先で豪から緊急の非常呼集を告げられ、地下の特殊工作機械工場へ急行した。
タイム・ワープ用の運搬車で、何か〝急ぎの品物〟を運ぶらしいのだ。
ユキは、ヒゲノ部長から、取材中の三日以内なら運搬車に同乗してもよいという許可をもらっていた。
ユキにとって、千載一遇のチャンスがついに来たのだ。
時間を超えて、過去や未来へ「アッ」という間に飛んでいけるなんて、生まれて初めての経験に、冒険好きのユキの胸は高鳴った。
ユキは地下に向かうエスカレーターに乗りながら、前にいるランに質問した。
「ランちゃん、タイム・ワープして品物を運ぶっていっても、タイム・ワープ発射台が火事で壊れたままなんでしょ？」
「ええ、あの発射台はまだ修理していないけど、こんなこともあるだろうって、豪さんが新

しい発射台をつくってあったの」
「よかったぁ！……、それじゃ、運搬車のトッキュウザウルスは？」
その質問には、後ろのハル坊が答えた。
「トッキュウザウルスはだめだけど、もう一台、予備の運搬車があるんだよ」
「マア、予備があったの？」
「ああ、トッキュウマンモスっていうんだ」
「トッキュウマンモス！……」
ユキは、これで何も心配することがなくなってひと安心した。
せっかくのチャンスを棒に振りたくないからだ。
だが、そのユキにとって、ひとつだけ気がかりなことがあった。
マクア・リースの西部支社に行っている徳種と昨日から連絡が取れないことだった。
まあ、徳種さんのことだから、忙しくて連絡できないのだろう。
ユキは単純に割り切ることにした。
ユキたちが、地下の特殊工作機械工場につくと、いつの間にかタイム・ワープ発射台は、レールで隣の修理点検工場に移されていた。
こちらのほうが、より完全に機密を守れるからだと、ランがユキに説明してから、
「今までの火事や事故は、普通の人間じゃできないことだって豪さんがいってたわ」

「普通の人間じゃないって、それじゃ、だれが？……」
目を丸くして聞くユキに、2－3が名古屋弁で答えた。
「それはだナモ、超能力者か、それとも人間以上の力を持っているやつだデャーモ」
超能力者か、人間以上の力を持った者！
ユキの好奇心に、メラメラと火がつき始めた。
ランたちがハル坊や2－3と打ち合わせをしている間に、ユキはバスケットからロッキーを出して、首輪の金具に超小型ビデオカメラを取りつけてからソッと放してやった。
ユキの留守中も豪の動きを監視させるために……。

修理点検工場の海側に面して設置されたタイム・ワープ発射台は、伏せた椀型（わんがた）の巨大な透明カプセルに複雑な配線がされたものだ。
カプセルが中央部分から左右に分かれ、その間に、高い天井からクレーンに吊り下げられたトッキュウマンモスが降下してきてセッティングされた。
運搬車のトッキュウマンモスは、その名のとおり前世紀のマンモスに形が似ている。
車高五メートル、車幅四・五メートル、車長八・五メートルの堂々たる巨大車両だ。
ランやハル坊、2－3とユキが出発準備をしているところに、ヒゲノ部長と豪、そして縦、横、高さともに二十センチほどある木箱を持った春野さくらがやってきた。

豪が、まず、タイム・テレックス注文書を見ながら発注先や積み荷の説明を始めた。
「えー、今度の発注は、西暦一五五〇年のフランスの王宮内にいる、ミシェル・ノストラダムスさんからだ」
「あの大予言者のノストラダムスかナモ！」
と、2－3がスットンキョウな声を出した。
「そうだ、そのノストラダムスさんが、ウチのパリ営業所を通して、重要な品物を運んでくれるようにといってきたんだ」
「重要な品物ってなんですか？」
ランが聞くのに、ヒゲノ部長が答えて、
「ウム、それは現在のローマ法王庁で使われている、聖水台の水、つまり、聖水だよ」
ヒゲノ部長はそういいながら、春野さくらの持つ木の箱を受け取り、蓋をあけると中から水晶製の小瓶を取り出してみせた。
小瓶の中には、無色透明な液体が入っているのが見えた。
「へーっ、それが聖水なの！」
ハル坊が、瓶の中をシゲシゲと覗いていった。
「でも、なんで聖水を！……、聖水ならその時代にでもあるんでしょ？」
と、ランが聞くのに、ヒゲノ部長が答えて、

「いや、一九九九年七月十三日、つまり、今日の水でなければならないそうだ」
「発注されたのが三時間前だったから、特別の外交ルートでローマ法王庁から聖水を受け取り、スペシャル・エアーラインを使って、今、ここに着いたばかりなんだ」
「その聖水を何に使うんだろう？」
ハル坊が首をかしげて聞くのに、
「それは、ノストラダムスさんに聞かなければわからんことだ」
「急いでいるんですね？」
ランが聞くのに、
「そうだ、フランスとの時差、イタリアとの時差を計算に入れて、受け渡しの約束時間の正午まであと三時間しかない。急いで出発してくれ！」
「わかりました。すぐ出発します！」
と、いってランが木箱をヒゲノ部長から受け取った。
そのわきで、豪がハル坊に、
「ハル坊、何も起こらないと思うが、もしも、面倒なことがあったら、ピンチ通信をしてくれよ」
ハル坊はコクリとうなずいて、
「うん、そのときは、また、イッパツマンに応援を頼むね！」

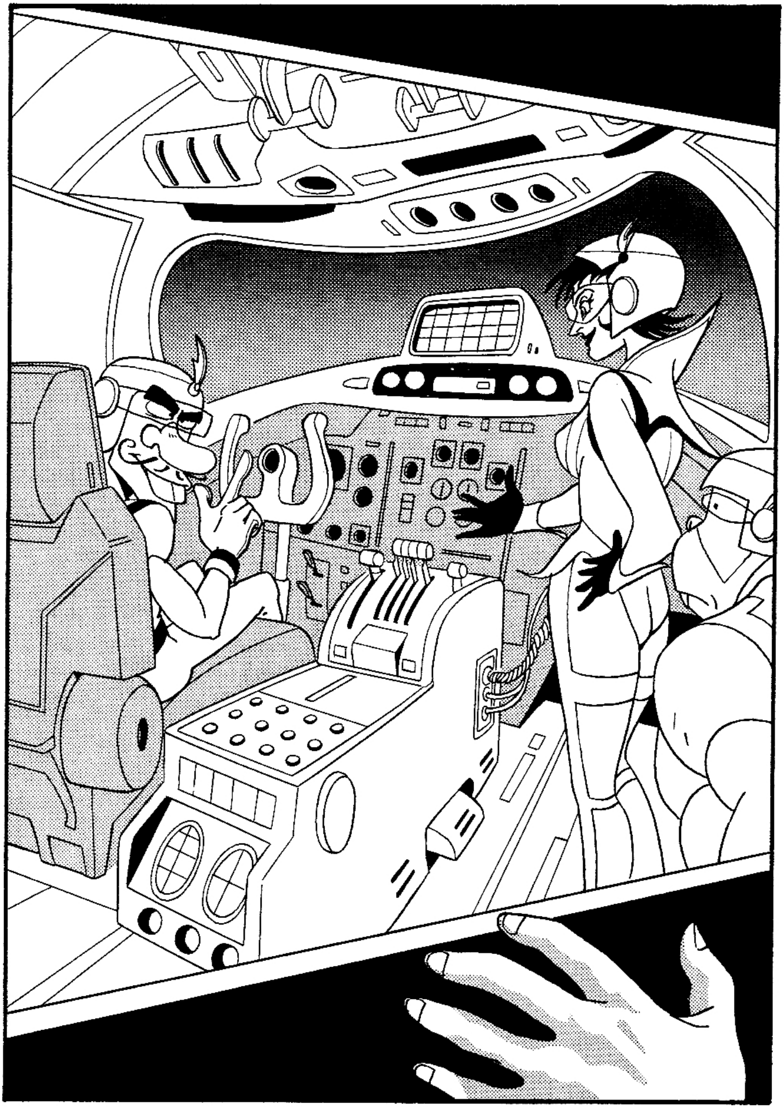
ユキは、ハッとした。
そうだ！
タイムリース社には、スーパー・ヒーローの〝イッパツマン〟がついていたんだ。
一度は逢ってみたいと思っていた正義の使徒、イッパツマン。
イッパツマンが登場するためには、よほどの事件がなければ……。
もちろん、事件なんかあってはならない。
しかし、イッパツマンの素顔も見たい。
そんな複雑な気持ちで、ユキはランたちとトッキュウマンモスに乗ろうとした。
そのユキにランたちが、事故も続いているから、同乗するのをやめるようにと忠告した。
だがユキは、乗ると約束したのだし、今までにも、危険な取材の経験はあるから、絶対にこの仕事には参加する、と主張して譲らなかった。
強いユキの意思に、ランたちもついに折れて、同乗を許可した。
トッキュウマンモスに乗った四人は、出発準備を完了した。
指令室から、豪の声で、タイム・ワープ発進前の秒読みが聞こえてくる。
「……スリー・ツー・ワン・ゼロ・発進！」
途端に、透明なタイム・カプセルの中に紫色のガスがわきあがり、リング状の電磁波が交錯して、トッキュウマンモスが大回転を始めた。

あまりのショックに、慣れていないユキはフウッと気を失ってしまった――。
読者諸君、ここでまた、話をマクア・リース西部支社に戻すことをお許し願いたい。
ムンムンたち三人組の後を追って、おれは支社裏にある車庫の地下倉庫に入った。
だが、うっかり出るのが遅れたばかりに、地下にひとり残されてしまった。
ペンダントの通信器で、河合ユキに連絡しようとしたが、磁気バリヤーが張ってある地下からは通信もできない。
こうなったら、明日の朝、ムンムンたちがフランスのブルターニュへシャレコーベ・バギーで向かうのに、隠れてついていくしかない。
その上で、デーモン会長や三人組の悪事を、新聞紙上でたたいてやる。
そう決めたおれは、とりあえず、シャレコーベ・バギーを調べることにした。
奥の倉庫いっぱいに設置されたタイム・ワープ用のカプセル内に、不気味な形のシャレコーベ・バギーは置かれてある。
幸い、バギー内に入るドアには、キーがかけてなかった。
操縦席(コックピット)には三人がかけられるように座席が組まれ、その前には複雑な計器やレーダー、モニター・テレビ、タイム・ワープ用のコンピューターなどがギッシリ並んでいる。
座席の後部の左上には機銃射撃用台座と回転席が設けられ、その下にも種々のメカが組み

こまれていた。
その右側の隅には、縦横一・五メートルくらいのロッカーが上下に二段ある。
上のロッカーをあけると、中にはカビ臭い作業着と一緒に、古い型のカービン銃やルガー式の拳銃（けんじゅう）が数丁と弾丸の入った箱が七個、放りこんであった。
おれは、もしものときの護身用に、ルガーを一丁と弾丸一箱を取って、上着のポケットに入れた。
下のロッカーには、缶入りの乾パン、インスタント・ヌードル、缶コーヒー等が埃（ほこり）をかぶって雑然と入れてあった。
下のロッカーを整理したら、なんとか、人ひとり入るスペースができた。
そんなことなどしているうちに、夜半近くになった。
おれは、ロッカーに入って、晩飯がわりに乾パン一袋と缶コーヒーをとった。
乾パンは少しカビ臭かったが、とにかく空っ腹は落ち着いた。
空腹が収まると、急に睡魔が襲いかかり、おれはいつの間にか眠りこんでいた。
見渡す限りの大氷原を、おれは駆けていた。
おれの前方に、河合ユキが見えたからだ。
なぜか、ユキに危険が迫っていると感じたおれは、焦っていた。

ようやく、ユキまであと三メートルのところまで来て、おれは氷の斜面に滑って倒れた。
ユキがおれを助けようとして、手を差しのべてきた。
このとき、氷の大地がゴーッという音とともに振動を始めた。
途端に、地面がまっぷたつに裂けて、アッという間もなく、おれは暗黒のクレバスの中に落下していった……。

ブルルル……という振動音で、おれは〝悪い夢〟から目覚めさせられた。
そうだ、おれはシャレコーベ・バギーのロッカーの中にいたんだっけ。
ロッカーの戸の隙間(すきま)から入る光で腕時計を見ると、すでに朝の七時を回っていた。
前の操縦席(コックピット)に人の気配がする。
おれは、ロッカーの戸を一、二センチばかり開いて覗いた。
いるいる。
ムンムン、コスイネン、キョカンチンの三悪が操縦席(コックピット)にいる。
今の振動音はエンジン・テストの音らしい。
三人は、いつものサラリーマンの服は脱ぎ捨てて、妙なデザインの戦闘服を着ていた。
ムンムンが、ここでも指揮官の役をしているようだ。
「コスイネン、タイム・ワープの準備はできてるね？」



「ハイハイ、いつでも出発オーケーですよ、ムンムン様！」
「キョカンチン、武器の点検はすんだんだろうね？」
「全部、整備ずみであります！」
「それじゃ、ちょっと早いけど、出かけようかね」
と、いったとき、プーッとおかしな音がした。
「アーッ、またコスイネン、漏らしたね！」
鼻をつまみながらムンムンが追及するのに、コスイネンが手を振って、
「ぼくちゃんは、そんなはしたないことしませんよっ、キョカンチンでしょ！」
それに答えて、キョカンチンが、
「いや、今の音はテレビ電話の発信音であります！」
「ほれ、見なさい、ぼくちゃんじゃないでしょ！」
「わかったよ、そんなら早く、テレビ電話をつけるんだよ！」
「フン、ぼくちゃんばかり疑うんだから。もォ……」
ブツブツこぼしながら、コスイネンは前のボタンを押す。
と、前のテレビ画面に、パッとデーモン会長の顔が映し出された。
「アッ、またまた、会長！……」
三人が驚くのを無視して、デーモンが、

「今日の予定を一部変更する！」
「変更って、何かあったんですか？」
「ウム、実はタイムリース社がトッキュウマンモスで、同じフランスのブルターニュの森へ聖水を運ぶことになった……」
「聖水を、一体だれに運ぶんですか？……」
「予言者のノストラダムスにじゃ」
「ヘェッ、ノストラダムスに。なぜですか？」
「そんなことは、後でわかる。お前たちの使命は、トッキュウマンモスを襲い、その聖水の瓶を破壊すること、その後で黄金の十字架を壊すのじゃ！」
「はい、それが、会長のためになるんでしたら……」
「わしだけではない。お前たちの夢をかなえるためにもなるといったじゃろうが！」
「そ、そのためなら、聖水でもなんでもぶち壊しちゃいますです、ハイ！」
「よいか、決してノストラダムスに聖水を渡すなよっ、わかったら直ちに出発せい！」
テレビ画面から消える会長に向かって、三人は右手を胸に当てて敬礼をしながら、
「イエス・ダーッ！」
と叫んだ。
ロッカーの中から、覗いていたおれは愕然とした。

デーモン会長は、なんの目的か知らないが、タイム・リースの運搬車、トッキュウマンモスを襲わせて、聖水の瓶を破壊しようとしている。
一昨日、ユキと連絡した際に、ユキは（今度のタイム・ワープ運搬には、乗せてもらえるんだ）と、喜んでいた。
そのタイム・ワープ用のトッキュウマンモスを、この三人組が襲おうとしているんだ。
おれは、ユキにふりかかる危難から、なんとしてでも彼女を助けなければならない！
それには、フランスのブルターニュの森へついてからでも遅くあるまい。
必ず、必ず……
ユキを守ってみせる！
おれは、固く決意しながら、ポケットの中のルガーを握り締めた。
その間にも、ムンムンがシャレコーベ・バギーの発進指揮を取っていた。
「西暦一五五〇年のフランス、ブルターニュへ発進！」
コスイネンが、タイム・ワープのボタンを押した。

PART・7　TRY AGAIN

ノストラダムスが怒った！

ちょうどそのころ、タイムリース社から発進したトッキュウマンモスは、ようやく、時間の壁を脱して、西暦一五五〇年側のタイム・サッシュ（時間帯）にかかっていた。

一時、気を失っていた河合ユキも、ランの手厚い介抱で気がついた。

操縦席（コックピット）では、2―3が得意のカラオケセットで〝峠（とうげ）の我が家〟を歌っていた。

隣の座席では、ハル坊もハミングで2―3の歌に調子を合わせていた。

2―3は、ユキが気がついたのを見ると、

「やあ、ユキちゃん、お目覚めになったキャーモ。もう、気分は治ったのかナモ？」

「ええ、ちょっと、フラッとしただけだから……」

と、強気になっていうと、ハル坊が、微笑しながら、

「フラッと、二時間も寝てたんだもんね！」

「アラッ、そんなにぃ！……」

ユキは、急に恥ずかしくなって、

「皆さん、ごめんなさいね、タイム・ワープって初めてなもんだから」

素直にあやまるのに、ランがニッコリうなずきながら、
「今、ちょうど、十六世紀のブルターニュの空間帯に入ったとこよ」
「マア、もう着いたの……」
ユキは、シート・ベルトを外して深呼吸すると、窓外に流れるタイム・トンネルの光景に見入った。
薄いブルーとピンクの入り混じった光の川を、トッキュウマンモスは全く、振動もせずに移動していく。
ハル坊が2―3にいった。
「2―3、カラオケはもういいから、ノストラダムスについての情報データの説明をしてくれよ」
「OK！　えー、医者だったミシェル・ノストラダムスは、南フランスの町サロンを襲ったペストから町を救ったんだそうだガナ。まあ、その噂が首都パリの王、アンリ二世の耳に入り、宮廷に呼ばれて政治上のことや運勢についての相談にものるようになったんだワサ」
「フーン……、そんな人がなんで、一九九九年七月から聖水を運ばせるんだろ？」
「アア、それはきっと、ノストラダムスが書いたっていう『諸世紀（しょせいき）』に関係があるんでないキャーモ」
ユキは、聞いていられなくなって口を出した。

「その『諸世紀』って、人間の将来を占う大予言の本でしょ？」

2―3は、後ろからいきなりされた質問に、驚きながらも、

「そのとおりだナモ！」

そのときまで黙っていた、ランが、

「実はね、ヒゲノ部長から、これは科学的な根拠(こんきょ)がないから、黙っていてくれっていわれたことなんだけれど……（といいかけたが）やっぱり、やめとこっと！」

と、考えこむのに、ハル坊が、

「アアッ、きったねえよ、ラン姉ちゃん、そこまでいったら話してよ！」

「そうよ、非科学的なことなら、なおさら割り切って話してもいいじゃないの」

好奇心の固まりみたいなユキの誘導に、ランもうなずいて、

「それじゃ話すけど、ノストラダムスさんから依頼のあった聖水は……」

と、操縦席(コックピット)の前の棚に固定してあった、聖水入りの箱を示して、

「……神の涙として、その教徒たちに守られて、秘密のうちに世界各国を回ってきたらしいの。それが、やっと、今年の春、ローマ法王庁に納められたっていうワケ」

「それで、その聖水をノストラダムスさんは何に使うのかしら？」

「ブルターニュの森にある、魔界からの出口を封じるためだっていってたわ」

「魔界の出口だってぇ……」

ハル坊が叫んだが、ユキもランの言葉に唖然とした。
ランは、言葉を続けて、
「ユキさんが先刻いってた『諸世紀』にも書いてあったように、一九九九年七の月十三日は、一万年の眠りから覚めて、悪魔が大地から甦る日に当たるらしいの……」
「悪魔の復活だナモ！」
2―3が、真面目な顔つきで混ぜっ返すのに、
「だから、出口をふさぐのね！」
ユキは、興奮をおさえきれずに叫んだ。
ランはうなずいて、
「そのための儀式を知っている者は人間界ではノストラダムスさんだけらしいわ」
「それで、聖水を運ぶのだナモ？」
と、2―3がいうのに、
「信じられないなぁ、そんなこと！」
ハル坊が頭を振っていうと、ランがプッとふくれて、ぶつまねをしながら、
「ホラ、ハル坊だって、そういうでしょ、だから、話すなっていわれたのよ！」
「ごめんよ、おいら、そんなつもりじゃ……」
そのとき、急に、窓の外がパアッと明るくなった。

一同が見やる窓外には、美しい緑の森林が広がっていた。
「ブルターニュだわ!」
ランが叫んだ。
「十六世紀のフランスに着いたのね!」
ユキも感激の叫びをあげた。
「ノストラダムスさんは、一昨日パリを立って、もう、ここに着いているはずだがナモ」
2―3が、窓の外を見ながらいった。
ノストラダムスを捜すために、ランと2―3がトッキュウマンモスから降り立った。
ハル坊とユキは、もしも何かあった場合を考えて、聖水の瓶とともにトッキュウマンモスの中に残った。

これは、後に、タイムリース社の円矢営業部員に聞いた話をまとめたものである――。
そのころ、六十歳の坂を越えたノストラダムスは、パリからブルターニュに向かう馬車の中で、深く瞑想にふけっていた。
隣の席に、聖水の注文を受けた、タイムリース社パリ出張所員の円矢五郎が座っていた。
円矢は、まだ、独身の二十五歳で、その名のようにまるまるに肥えた巨体の男である。
円矢は、鶴のように痩せた身体を宮廷用の黒い衣服に包んだ、隣に座る老人を見やりなが

ら考えた。

思えば、ノストラダムスは数奇な運命を背負うために生まれてきたようなものだった。

幼児期にある事故に遭い、それ以来、彼は人間の未来を見透(みとお)す力を得ることになった。

ときのフランスの王、アンリ二世につかえるようになってから、彼は政策面や運勢上の相談役になった。

だが、永くない命運を知り、彼の見透せる〝人類の未来〟について、書物にして残す決心をした。

それが、『諸世紀』だった。

一九九九年七の月の十三日、その日、人類滅亡を企(たくら)む者がいる。

それは、どのような姿形で現れるのか、ノストラダムスの英知をもってしても見透すことはできなかった。

しかし、同じフランスのブルターニュの森に古来からあるという、魔界からの出口にそのキーがあることだけはわかってきた。

さらに、その出口をふさぐ力は、人類滅亡に当たる日の聖水にしかないことも。

ノストラダムスは、パリに新設されたタイムリース社・1950営業所に、一九九九年から聖水を運ぶように発注した。

神は、自ら創造した人間の一部が、邪(よこしま)な考えを起こしたことを悲しんで、涙を流された。

そのとき、落ちる涙を盃に受けたのが、聖水とされている。
人類の未来を救う、その聖水が今日、手に入るのだ！
やがて、ノストラダムスの乗った馬車は、ブルターニュの森の中央あたりにある〝十字の道〟と名づけられた、起伏のある草地に到着した。
ノストラダムスは、御者に馬車を止めさせると、円矢と降り立った。
そこから、七十メートルばかりの斜面を登ったところに〝暗黒の石塔〟と土地の者たちから呼ばれている小型のピラミッドがあるはずだ。
ピラミッドとはいっても、その高さ三メートル、縦、横八メートル程度の石積みの塔で、このあたりの人はだれが、いつつくったということも気にかけていなかった。
だが、ノストラダムスは、この塔が一万年前、人間以外の者によってつくられたことを知っていた。
ノストラダムスもこの土地は初めてだが、迷うことなく、彼の足は〝暗黒の石塔〟に向かって歩き出していた。
彼の透視力は、パリから百キロ離れた場所に落ちている、一本のピンでも見つけ出せたのだから。
そして、ノストラダムスは、間もなく、彼自身にふりかかる恐るべき体験も予知していたのである。

一方、シャレコーベ・バギーで、タイム・ワープしていたムンムンたちは、トッキュウマンモスよりも十五分早くブルターニュの森についていた。
それはまた、ノストラダムスが到着するよりも七分早かった。
トッキュウマンモスよりも、だいぶ、タイム・ワープ性能が劣る、シャレコーベ・バギーが、後から出発したのに、ひと足早く到着したのには理由があった。
それも、後でわかったことだが、デーモン会長がシャレコーベ・バギーのメカに、何かを細工して、パワーアップしたためらしい。
ムンムンたちの、後部ロッカー内に隠れていたおれは、出発時とついたときの振動で、身体のアチコチをぶっつけて、かなりグロッキーになっていた。
考えてもみたまえ。宇宙飛行士がシートベルトもなしで、大気圏に突入したようなものなのだから。
三悪党たちは、トッキュウマンモスを迎え撃つ準備を始めたが、キョカンチンが、
「自分は腹が空いたであります、何か喰う物はないでありますか？」
と、言い出したのに、ムンムンが呆れて、
「お前は何をやるのにも、お腹が空くんだねぇ！」
「腹が空いては、戦はできんのでありますからして……」

　このとき、前方の草地の斜面を見ていたムンムンが叫んだ。
「やっ、あそこを歩いていくのはノストラダムスじゃないかい！」
　その声に、ロッカーのほうに向かっていたキョカンチンも、コスイネンも窓辺に駆け寄り、
「そうですよ、間違いなくノストラダムスですね！」
「それでは、あの丘の上にあるのが、悪魔封じのピラミッドでありますな！」
　コスイネンがいうのに、キョカンチンも斜面の上の塔を指して、
「そうらしいね。すると、あそこに黄金の十字架もあるってワケだねぇ！」
　ムンムンはニヤリと微笑してうなずいた。
「と、いうことは、まだトッキュウマンモスのやつらは、ついていないんですね！」
「それでは、ノストラダムスをやっつけるでありますか！」
　キョカンチンが指をボキボキ鳴らしてイキがると、
「いや、もっと面白い方法がありますよ」
　と、コスイネンが何やらムンムンに耳打ちした。
「フン、コスイネンにしちゃ、いいアイデアじゃないか、一応、やってみようかい」
　三悪は、うなずき合ってガタガタと外へ飛び出していった。
　おれも、素早くロッカーを出て、三悪を追った。

ノストラダムスは、斜面の上に建つ〞暗黒の石塔〟を見上げて、一瞬身震いをした。
彼の目には、塔にある〞黄金の十字架〟が見える。
一万年前、悪魔を封じこめるために神が置いたものだ。
だが、その一万年の間に、悪魔は大地の底で力を蓄え、今日にも黄金の十字架を破壊して、飛び出してくるかもしれない。
大地の底に封じた者への復讐のために。
悪魔と結託する者は人間界にも多い。
悪魔と、邪悪な人間とが手を組んだとき、人類世界に待っているのは破壊と破滅だけだ。
そんなことを考えていた、ノストラダムスたちの背後から、
「もしもし、ノストラダムスさんじゃないですか？」
と、間の抜けた声がした。
ノストラダムスたちが、ハッとかえりみると、妙な衣服の女がひとりと男がふたり立っている。
まるで、劇場で見る道化役のようだ。
「あなた方は、どなたじゃな？」
ノストラダムスがけげんそうに聞くと、女が、
「あたしたちは、タイムリース社の配送部員ですよ」

円矢が、前に出て、三人の顔をしげしげ見ながら、
「あれぇ、ウチの会社に君たちいたっけ？」
それに小柄な男が、揉み手しながら答えた。
「ええ、ぼくちゃんたちは昨日から配送部についた、ホヤホヤの新人なんですの！」
「まあ、だれが持ってきても構わないけど、それで、聖水はどこにあるんだい？」
円矢の問いに、ヤケにゴツい大男が、ポケットから透明な液体の入っている二リットル瓶を取り出し、ノストラダムスに差し出した。
「これが、ウワサの聖水であります！」
円矢が呆れて、
「君たち、お客様に届ける品物はもっと大切にしなくちゃだめじゃないか！」
それに女が答えて、
「だって、タイムリース社はケチだし、いつもいい加減な仕事しかしないじゃん！」
「そうよ、給料だって、いつも遅れて出るんですからね！」
小男も調子を合わせると、円矢がオタオタして、
「き、君たち、なんてことをお客様の前でいうんだ！」
それを、ノストラダムスが制して、
「内輪もめはやめなさい！　それより、早くその聖水を……」

と、大男から奪うように瓶を受け取り、中をジッと見つめていたが、
「なんじゃ、これは偽物だっ、ただのソーダ水ではないか！」
怒ってノストラダムスは瓶を足元にたたきつけた。
瓶は割れて、中の液体は大地に流れ出し吸いこまれて消えた。
「何するんだい、せっかく運んできてやったものをさ！」
女がわめくのに、小男もノって、
「偽物でも、本物でも、ちゃんとお金はもらいますからね！」
と両手を突き出したとき、五人の後ろから、
「ノストラダムスさん、その三人組は偽者です！」
と、若い男が、ルガーを構えながら現れた。
「あれっ、あんた、徳種さんじゃない！……」
三人組の男女は、その男を見ると、ギョッとしたように、
「ほんと、どこから出てきたのよ！」
若い男は、ニッコリ微笑すると、
「お前たちのシャレコーベ・バギーに乗ってきたのさ！」

PART・8 CLIMAX

決戦！ イッパツマンVS魔界王

さあ、お話が大詰めにかかったところで、とりまとめて、おれの報告で通していこう！

ムンムンたち三悪党は、つけてきたおれのために、ノストラダムスをだましそこなって、頭にきたらしい。

「ウーンッ、もう、よけいなところにでしゃばってきてからに！……」

ムンムン姐御がわめいたとき、ルガーを構えたおれの後ろから、

「またあんたたち、クリーン悪トリオじゃないの！」

と、ランと2－3が来たもんだ。

思わず、おれが振り返った——。

その一瞬の隙を狙っていたキョカンチンが、足元の小石をスカーンッと、おれに目がけて蹴りあげた。

小石はおれの右肩に当たり、「アッ」と、叫んで、おれはルガーを取り落としてしまった。

「待ってました！」

と、コスイネンが素早くルガーを拾って構えた。

これで、形勢は完全に逆転してしまった!

なんて、おれは締まらないんだろう。

後ろから来たランも、2—3も、おれのドジにガックリしたんじゃないかな。

「ホーッ、ホッホッホホホ……」

勝ち誇ってムンムンが笑えば、クリーン悪トリオに勝とうというのが無理なのよね!」

「ぼくちゃんたち、クリーン悪トリオに勝とうというのが無理なのよね!」

「こいつら、ナマスにしてやるでありますか!」

キョカンチンが、デッカイ両手を広げて迫るのに、ムンムンが、

「それより、聖水とやらをこちらにもらおうじゃないか!」

「そうそ、聖水さえもらえば、ぼくちゃんたちの夢が全部かなうんですからね!」

そのときまで、様子を見守っていたノストラダムスが、

「待て、お前たちは、とんでもないことに加担しているんだぞ! あの聖水で悪魔を封じなければ、お前たちもすべてが滅んでしまうのがわからんのか!」

必死に叫ぶ。

だが、ムンムンたちはせせら笑いして、

「ヘン、この世に悪魔なんているもんかね!」

「そうですよ、迷信を信じるなんて、あんたも最低ね!」

「自分も信じないであります！」
そこで、おれはいい返してやった。
「いいか、お前たちの信じているデーモン会長は、人間じゃないんだぞ！」
「ヘエッ、人間じゃなけりゃあなんだっていうんだい！」
「カメラのレンズにも姿の映らない化け物だ！」
「ホーッ、ホッホッホホホ……、冗談キツイよ、坊やは！　さあ、お遊びはこれぐらいにして、こいつらを捕虜にして、聖水を奪い取るんだ！」
ムンムンの指令に、コスイネンとキョカンチンは、
「イエス・ダー！」
と、応じるや、また、おれたちのほうに迫ってきた。
おれは、ランたちや、ノストラダムスをかばってジリッジリッと後退するしかなかった。
と、このとき、ガラガラッという音がしたと思うと、おれたちとムンムンたちの間に、でつかいトッキュウマンモスが走りこんできた。
「徳種さーん！」
おお、窓から叫んでいるのは河合ユキだ。
「ランねえちゃんたち、早く乗りなよ！」
ハル坊も操縦席で呼んでいる。

おれたちは、ノストラダムスと一緒に、ムンムンたちが右往左往している間に、トッキュウマンモスに乗りこんでいた。
ムンムンが悔しがって、わめき散らす。
「コスイネン、キョカンチン、早く、シャレコーベ・バギーで、やっつけるんだよ！」
さて、おれたち、つまり、ラン、ハル坊、2―3、ノストラダムス、円矢、ユキ、おれの計七名は、トッキュウマンモスに乗りこんだ。
だが、ノストラダムスは焦っていた。
今日の正午までに〝聖水〟を使わなければ聖水は無効になるからだ。
それだけですむならよいが、ちょうど、そのとき、人類を破滅させるために、大地の底から復讐の鬼と化した〝悪魔〟が復活する。
おれが腕時計を見ると、正午までに、あと一時間もなかった。
トッキュウマンモスを操縦しているランは、〝暗黒の石塔〟に向かった。
しかし、シャレコーベ・バギーに乗った、三悪トリオは機関銃を撃ちながら接近してきた。
「徳種さん、ねえ、どうしたらいいの？」
ユキもこんなときは女の子だ。
目に涙までためている。

「ハル坊、豪さんにピンチ通信で救援を頼むのよ！」
ランが叫ぶのに、ハル坊はニッコリ微笑して、
「ＯＫ！　イッパツマンを呼ぶんだね！」
ハル坊はポケットから、小型通信器を取り出すと、
「豪さん、こちら大ピンチ！　大ピンチ！　大至急、イッパツマンの救援を頼む！」

このとき、茫然としていたユキは大切なことを思い出した。
「アッ、そうだっ、ロッキーのビデオカメラがあったっけ！」
と、慌てて、ポシェットからコンパクトを出して、鏡を外した。
鏡の裏側から、無線ビデオモニター用の液晶テレビが現れた。
ユキがスイッチを入れると、ちょうど、豪が、イッパツマンに転身（分身）するための、転身カプセルに入るところだった。
チワワのロッキーは、チャンと主人、ユキの命令を守っていたのだ。
だが、残念なことには、イッパツマンの転身に高圧電流が流れるためか、ロッキーの首のビデオカメラには何も映らなくなってしまった。
「悔しい、せっかく、イッパツマンの転身を見たかったのに！」
ユキと同じように、おれも残念だった。

しかし、そんなのんきなことをいってられないんだ。
ムンムンたちがシャレコーベ・バギーで、トッキュウマンモスの後部に乗ってきたからだ。
撃ち出される機関銃の弾（たま）がトッキュウマンモスのハッチにガンガン当たり始めた。
ついで、ムンムンの勝ち誇った声が聞こえてきた。
「やい、お前たち、命が惜しかったら、聖水をこちらにお渡し！」
それを聞きながら、ランがハル坊に、
「ハル坊、豪さんとの連絡は取れたの？」
「うん、もちろん、取れたよ。だけど、どうしたのかなぁ？」
トッキュウマンモスの上ではキョカンチンが、ハッチをはがそうと引っぱり始めた。
そのとき、天空の一角からジェット機のような轟音（ごうおん）とともに、三角型の航空機が飛来した。
そうか！　あれが噂の、イッパツマンが乗る弾丸ブースターなんだ。
ムンムンたちが、その弾丸ブースターを見やって、
「ヤヤッ、あれは、鳥だ！」
「ヒコーキだ！」
「いや、空飛ぶ宅急便屋さんだよ！」
さあ、ここからは、オナジミのパターンだが、アクションも忙しくなるので、細かい描写

は、しばらく省略させていただこう。

弾丸ブースターから飛び出したイッパツマンは滑空してきたと見るや、トッキュウマンモス上のクリーン悪トリオをカールくなぎ倒した。

トサカに来たムンムンたちは、シャレコーベ・バギーに乗って、機関銃を撃ちまくるが、超人イッパツマンには豆鉄砲のようなものだ。

イッパツマンはヒラリとシャレコーベ・バギーの上に飛び乗ると、機関銃の銃身に手をかけてグイッと、まるで飴細工(あめざいく)でもするようにひん曲げてしまった。

ムンムンは、コスイネンに命じて、巨大プロレスマン型のメカを、ワープ宅急便で呼ぶ。

コスイネンの要請で、飛んできたメカは総身十メートルで、身体中に機械部品が飛び出した、キッカイな形のロボ〝ガラグラマン〟のボディだった。

そのボディの上に、シャレコーベ・バギーが合体、ガラグラマンができあがった。

ガラグラマンは、シャレコーベ・バギー上のイッパツマンを巨大な腕で弾(はじ)き飛ばす。

さらに、大地に倒れたイッパツマンの上から、大足で踏(ふ)みつけ三千キロの重圧をかける。

イッパツマンは苦痛に耐えかねて、

「クーッ、ランちゃん、三冠王の出番だ！」

「わかったわ、イッパツマン、すぐ、用意するわ！」

途端に、トッキュウマンモスのボディが上下に分離して、その上部がリリーフドンとなる。

ボディ下部は大空にジャンプして着地し、腕をグッと前へ突き出し三冠王のボディとなった。

イッパツマンは必死でガラグラマンの足の下から抜け出し、飛来してきた弾丸ブースターに飛び乗って、トッキュウマンモスの下部ボディと合体。

三冠王が完成したのだ。

「三冠王、ここに見参！」

三冠王対ガラグラマンの決戦は、ガラグラマンが身体中から次々にメカを撃ち出して攻撃するのに対し、三冠王は三冠王トマホークでメカをたたき落とす。

そして最後にトマホークを大上段に振りかぶると、

「三冠王、カブト割り！」

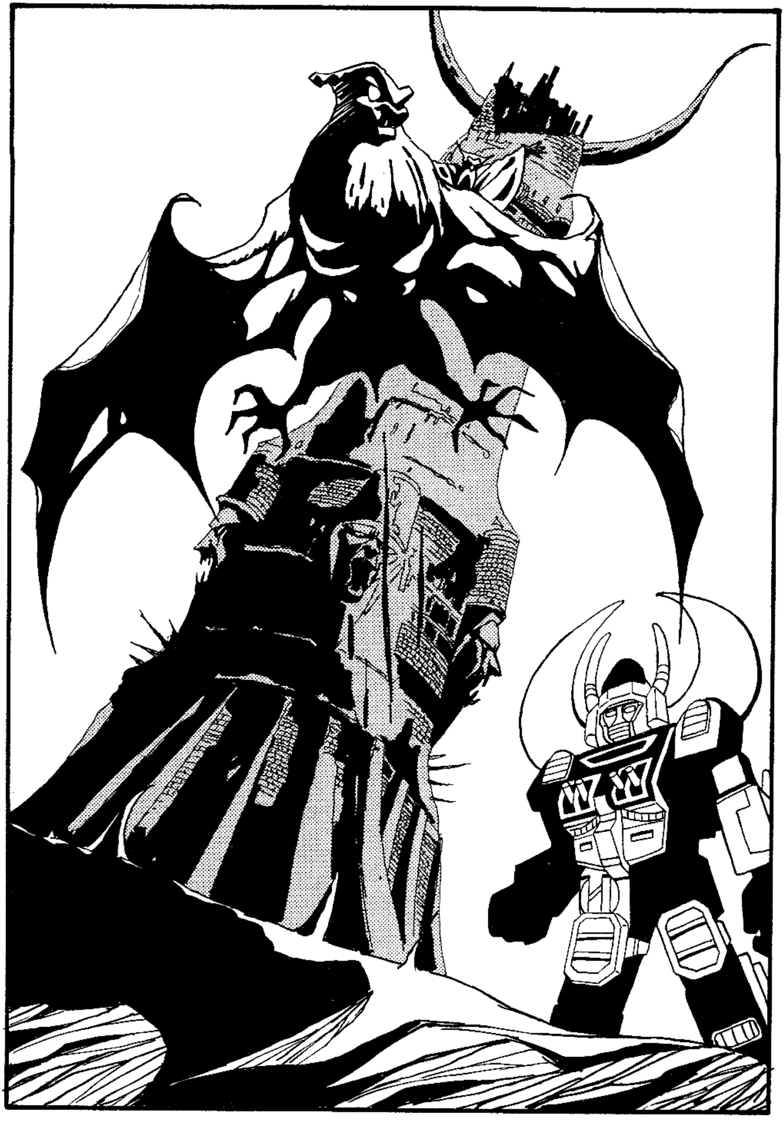
と、ガラグラマンをまっぷたつにたたき切る。

ガラグラマンは爆発大破したが、ムンムンたち三悪は一瞬早く、シャレコーベ・バギーで脱出していた。

「三冠王、バンザーイ！」

「イッパツマン、ありがとう！」

勝利した、三冠王、イッパツマンに、ランとユキは黄色い声で歓声をあげた。



一同は、リリーフドンから出てきて、喜び合った。
三冠王からイッパツマンも降り立ち、一同と手を取り合った。
おれも嬉しくなって、ノストラダムスの手を握ると、
「さあ、ノストラダムスさん、これでなんの邪魔もなくなりましたね！」
ハル坊も、コックリうなずいて、
「さあ、早く、聖水をかけに行こうよ！」
だが、ノストラダムスは冴えない顔つきで、聖水の瓶を抱き締めると、
「いや、まだ、邪悪との闘いは終わっていない、あれを、見られい！」
と、一方の空を指さした。
ノストラダムスの指した空の一角から、ひとつの黒いシミのような点が現れたかと思うと「アッ」という間に暗雲が、全天をおおいつくした。
さらに、その雲の奥から、不気味な笑い声も聞こえてきたのだった。
「グワッハッハハハ……」
三冠王が、声のするあたりを見つめたとき、不意に暗雲の中から黒い鳥が飛来してくるのが見えた。
それは、翼の全長が、十数メートルはあろうという巨大なこうもりだ。
おれは、茫然としているユキに、

「ユキちゃん、早くカメラを！」
と、写真で記録を取るように叫んだ。
ユキは、慌てて、カメラを大こうもりに向けるとシャッターを続けて押した。
「悪魔のしもべじゃ、邪悪の化身が来たのじゃ！」
ノストラダムスが両手で顔をおおったとき、ゆっくり降下してきた大こうもりの背から、真紅のマントを翻（ひるがえ）しながら、ひとりの男が〝暗黒の石塔〟の上に降り立った。
おれは、愕然として目を見はった。
マクア・リース社のデーモン会長だったからである。
デーモンは、ノストラダムスとイッパツマンに向かって、傲然と、
「わが輩は、悪魔サターン様につかえる魔界王デーモンだ！
一九九九年七月十三日、サターン様が再び地上に復活して、神や人間どもに復讐し、壊滅させる日が、ついにやってきたのだ。
わが輩は大地の扉をあけにきた。
ノストラダムスよ、そして、正義の使いとかほざくイッパツマンよ、聖水を捨てて、サターン様のしもべになれ！」
イッパツマンは、ヒラリと塔の上に飛びあがって、デーモンの前に出ると、
「なにおっ、神をも恐れぬ魔界の鬼め、悪魔の復活なぞ、このイッパツマンが許しはしない

ぞ！」
　と、身構えるのに、デーモンは、笑って、
「グワッハッハハハ……、そうか、それでは、わが輩の本当の姿を見せてやろう！」
デーモンは大地に降り立ち、真紅のマントで、弧を描く。
その瞬間、ゴオッと黒い竜巻が起こり、デーモンを包んだかと思うと、身長二十メートルに近い、翼と尾のある、見るからに醜怪な魔界王の姿に変身した。
魔界王は鋭い爪のある手で、イッパツマンをつかみつぶそうと追いかける。
「イッパツマン、三冠王で戦うのよ！」
ランの声に、イッパツマンは三冠王に飛び移り、操縦席におさまった。
「三冠王、見参！」
三冠王はトマホークや左手にしこんだミサイル銃で戦うが、魔界王の身体は、やはり刃物もミサイルの弾丸も受けつけない。
「三冠王、貴様の武器はそれまでか！　それでは、今度はこちらの番だ。この魔界剣を受けてみろ！」
　と、魔界王は背負っていた魔界剣を抜き放つと、三冠王の右腕を切り落とす。
　さらに、左腕も……。
イッパツマンは、ついに、三冠王を捨てて〝暗黒の石塔〟の上に立って、魔界王に最後の

決戦を挑む。
　この一戦に敗れれば、人類の最後となるのだ。
　だが、今、残された道はこれしかない。
「魔界王！　イッパツマンのサイコキネシスと勝負しろ！」
　魔界王は大笑すると、
「愚か者め！　人間の念動力などで、わが輩に勝てると思っているのか、来いっ、イッパツマン！」
　魔界王は、イッパツマンを吹き飛ばして、大地にたたきつければことがすむと考えていた。
　イッパツマンは最後の力のすべてを、魔界王の魔界剣一点に集中した。
　一同は、ジッと、息を殺して、この人類の運命をかけた闘いを見守った。
　魔界王の強烈なパワーが、イッパツマンに襲いかかった。
　イッパツマンは必死で、吹き飛ばされまいと、足元のピラミッドに力をこめた。
　魔界王の魔界剣が動いた。
　イッパツマンは、さらにサイコキネシスに集中した。
　魔界剣が宙高く飛んだ。
　剣は、大きな円を描くと、一直線に魔界王の心臓を貫いた！
「ギャッ、ギャオー！……」

凄まじい叫びをあげて、魔界王デーモンが〃暗黒の石塔〃をおおうように倒れた。
イッパツマンは、危うく、その下敷きになるのをまぬがれた。
このとき、ノストラダムスが、イッパツマンに近寄り、
「イッパツマン、魔界王は、また甦るぞ、早く、この聖水を！」
と、聖水の瓶を渡す。
イッパツマンは大きくうなずくと、瓶から聖水を〃暗黒の石塔〃と魔界王に注いだ。
その途端、見よ！
石塔に吸いこまれた聖水が、空中に噴きあがったではないか！
塔から上がり、塔に落ちる、巨大な聖なる噴水となったのだ。
七彩の虹がかかる噴水の中で、いつの間にか、魔界王の姿も消え去っていた。
ブルターニュの森に、再び平和が戻ったのである。

――完――

PART・9 EPILOGUE

それぞれの行方(ゆくえ)……

さて、これで、おれが体験した不思議な〝事件〟の話は終わった。
まさか、一九九九年七月十三日が、人類の最後の日となるなんてだれが考えたろう。
そして、また、それを救う鍵が、十六世紀の中ごろのフランスにあるなんて！
イッパツマンやノストラダムスが活躍したおかげで、今、おれたちは平和に暮らしている。
マクア・リース・エンタープライズ社は、経営者のデーモン会長を失った上、数々の悪行(あくぎょう)が表沙汰(おもてざた)になって倒産した。
それには、もちろん、おれたちの調査結果も役に立ったことは間違いない。
イッパツマン、つまり、豪　速九は、フツーの人間として、放夢ランと近々結婚することになったと聞く。
ハル坊も、カッコイイ兄貴ができて、さぞかし、嬉しいことだろう。
2─3は、相変わらず、暇さえあればカラオケに熱中している。
全く、ロボットとはいえ、平和なやつだ。
ちなみに、あのクリーン悪トリオのことも書かないワケにはいかないだろう。

あの三人は、全く、ついてない。
運命の神に、きっと、見放されているんだろう。
初めに勤めた、シャレコーベリース社の会長は、宇宙から来たインベーダーだったし、失業の後、やっと、見つけたマクア・リース社の経営者も、魔界の王だった。
「人生、七転び、八起き」というが、この三人に幸せの日が来るのは、いつなのだろう。
マア、あまり、人間は欲ばると、ロクなことはないという見本なのかもネ。
一九九九年、八月。おれは、有給休暇を取って、カワユイ、河合ユキと一緒にハワイへでも行こう……。

(注) この作品は、事実をもとに創作されたフィクションです。
また、この作品に出てくる、個人名や、団体名は架空のものです。

新刊発売中

エニックス文庫
オリジナル小説シリーズ

★スペクタクルファンタジー巨編！

ドラゴンギア

小柳順治　定価480円

《光》と《闇》の果てしなき闘いのなか、過酷な運命に立ち向かうヘイゼルの冒険は、今ここに始まった。

★壮大な伝奇ロマン小説！

小説 天空戦記シュラト
――修夜転生――

あかほりさとる　定価390円

幻想的な世界を舞台にして、神々の壮絶な闘いを描く話題のＴＶアニメ、ついに小説として登場！

★あの人気アニメが甦る！

小説 科学忍者隊ガッチャマン
――コンドルは翔ぶ――

鳥海尽三　定価430円

強い感銘を与えた人気アニメ、待望の小説化。科学忍者隊誕生の軌跡をたどる、感動の迫力巨編。

★ミステリアス！　空想学園小説

センチメンタル・ハイ
――怪奇！　電影魔団の挑戦――

和智正喜　定価390円

謎と伝説の宝庫「愛秀学園」を舞台に息つく間もなく展開するストーリー。数々の怪奇現象をコミカルに描く。

●定価はすべて税込みです

エニックス出版局

エニックス文庫好評既刊

ヒーローのようにきらめいて
今、こころが熱くなる……

●オリジナル小説シリーズ

未来落語戦士　虎丸伝……………定価450円

学園テニスKIDS……………………定価430円

ピースランド殺人事件……………定価430円

●ドラゴンクエストブックシリーズ

ゲームブック　ドラゴンクエストIII

上勇者旅立つ 中伝説の宝珠を求めて 下決戦！アレフガルド 各定価494円

ゲームブック　ドラゴンクエストII

上勇者の末裔たち 下激闘！ハーゴンの神殿　各定価580円

ゲームブック　ドラゴンクエスト

上甦るロト英雄伝説 下死闘！竜王の島　各定価490円

●オリジナルゲームブックシリーズ

ゲームブック　ジーザス　定価550円

続々発売中！

●定価はすべて税込みです

ENIX

エニックス文庫

山本優（やまもと ゆう）　1946年12月24日生まれ。日本放送作家協会所属。代表作に『機動戦士ガンダム』『タイムボカンシリーズ』『銀河旋風ブライガー』などのほか作詞も。

曽田博久（そだ ひろひさ）　1947年10月23日生まれ。日本放送作家協会所属。代表作に『科学忍者隊ガッチャマン』『東映特撮戦隊シリーズ』などがある。

高山鬼一（たかやま きいち）　1936年5月17日生まれ。放送作家、児童文学者、油絵画家。代表作に『逆転イッパツマン』『いなかっぺ大将』(アニメ)などがある。

小説タイムボカン

——ヤッターマン・オタスケマン・逆転イッパツマン——

1989年12月20日　初版発行

著　者　山本優・曽田博久・高山鬼一

●　●　●

発行人　福　嶋　康　博

発行所　株式会社エニックス
営業部　東京都新宿区西新宿7－5－25
西新宿木村屋ビル5F ☎03(369)8982(代)
出版局　東京都新宿区西新宿7－3－4
仁杉ビル4F ☎03(369)8978(代)

印刷所　共同印刷株式会社

乱丁・落丁本はお取り替え致します
定価はカバーに表示してあります

©タツノコプロ
©Enix 1989, Printed in Japan

ISBN4-900527-23-8

ENIX FANTASY NOVEL

エニックス ファンタジーノベル 作品大募集

エニックス出版局では、読者の夢とロマンをかりたてるファンタジーノベルを募集しています。神話、伝説、ロマンス、ＳＦなど、あなたの最も描きたいファンタジーワールドにチャレンジしてください。迫る21世紀のファンタジーをリードする、スペクタクルなニューノベルを期待します。

――――エニックスファンタジーノベル応募要項――――

1.募集対象

愛と勇気に満ちあふれた未発表の創作ファンタジージュニア小説。

2.原稿枚数

400字詰原稿用紙90枚～110枚程度（ワープロ可）。原稿用紙５枚程度の概要を添付。住所・氏名・年齢・職業・電話番号（連絡先）・略歴を明記のこと。応募作品は返却しません。

3.原稿送り先

〒160　東京都新宿区西新宿７－３－４　仁杉ビル４階
株式会社エニックス「ファンタジーノベル事務局」宛
ＴＥＬ　03－369－8978

●優秀作品は、エニックスより単行本として刊行。出版後、著作印税をお支払いいたします。また、エニックス文庫のレギュラー作家としての道も開かれております。

郵便はがき

ENIX
きってを
はって下さい。

1 6 0

東京都新宿区西新宿7－3－4
仁杉ビル4F

（株）**エニックス** 出版局

「小説**タイムボカン**」係 行

この度は、**小説タイムボカン** をお買い上げいただき、ありがとうございます。お手数ですが、裏面のアンケートにおこたえ下さい。
次回の書籍作りの参考にさせていただきたいと思います。毎月末日抽選により、**ドラゴンクエストワールドグッズ**をプレゼントいたします。当選者発表は商品の発送をもってかえさせていただきます。

<table>
<tr><td>ご住所</td><td colspan="5">〒□□□-□□</td></tr>
<tr><td>フリガナ</td><td colspan="2"></td><td rowspan="2">電話番号</td><td colspan="2" rowspan="2">(　　)
－</td></tr>
<tr><td>お名前</td><td colspan="2">男・女</td></tr>
<tr><td>職　業
(学校名·学年)</td><td colspan="2"></td><td>年 令</td><td colspan="2">才</td></tr>
<tr><td>いつも読んでる雑誌</td><td></td><td>生年月日</td><td colspan="3">大昭　年　月　日</td></tr>
<tr><td>好きな有名人</td><td colspan="5">①　　　　②</td></tr>
</table>

89.12

エニックス文庫読者アンケート

★この本を何で知りましたか？

1.雑誌広告〔A.ファミリーコンピュータマガジン　B.ファミコン通信
C.ファンロード　D.コミックボックス　E.月刊ぱふ
F.その他(　　　　　　　　　　　　　　　　)〕

2.エニックスの本の中のチラシ（書名：　　　　　　　　　　）

3.店頭ではじめて見て

4.友人・知人の話から

★この本を買った理由は？

1.ストーリーが面白そう　2.カバーイラストがいい　3.値段が手ごろ

4.その他（　　　　　　　　　　　　　　　　）

★定価について

1.高い　2.ふつう　3.安い

★エニックス文庫以外でよく読む文庫は？

1.ハヤカワ文庫　2.角川スニーカー文庫　3.ソノラマ文庫　4.コバルト文庫　5.バンダイ文庫　6.講談社X文庫　7.徳間文庫

8.その他（　　　　　　　　　　　　　　　　）

★最近読んだ小説は何ですか？

書名（　　　　　　　　　）　作家名（　　　　　　　　　）

★今後エニックス文庫に登場してもらいたい小説家は誰ですか？

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

★この本を読んでの感想は？

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

ご協力ありがとうございました。

エニックスの本 好評既刊

■ドラゴンクエストブックシリーズ

●ドラゴンクエスト公式ガイドブックシリーズ

- ●ドラゴンクエストⅢそして伝説へ…公式ガイドブック
  ——B6判オールカラー・定価700円
- ●ドラゴンクエストⅡ悪霊の神々　公式ガイドブック
  ——B6判オールカラー・定価597円
- ●ドラゴンクエスト　公式ガイドブック
  ——B6判オールカラー・定価566円

●小説ドラゴンクエストⅡ[上]／[下]
——四六判豪華上製本・各定価1000円

●小説ドラゴンクエスト
——四六判豪華上製本・定価1300円

●ドラゴンクエスト　モンスター物語
——A5判オールカラー愛蔵本・定価980円

●ドラゴンクエストⅢ　知られざる伝説
——A5判オールカラー・定価700円

●ゲームブック　ドラゴンクエストⅢ
[上]勇者旅立つ　[中]伝説の宝珠を求めて　[下]決戦！アレフガルド
——文庫判・各定価494円

●ゲームブック　ドラゴンクエストⅡ
[上]勇者の末裔たち　[下]激闘！ハーゴンの神殿
——文庫判・各定価580円

●ゲームブック　ドラゴンクエスト
[上]甦るロト英雄伝説　[下]死闘！竜王の島
——文庫判・各定価490円

■オリジナルゲームブックシリーズ

●ゲームブック　ジーザス——文庫判・定価550円

■オリジナル小説シリーズ

●ドラゴンギア——文庫判・定価480円
●センチメンタル・ハイ——文庫判・定価390円
●小説天空戦記シュラト——文庫判・定価390円
●小説科学忍者隊ガッチャマン——文庫判・定価430円
●小説タイムボカン——文庫判・定価430円
●ピースランド殺人事件——文庫判・定価430円
●学園テニスKIDS——文庫判・定価430円
●未来落語戦士　虎丸伝——文庫判・定価450円

（定価はすべて消費税を含んだ価格です）

ISBN4-900527-23-8 C0176 P430E 定価430円
（本体価格417円・税13円）